ＩＳＳＮ　０９１８－９９０４

伊賀の考古資料１

研究紀要　第１６－３号

２００７（平成19）年３月

三重県埋蔵文化財センター

序

この研究紀要は、「伊賀の考古資料１」と題し、伊賀市内の考古資料を特集しました。

県内では、昭和の末から平成のはじめにかけて、大規模な開発事業に伴い、多くの遺跡の発掘調査が行われました。そのなかで現地での調査に比重がかたより、資料の公表が後手に回っていた現実があり、重要な資料が、ほとんど活用されないままとなっていたことは否めません。

三重県埋蔵文化財センターでは、この反省をもとに、公表が充分でなかった資料を逐次公表し、広く公開していきたいと思います。

平成19年3月

三重県埋蔵文化財センター

所　長　吉 水 康 夫

例　　言

1　本書は、三重県教育委員会が昭和59年度から62年度にかけて緊急発掘調査を実施した遺跡の発掘調査成果をまとめたものである。

2　本書で掲載する遺跡と調査年度、原因事業名、発掘調査現地担当は以下のとおりである。

北中溝遺跡（昭和62年度県営圃場整備事業）　調査担当：仁保晋作

高瀬遺跡　（昭和62年度県営圃場整備事業）　調査担当：服部芳人・田中久生

小上野墓ノ谷古墳（昭和60年度農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業）

調査担当：仁保晋作・前川依久雄

小上野西谷遺跡（昭和62年度農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業）

調査担当：田中久生

富岡前山古墳（昭和59年度農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業）

調査担当：田中喜久雄

3　本書のもととなる記録類および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

4　本書の作成業務は、支援研究課が行った。本文の執筆は穂積裕昌（Ⅰ～Ⅲ）・仁保晋作（Ⅲ）・山中由紀子（Ⅳ）・大川　操（Ⅳ）・竹内英昭（Ⅳ）が担当した。

凡　　例

1　本書で使用した地形図は、国土地理院発行の1/25,000地形図（『上野』・『伊勢路』・『阿保』・『名張』）、1/50,000地形図（『上野』）、伊賀市内旧市町村都市計画図である。

2　遺構平面図で座標表記があるものは、国土調査法の日本測地系による座標第Ⅵ系（旧国土座標）で表示している。地形図以外の方位は真北で示している。なお、磁針方位は西偏6°50′（平成12年度）である。

3　土層図の色調と土質は調査時の記録をそのまま用いた。

4　本書での遺構番号は、それぞれの遺跡単位で通番としている。

5　遺構番号の頭には、遺構の性格により、以下の略記号を付した。

ＳＡ＝柱列　ＳＢ＝掘立柱建物　ＳＤ＝溝　ＳＥ＝井戸　ＳＨ＝竪穴住居

ＳＫ＝土坑　ＳＸ＝墓・火葬穴・古墳周溝　ＳＺ＝落ち込みなど　Ｐit＝小穴・柱穴

6　本書での遺物実測図の縮尺は原則として以下のとおりである。

縄文土器等＝拓影（1/3）

石器＝剥片石器（2/3）、礫石器（1/3）、大型の石器（1/3）

金属製品、玉類＝1/2

それ以外＝1/4

7　本書内では、「つき」は「杯」、わんは「椀」に統一した。

目　　次

Ⅰ　伊賀市円徳院　北中溝遺跡……1

Ⅱ　伊賀市比土　高瀬遺跡　……8

Ⅲ　伊賀市真泥　小上野墓ノ谷古墳・遺跡　平田　小上野西谷遺跡

……２６

Ⅳ　伊賀市富岡　富岡前山古墳　……４０

挿図目次

第Ⅰ－1図　北中溝遺跡位置図　……2
第Ⅰ－2図　北中溝遺跡地形図　……2
第Ⅰ－3図　北中溝遺跡調査区位置図　……3
第Ⅰ－4図　北中溝遺跡遺構平面図　……3
第Ⅰ－5図　ＳＨ２　……4
第Ⅰ－6図　ＳＨ５・６・７・８　……4
第Ⅰ－7図　ＳＨ９・４・１１　……5
第Ⅰ－8図　ＳＫ３・13、遺物出土状況　……5
第Ⅰ－9図　北中溝遺跡出土遺物　……6
第Ⅱ－1図　高瀬遺跡位置図　……9
第Ⅱ－2図　高瀬遺跡地形図　……9
第Ⅱ－3図　高瀬遺跡遺構平面図　……10
第Ⅱ－4図　大溝ＳＤ１延長部の試掘坑　……13
第Ⅱ－5図　高瀬遺跡出土遺物①　……14
第Ⅱ－6図　高瀬遺跡出土遺物②　……15
第Ⅱ－7図　高瀬遺跡出土遺物③　……16
第Ⅱ－8図　高瀬遺跡出土遺物④　……17
第Ⅱ－9図　高瀬遺跡出土遺物⑤　……18
第Ⅱ－10図　高瀬遺跡出土遺物⑥　……19
第Ⅱ－11図　高瀬遺跡出土遺物⑦　……20
第Ⅱ－12図　高瀬遺跡出土遺物⑧　……21
第Ⅱ－13図　高瀬遺跡出土遺物⑨　……22
第Ⅱ－14図　高瀬遺跡出土遺物⑩　……23
第Ⅱ－15図　高瀬遺跡出土遺物⑪　……24
第Ⅱ－16図　高瀬遺跡出土遺物⑫　……25
第Ⅲ－1図　小上野墓ノ谷古墳・遺跡、小上野西谷遺跡、富岡前山古墳位置図、地形図　……27
第Ⅲ－2図　小上野墓ノ谷古墳・遺跡調査区位置図　……28
第Ⅲ－3図　小上野墓ノ谷古墳墳丘測量図　……28
第Ⅲ－4図　小石室１　……28
第Ⅲ－5図　小上墓ノ谷古墳　遺物出土状況　……28
第Ⅲ－6図　小上野墓ノ谷古墳石室　……29
第Ⅲ－7図　Ｂ地区火葬穴群　……31
第Ⅲ－8図　ＳＸ２７、ＳＸ１９　……31
第Ⅲ－9図　小上野墓ノ谷古墳出土遺物　……32
第Ⅲ－10図　小上野墓ノ谷古墳・遺跡出土遺物　33
第Ⅲ－11図　小上野西谷遺跡調査区位置図　……36
第Ⅲ－12図　ＳＨ１　……36
第Ⅲ－13図　小上野西谷遺跡遺構平面図……37
第Ⅲ－14図　小上野西谷遺跡出土遺物　……38
第Ⅳ－1図　富岡前山古墳墳丘測量図　……40
第Ⅳ－2図　小石室　……41
第Ⅳ－3図　富岡前山古墳墳丘実測図　……42
第Ⅳ－4図　横穴式石室……43・44
第Ⅳ－5図　富岡前山古墳出土遺物①　……46
第Ⅳ－6図　富岡前山古墳出土遺物②　……47
第Ⅳ－7図　富岡前山古墳出土遺物③　……48
第Ⅳ－8図　富岡前山古墳出土遺物④　……50
第Ⅳ－9図　富岡前山古墳出土遺物⑤　……51
第Ⅳ－10図　富岡前山古墳出土遺物⑥　……52
第Ⅳ－11図　富岡前山古墳出土遺物⑦　……53
第Ⅳ－12図　富岡前山古墳出土遺物⑧　……54

挿表目次

第Ⅲ－１表　小上野墓ノ谷遺跡火葬穴一覧表

写真図版目次

写真図版１　北中溝遺跡遠景、全景 ……59
写真図版２　北中溝遺跡調査区近景、調査区南西部、ＳＨ２、ＳＨ9、ＳＨ２・４、ＳＫ３、ＳＨ5内小土坑出土状況、ＳＤ１ ……60
写真図版３　高瀬遺跡遠景 ……61
写真図版４　高瀬遺跡近景、調査区全景 ……62
写真図版５　小上野墓ノ谷遺跡全景、中世火葬穴全景…63
写真図版６　小上野西谷遺跡Ａ区全景、Ｂ区全景 …64
写真図版７　富岡前山古墳全景 ……65
写真図版８　円頭大刀把頭・鞘尻象嵌 ……66

Ⅰ　伊賀市円徳院　北中溝遺跡

1　調査の経過

北中溝遺跡は、伊賀市（調査当時は阿山郡阿山町）円徳院に所在する遺跡である。発掘調査は、昭和62年度県営圃場整備事業に伴い、1987年５月から開始し、同年６月に終了した。最終の調査面積は、800㎡であった。

遺構図の作成は、すべて１/20作図の手描実測で行った。

2　位置と環境

北中溝遺跡は、上野盆地北東部にあって、柘植川とその小支流、河合川が合流する内側に位置する。

当地は、古代においては阿拝郡の領域に相当し、伊賀で最も広大な沖積部をその領域内に抱える。このため、その生産性は高く、阿拝郡はそれを背景に古墳時代初頭から後期まで盛衰はありつつも連綿と首長墳系譜が形成された。そのなかでも、北中溝遺跡の東方丘陵上には、伊賀最古の古墳である東山古墳が所在し、上野盆地を広く睥睨する。東山古墳は、墳形不明ながら割竹形木棺直葬の主体部から四神鏡や銅鏃、農工具類などが出土した古墳[(1)]で、前期初頭に位置づけられる。

阿拝郡では、この東山古墳を嚆矢とし、前期後半には三角縁神獣鏡が出土した山神寄建神社古墳（円墳？）、さらに中期前半には188ｍの三重県最大の前方後円墳・御墓山古墳を築造するに至る。その後も、５世紀後半以降の前方後円墳４基を含む外山・鷺棚古墳群や玄室幅3.5ｍを測る伊賀最大の横穴式石室墳・勘定塚古墳などが築造され、前期から後期を通して首長墳の系譜を追うことができる。[(2)]

阿拝郡は古代に入っても郡内における代表的な位置を保持し、伊賀国府も同地内に設置されたほか、伊賀一宮である敢国神社も勧請された。なお、伊賀国分僧寺・尼寺は、伊賀郡と阿拝郡との境界の丘陵上に創建された。

このように、北中溝遺跡のある阿拝郡は、一貫して伊賀における中心的な地域のひとつであり、中世以降も多くの遺跡が良好に展開している。

3　遺構

北中溝遺跡で確認された遺構は、弥生時代後期の竪穴住居１基、古墳時代前期の竪穴住居８基・土坑２基（うち１基は竪穴住居の可能性もあり）・大溝１条、中世の溝１条がある。以下、簡単に見ておこう。

竪穴住居ＳＨ２　長径8.6ｍ×短径8.2ｍの隅丸方形を呈し、北東隅には周庭状に１段高い部分がみられる。北中溝遺跡の竪穴住居中、最も古い弥生後期の所産で、埋没後、大溝ＳＤ１に切られている。

溝ＳＤ１　幅3.5ｍ、深さ0.9ｍの直線的な大溝で、断面形は逆台形を呈する。下層を中心に古墳時代初頭から前期の土器が良好に出土している。

土坑ＳＫ３　竪穴状の方形プランの土坑で、竪穴住居の可能性も残る。調査区の制約や重複のため、全体形状は不明だが、埋土より良好に土器が出土した。

竪穴住居ＳＨ４　西側は調査区外となるが、南北4.1ｍの小規模な竪穴住居である。炉跡と思われる焼土塊がある。

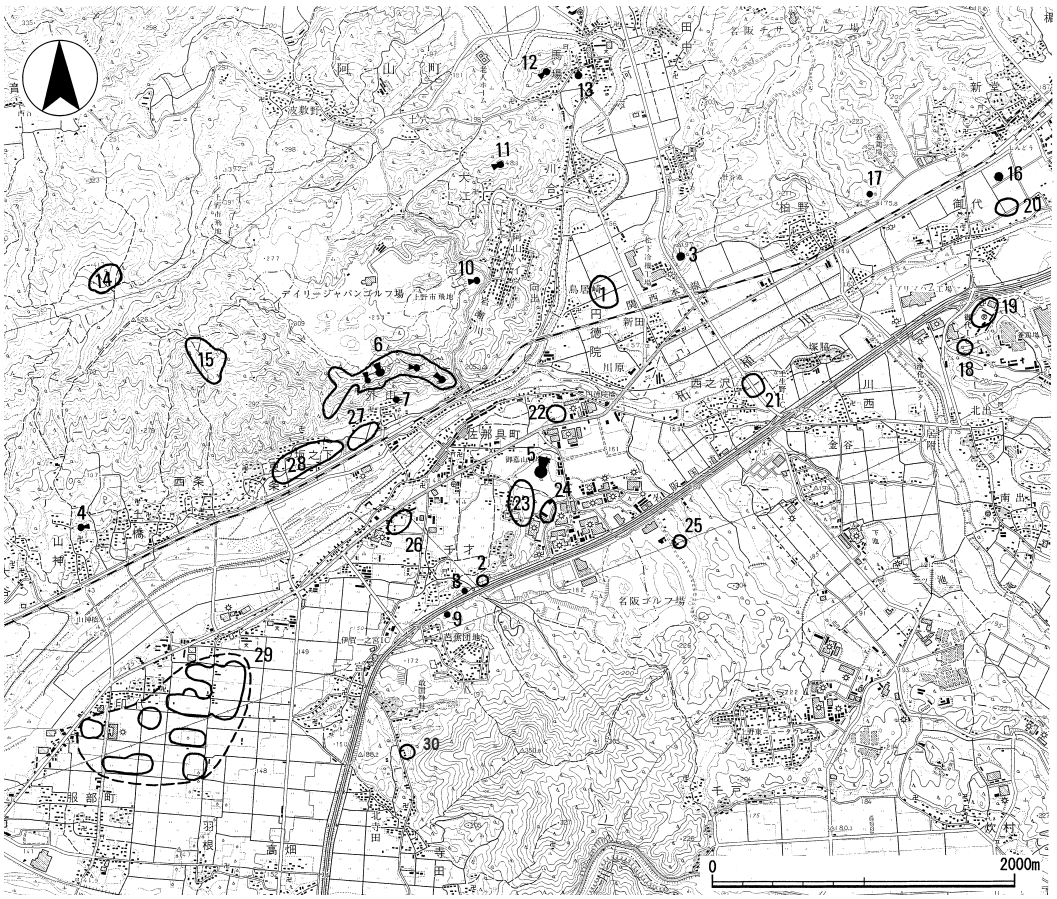
竪穴住居ＳＨ５～８　相互に重複する竪穴住居で、規模の小さいＳＨ３・７が切り合い関係では新しく、大きいＳＨ６・８は古い。ＳＨ5内部の貯蔵穴状の小土坑からは布留式系の甕（42）が出土しており、新しいものは古墳時代前期に下る。また、この４基とは別の掘り込みも認められ、もう１基、竪穴住居が重複していた可能性がある。

竪穴住居ＳＨ９　東側が調査区外となるが、南北7.8ｍの竪穴住居で、主柱穴も明瞭である。また、長径80㎝×短径45㎝程度の焼土塊もみられ、炉跡と思われる。

竪穴住居ＳＨ10～11　重複する２基の竪穴住居で、切り合い関係からＳＨ11が新しい。ほとんど調査区外となることもあって出土遺物に乏しく、時期比定できうるほどのものはないが、他の住居跡との方向やプラン的な共通性から古墳時代前期の所産であろう。

溝ＳＤ12　幅62㎝、深さ10㎝の小溝である。図示しうるほどの遺物はないが、中世の所産である。

土坑ＳＫ13　ＳＫ３内の長さ2.2ｍ以上×幅1.5ｍ、深さ６㎝の小土坑である。上面より古式土師器



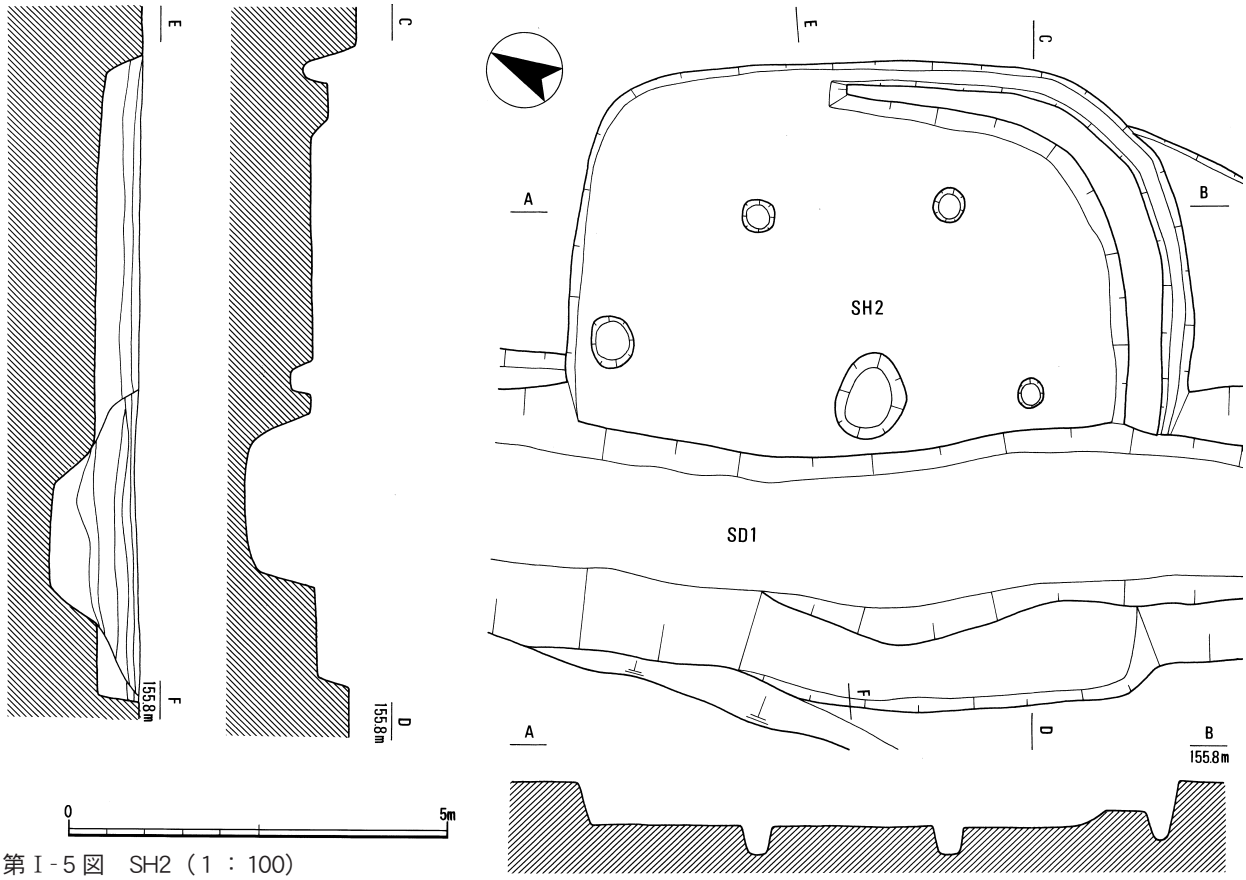
第Ⅰ-1図　北中溝遺跡位置図（1：50,000）

第Ⅰ-2図　北中溝遺跡地形図（1：5,000）

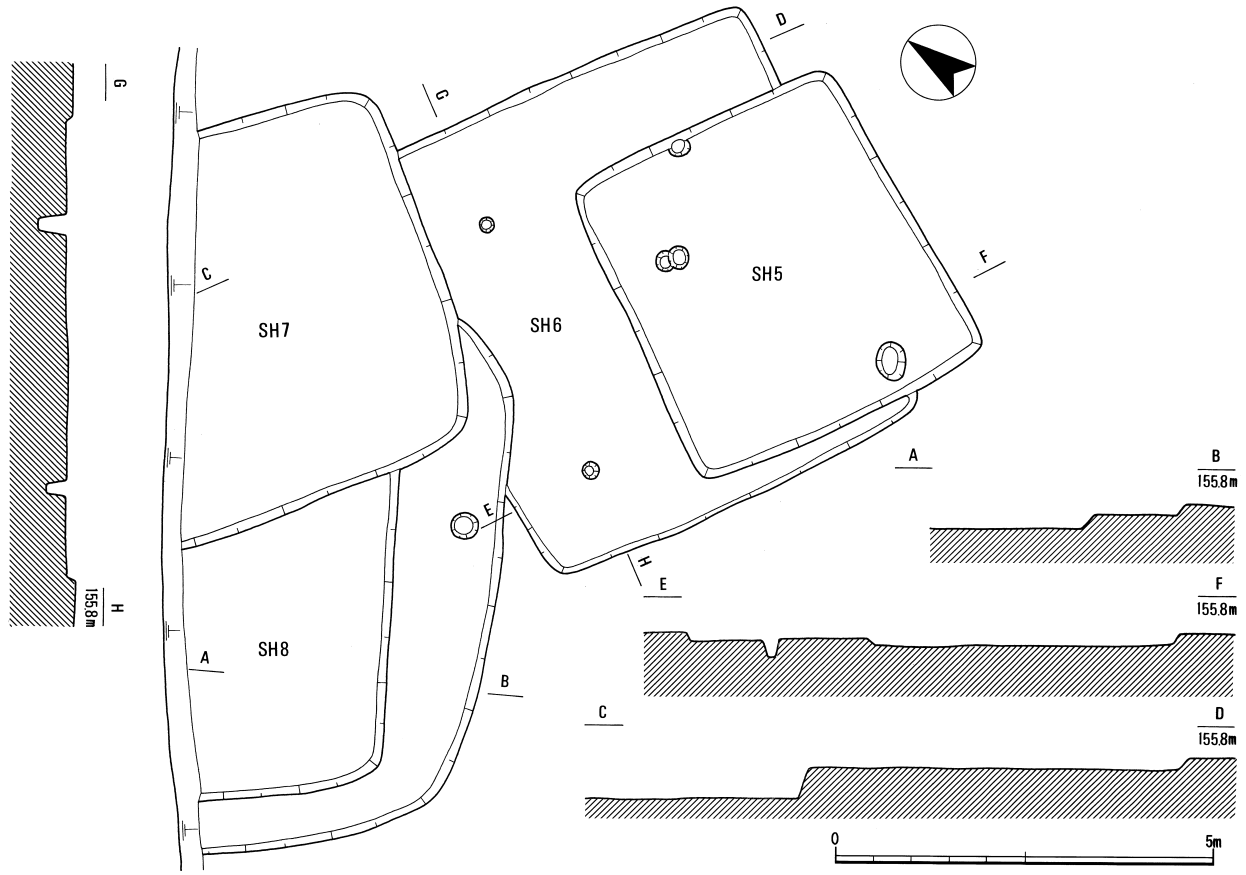
第Ⅰ-３図　北中溝遺跡　調査区位置図（１：2,000）

0　100m

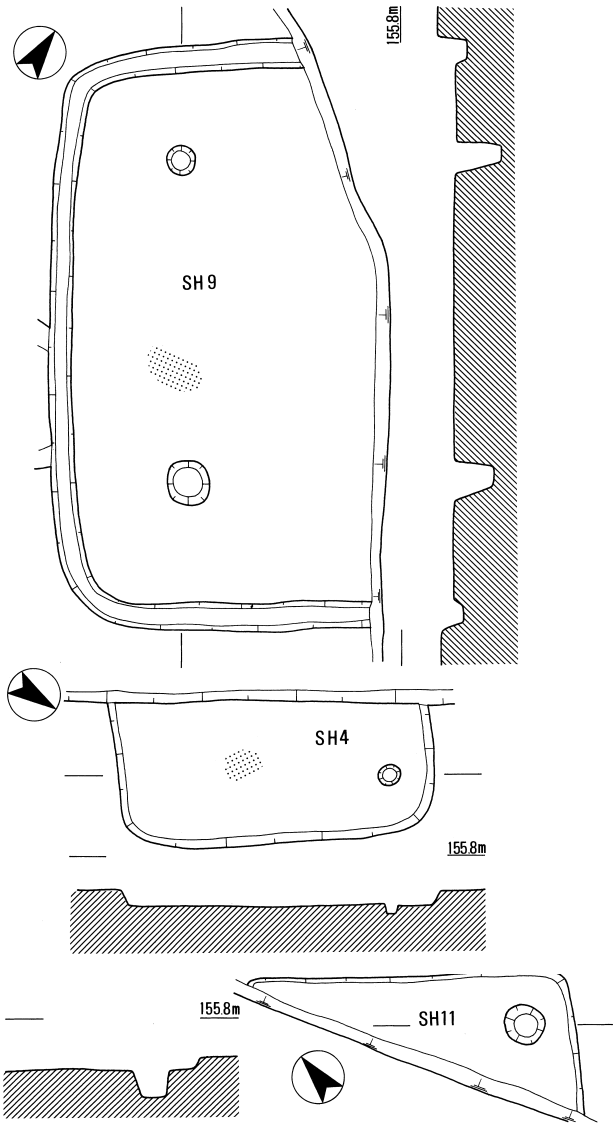
第Ⅰ-４図　北中溝遺跡　遺構平面図（１：250）



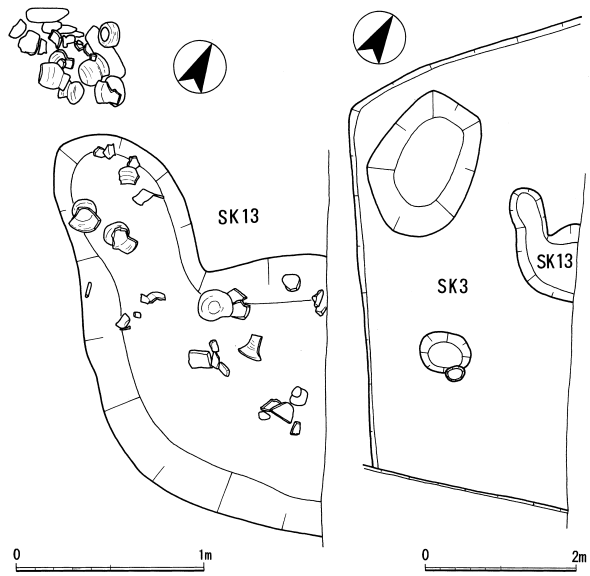
第Ⅰ-5図　SH2（1：100）



第Ⅰ-6図　SH5・6・7・8（1：100）



第Ⅰ-7図　SH９・４・11（１：100）



第Ⅰ-8図　SK３・13（１：100）、遺物出土状況（１：40）

が出土したが、ＳＫ３出土遺物との分別は困難であった。

４　遺物

ＳＨ２出土遺物（１～５）

広口壺（１）・直口壺（２）・長頸壺（３）・壺甕類底部（４）・高杯脚部（５）があり、弥生後期の所産である。長頸壺が組成するなど伊賀の当該時期の特徴がよく出ている。

ＳＤ１出土遺物（６～33）

広口壺（６）・直口壺（７～８）・二重口縁壺（９～11）・小型壺（12）・小形丸底鉢（13～14）・小型器台（15～16）・有頸鉢（17）・く字形甕（18～26）・甕胴底部（27）・Ｓ字甕（28～29）・有稜高杯（30～32）・小型高杯（33）がある。以下、特徴的なもののみ簡単に解説する。

広口壺はいわゆるパレス壺と類縁関係にある東海系、二重口縁壺は９が頸部を直立させ、外面にヨコミガキを施す近畿系であるのに対し、10～11はいわゆる伊勢型二重口縁壺[3]である。

小形器台のうち、16は杯部内外に暗文状の細ヘラミガキを放射状に施している。

く字形甕のうち18～19は、器壁が薄く、外反させた口縁端部を摘み上げる庄内式系のもの（ただし内面ヘラケズリが明瞭なものは18のみ）、21は内彎する口縁部の端部を内側に肥厚させた布留式系のものである。これらはいずれも外面ハケ調整で、明瞭にタタキを残すものは確認できなかった。

Ｓ字甕には、Ｂ類（28）とＣ類[4]（29）がある。

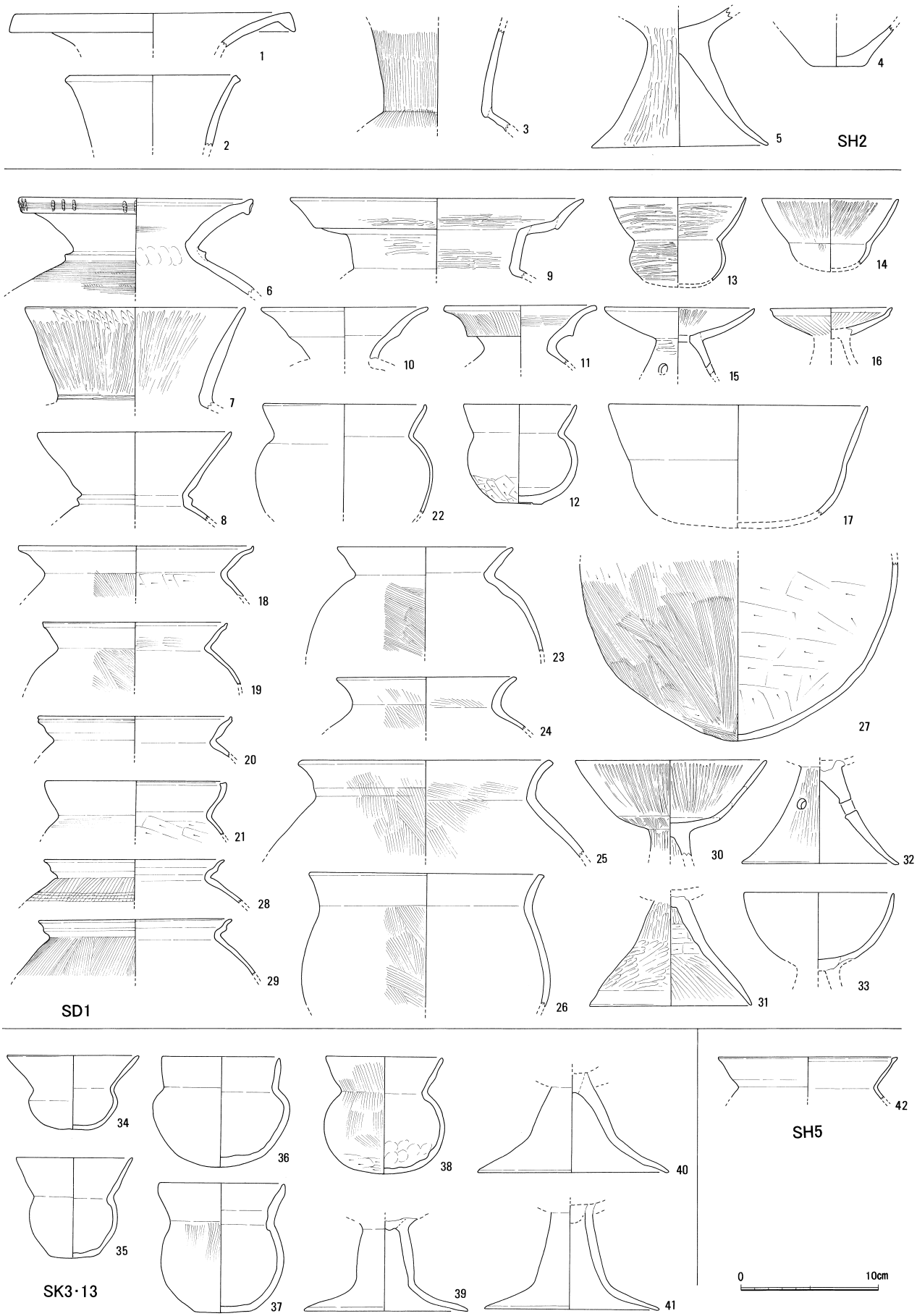
全体として、庄内式から布留式前半期に併行する資料といえよう。

ＳＫ３・１３出土遺物（34～41）

小形丸底鉢（34）・小形丸底壺（35～38）・屈折脚高杯脚部（40～41）がある。小形丸底系のものは、いずれもヘラミガキ手法を欠いてハケもしくはナデ調整によるもので、形状的には平底化しつつあるものを含む。布留式でも後半期に併行するとみてよかろう。

ＳＨ５出土遺物（42）

布留式系のく字形甕の口縁部片で、口縁端部を内側に肥厚させた布留式の特徴が明瞭である。残りの関係から体部内面ヘラケズリの有無は不明だが、全



第Ⅰ-9図　北中溝遺跡　出土遺物（1：4）

体に極めて薄く作られており、同手法が用いられた可能性は高い。

5　まとめ

北中溝遺跡では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて竪穴住居が形成されて集落が営まれ、また平安時代末頃にもごく少数の遺構が営まれた。調査面積が狭く、また多くの竪穴住居で出土遺物が極めて僅少ないしは全く出土しなかったため、集落範囲やこの集落の継続性などに関して不明な点が多い。しかし、調査地点は、伊賀最古の古墳、東山古墳の西下に相当しており、北中溝遺跡の存続時期は、東山古墳の築造年代を含んでいることは注目される。以下、弥生時代後期から古墳時代前期の集落について、簡単なまとめをしておきたい。

北中溝遺跡では、調査区内最大の竪穴住居、弥生後期のＳＨ２を壊して大溝ＳＤ１が営まれ、この北側に古墳時代前期の竪穴住居群が展開する。調査区内の位置関係を一瞥すると、ＳＤ１が古墳時代住居群を区画する環濠的な性格を有するのではないかと想定することもできるが、調査区自体、分布調査による表面採集活動や試掘調査、それに現地形を基に想定された遺跡範囲の東北隅に相当しており、今回の調査区だけで結論を出すことはできない。

竪穴住居に関しては、群中最大のＳＨ２が弥生後期に属するのに対し、ＳＨ４とともに最小規模グループを形成するＳＨ５が布留式系の甕の出土によって古墳時代前期と想定される。また、重複するＳＨ５～８では、切り合い関係の新しいＳＨ５・７のほうが住居規模が小さい。こうしたことから、少なくとも今回の調査区内に関する限り、一辺６～８ｍの隅丸の竪穴住居（ＳＨ２など）が古く、一辺４～5ｍの小規模で隅が比較的角張った竪穴住居（例えばＳＨ５など）が新しいことがわかる。つまり、竪穴住居は、巨視的にみれば大から小へ変遷していったと思われる。そして、古墳時代前期の竪穴住居の規模は比較的小さく、東山古墳の被葬者に擬せられるような上位集団は含んでいなかったと推定される。

出土遺物では、ＳＤ１出土遺物が量的にも安定しており、情報量も多い。ＳＤ１では、庄内式から布留式前半代に併行する土器が主体を占める。そして、この年代はまさに東山古墳の築造時期でもある。

弥生時代後期から古墳時代前期にかけての伊賀の土器は、Ｓ字甕に代表される東海系の土器よりも、庄内・布留式系統の近畿地方の土器との類縁性が強い[(5)]が、北中溝遺跡でも庄内・布留式系の甕や、９の二重口縁壺など近畿地方との類縁性を示す土器が含まれる。さらに、小型器台（15～16）は、類似したものが東山古墳の棺内にも副葬されており[(6)]、東山古墳副葬の小型土器類が北中溝遺跡で製作された可能性も想定しうる。このことに関しては、理化学的な分析や、周辺諸集落の動向などが明らかになったうえでないと軽々には結論は出せないものと認識しているが、北中溝遺跡が東山古墳の被葬者やその造営主体と密接な関係性を有していたであろうことは是認してもよかろう。　（穂積）

【註】

(1) 仁保晋作「阿山郡阿山町東山古墳の遺構と遺物」（『研究紀要』１　三重県埋蔵文化財センター　1992年）
(2) 伊賀市『上野市史　考古編』2005年
(3) 川崎志乃「伊勢型二重口縁壺の基礎的研究」（『Mie history』vol.13　2002年）
(4) 赤塚次郎「廻間式土器」（『廻間遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター　1990年）
(5) 特に遺跡を例示しないが、例えば伊賀の古墳時代前期の遺跡では伊勢地域の諸遺跡と比べてＳ字甕の出土が少なく、庄内・布留式系を含む、く字形甕が主体を占める。
(6) 前掲註１所収の10番の土器

Ⅱ　伊賀市比土　高瀬遺跡

1　調査の経過

高瀬遺跡は、伊賀市（調査当時は上野市）比土に所在する古墳時代を中心とした遺跡である。発掘調査は、昭和62年度県営圃場整備事業に伴うもので、1987年11月５日から開始し、1988年１月14日に終了した。最終の調査面積は、1,500㎡であった。

遺構図の作成には、航空写真測量を実施したほか、必要に応じて個別遺構図は手描実測も行った。

2　位置と環境

高瀬遺跡は、木津川左岸の狭隘な沖積地に立地する。この地は、布引山系から流れ出て阿保の小盆地を東流してきた木津川が竜王山の山塊を回り込んで流れを北に転ずる地に相当し、標高約170ｍである。高瀬遺跡から望む竜王山（城山）は、前面に木津川を従えてあたかも神奈備のような様相を呈する。

木津川上流域には、上流から阿保、比土・古郡、下神戸の３小盆地と、支流の比自岐川流域の比自岐小盆地があり、古代においてはいずれも伊賀国伊賀郡に属していた。阿保と比土からはかつて突線鈕式銅鐸が出土している。

古墳時代に入ると、この小盆地群の南北に、伊賀を代表する有力古墳が築造される。前期末から中期初頭に比自岐小盆地を見下ろす丘陵上に築造された120ｍの前方後円墳・石山古墳[(1)]と、僅かに遅れて１世代１墳的に首長墳を形成する国史跡の名張市美旗古墳群[(2)]がある。これら有力古墳は、いずれも伊賀郡を直接的な基盤として成立したものと考えられており[(3)]、古墳時代における当地域の重要性を示している。

古墳時代の有力遺跡も多く、阿保小盆地には沢代遺跡や楳ヶ森遺跡、比土・古郡小盆地には城之越遺跡や高瀬遺跡などが形成された[(4)]。このうち、城之越遺跡では貼石や立石を伴う大溝祭祀遺構（貼石祭儀場）が構築されたのをはじめ、沢代遺跡や楳ヶ森遺跡でも貼石遺構があり、古墳時代の貼石遺構が多く存在する列島でも稀有な地域となっている[(5)]。

3　遺構

高瀬遺跡の主な遺構には、大溝１条、竪穴住居４基、土坑７基以上がある。これらの多くは大溝（ＳＤ１）と東側の木津川との間に存在し、大溝ＳＤ１は遺構群を区画する機能を負う。以下、簡単に記す。

大溝ＳＤ１　幅２～3ｍ、深さ約1.6ｍの直線的な南北大溝で、調査区内で南北方向に約50ｍ検出された。大溝の断面形はＶ字形を呈し、層位は大きく４層に分かれる。このうち、最下層の４層は遺物を含まない砂層であるが、上位３層からは古墳時代中期から後期の遺物を中心とした大量の遺物が出土した。調査区内ではほぼ直線的に確認できるだけであるが、南側の延長部はその後の試掘調査の結果、東側（木津川側）へ台形状に屈折していくことが判明している。このことからＳＤ１は、北側の状況は不明だが、木津川を背景にして、竪穴住居をはじめとする高瀬遺跡の古墳時代遺構の大半を緩やかに取り囲んでいた可能性がある。

竪穴住居ＳＨ２　調査区の東北隅に位置し、ＳＨ３を切って存在する。西側に竈をもつ。

竪穴住居ＳＨ３　重複が激しく、全体形状は不明だが、住居北西隅部分を確認している。切り合い関係からＳＨ２に先行し、住居西北隅は直角に屈折する。6世紀前半の土器が出土している。

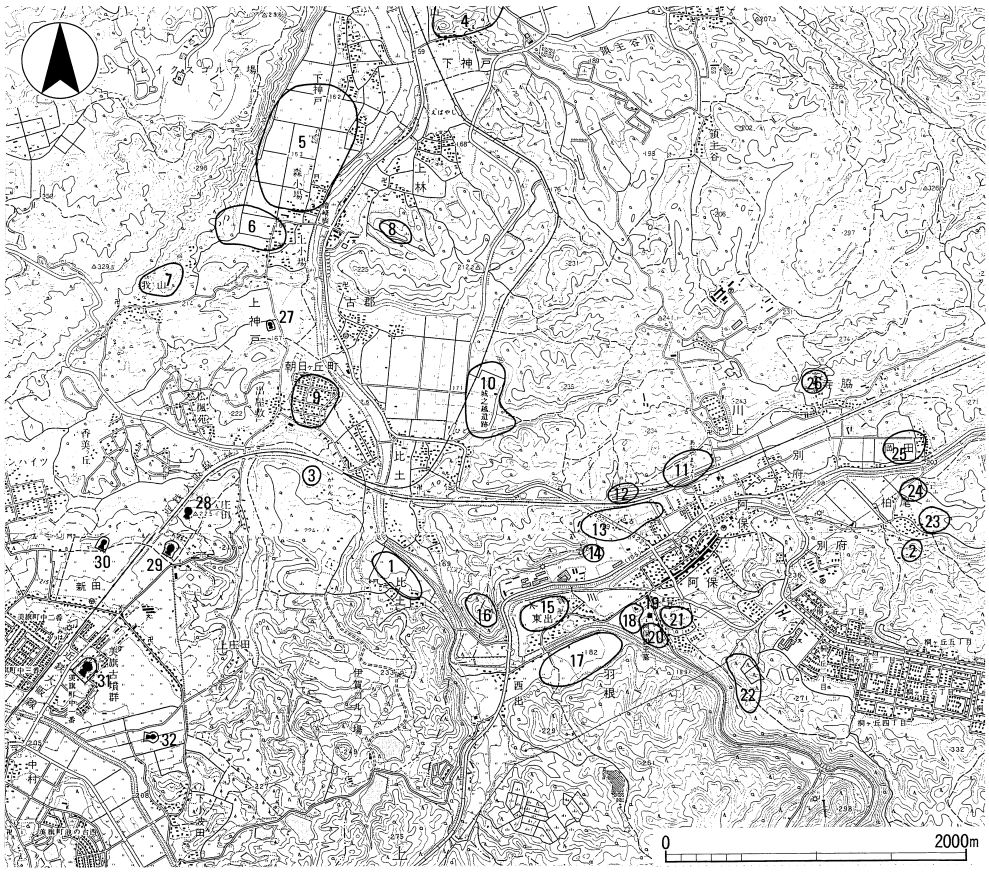
竪穴住居ＳＨ４　西側は土坑群との重複のため不明で、東半部のみ確認している。南北4.8ｍ以上、東西3.4ｍ以上の方形住居で、住居南東隅は直角に屈折する。

竪穴住居ＳＨ５　東側は調査区外へ延びるが、南北４ｍの竪穴住居で、西壁中央に竈をもち、住居隅は直角に屈折する。埋没後、ＳＤ16・ＳＡ17が造られる。古墳時代中期の土師器が出土している。

土坑ＳＫ６　ＳＨ３やＳＫ13に後出する楕円形の土坑で、重複が激しく正確な規模は不明である。埋土から6世紀前葉の須恵器等が出土した。

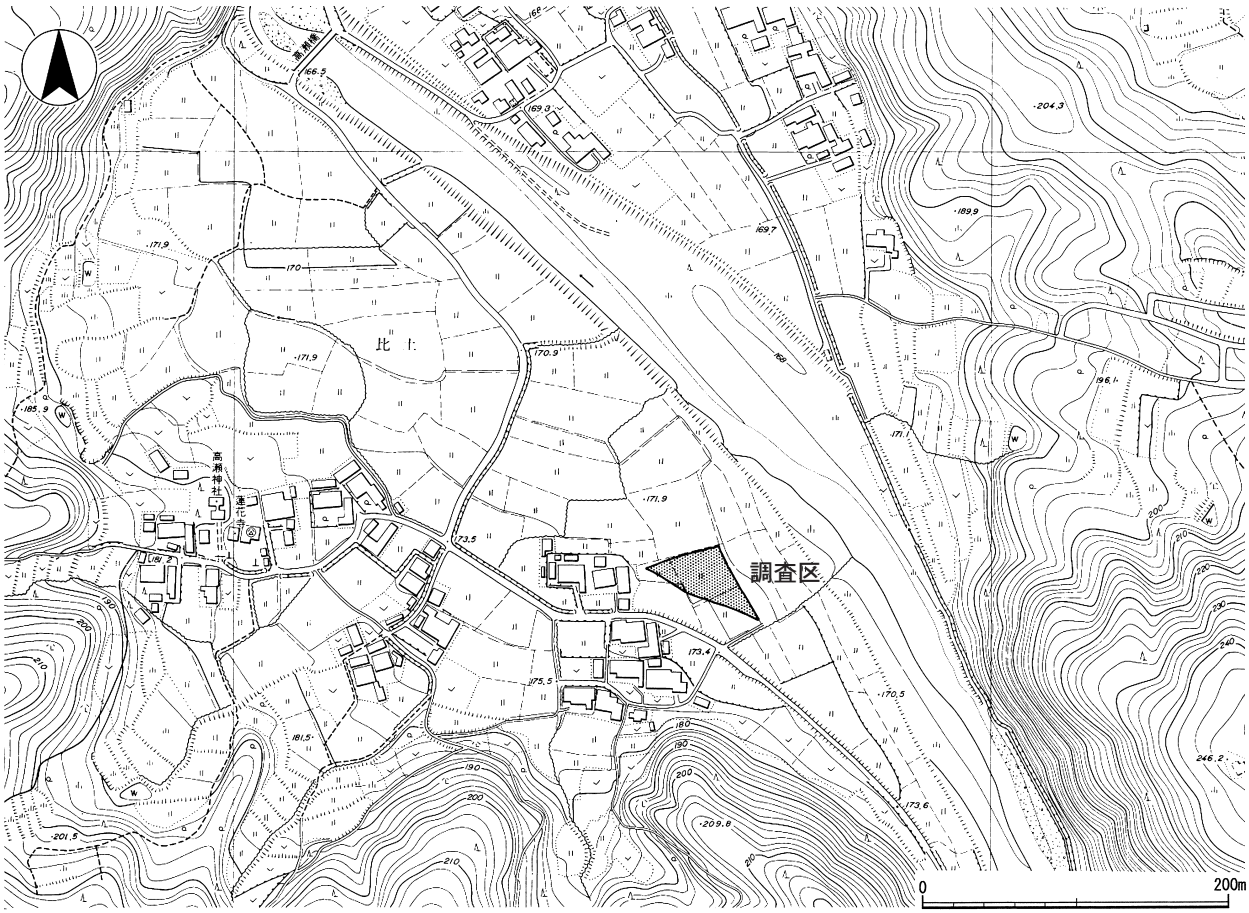
土坑ＳＫ７　ＳＫ13に後出する長径4.5ｍ×短径4.1ｍの土坑で、楕円形土坑で、西端部（ＳＤ１側）の膨らみが大きい。埋土から6世紀前葉の土器が出土している。

土器集中ＳＺ８　須恵器器台（315）を中心に、土師器・須恵器に滑石製勾玉なども交えて存在する



1　高瀬遺跡
2　柏尾銅鐸出土地
3　比土銅鐸出土地
4　丸山城跡
5　浮田遺跡
6　高賀遺跡
7　我山城跡
8　山村氏城跡
9　奥城寺遺跡
10　城之越遺跡
11　楳ヶ森遺跡
12　七ヶ城遺跡
13　沢代遺跡
14　上後瀬遺跡
15　羽根中島遺跡
16　竜王山古墳群・城跡
17　中出向遺跡
18　西法花寺遺跡
19　息速別命墓（方墳）
20　花代遺跡
21　阿保城跡
22　桐ヶ谷古墳群
23　本田氏城跡
24　岡田向遺跡
25　岡田遺跡
26　安田中世墓群
27　近代古墳
28　殿塚古墳
29　女良塚古墳
30　昆沙門塚古墳
31　馬塚古墳
32　貴人塚古墳

第Ⅱ-１図　高瀬遺跡位置図（１：50,000）



第Ⅱ-２図　高瀬遺跡地形図（１：5,000）

第Ⅱ-3図　高瀬遺跡　遺構平面図（1：300）

土器集中で、掘り込みはない。ＳＤ１の東肩部分にあり、須恵器器台は正立で押し潰された状態で出土しているほか、須恵器杯身（317）なども正立で出土している。6世紀中葉頃の所産であろう。

土坑ＳＫ９　長径4.6ｍ×短径2.8ｍの隅丸長方形の土坑で、ＳＫ10に重複する。埋土より6世紀中葉から後葉の土器が出土している。

土坑ＳＫ10　長径4.5ｍ×短径3.0ｍの歪な楕円形土坑で、切り合い関係からＳＫ９に先行する。埋土から6世紀前葉の土器が出土している。

土坑ＳＫ11　長径4.5ｍ×短径2.4ｍの略長方形土坑である。埋土に人頭大の土器を含むが、床面に伴うものは少ない。埋土から6世紀後葉の土器が出土している。

土坑ＳＫ12　長径2.7ｍ×短径2.2ｍの土坑で、埋土から滑石製及び土製の紡錘車が出土している。

土坑ＳＫ13　長径6.4m以上の大形の土坑であるが、ＳＫ６・７をはじめとする他遺構からの重複が激しく、全体形は不明である。埋土から6世紀前葉の須恵器が出土している。

掘立柱建物ＳＢ16　ＳＨ５に重複する東西主軸の掘立柱建物で、東側は調査区外となる。桁行３間以上×梁行３間の建物で、円形の柱掘形をもつ。

柱列ＳＡ17　ＳＨ５に一部重複するかたちで、やや不等間ながらＬ字状に並ぶピット列があり、柱列として把握した。切り合い関係からＳＨ５に後続するが、所属時期は不明である。

4　遺物

高瀬遺跡出土の遺物は、ＳＤ１出土の古墳時代中後期の遺物が出土量の大半を占め、そこに竪穴住居と土坑出土の遺物、それに包含層遺物が伴う。ＳＤ１上層や、包含層などには中世遺物も混じるが、その量は全体からみるとごく僅かである。以下、特徴的なもののみ簡単に解説しておく。

ＳＤ１出土遺物（１～298）　出土遺物は層序に沿って取り上げられたものとして、上層からⅠ層（１～25）・Ⅱ層（26～114）・Ⅲ層（115～230）・Ⅲ層下部（231～261）があり、このほかに所属層序不明のもの（262～298）がある。ただし、Ⅲ層とⅢ層下部の境界はあいまいで、明瞭には分離しえない。

Ⅰ層出土遺物は、瓦器を含むが、これは大溝埋没後に窪みに溜まったものであろう。古墳時代の遺物も含むが、全体としてさほど多くない。

Ⅱ層出土遺物は、土師器の高杯や杯が組成の中心を占める。また、111は、底部に１＋５の穿孔を有する甑で、外面ハケ調整ながら、韓式系土器の系譜に連なるものと思われる。高杯は、屈折脚高杯で脚柱部内面をヘラケズリするものが主体を占め、47など杯部屈折部に突出部をもつ大型のものも含む。甕は、丸底で外面ナデもしくはケズリ、内面ケズリのものが多い（39～44）。33は土師器小型壺の胴上部に円孔が穿たれている。また、123は、口縁部を欠損するが、長めの脚が付いた脚付き土器である。

Ⅲ層出土遺物も、土師器高杯や甕、杯が組成の中心を占め、直口壺や小型壺なども多い。大形高杯は、194のような杯部屈折部に突出部をもつものの他、196～197のような突出部をもたないものも含む。甕は、Ⅱ層同様のナデ・ケズリ調整を基本とするものの他、外面にハケを残すものも含まれ、129など内彎するく字形口縁の端部を肥厚させる布留式系の丸底甕も存在する。また、115や216など土師器直口壺や小型壺の胴部に穿孔を加えるものも目立つ。

Ⅲ層出土遺物で特筆できるものは、圧倒的多数の土師器に混じって出土した初期須恵器の高杯（229）と把手付台付壺（230）である。高杯は、深く内彎する椀状の杯部と緩やかに外反しながら開く脚部をもつもので、杯部・脚部それぞれ1ヶ所に稜を有する。脚部には4ヵ所の円孔が穿たれている。一方、把手付台付壺は、把手自体は欠損するものの、壺の肩部に4条沈線、胴部に1条の鈍い突帯、ラッパ状に開く脚部に直列２段×４方向の三角形透孔と２条の鈍い突帯を施している。

「Ⅲ層下部」出土遺物も土師器の高杯や甕が組成の中心を占める。特筆できる遺物として、須恵器の把手付椀を模倣した土師器把手付椀（232～233）や土師器把手付甑（234）がある。把手付椀は、把手の上部に指圧によって形成された扁平な摘みが付いており、模倣元である須恵器椀の渦巻状飾りを模したものとみられる。

262～298は、所属層序不明のものである。263は１＋４（ないし５）の楕円形孔が穿たれた底部片

で、韓式系土器ないしはその系統を引いた甑ないしは把手付鍋になるものであろう。262は須恵器高杯の脚部、264以下は土師器で、264は大形の把手である。

竪穴住居出土遺物（299～306）　竪穴住居は５基確認されたが、図示しうる出土遺物は乏しい。ＳＨ３の出土須恵器は、６世紀前葉～中葉に比定できる。

土坑等出土遺物（307～342）　以下、特徴的なもののみ述べる。310は須恵器杯蓋で、天井部外面を赤彩している。318は長脚２段透の須恵器高杯で、長い上段透と短い下段透を千鳥式に配し、下段には波状文も加える。323は薄化した滑石製勾玉で、円孔が頭部の端部近くに穿たれている。335は土玉、340は滑石製紡錘車、341は土製紡錘車である。全般的に6世紀代に下る遺物が多い。

包含層出土遺物（343～357）　いずれも土師器類を図示した。基本的に大溝ＳＤ１出土遺物と同様の遺物が多く、354は胴部穿孔が施された土師器小型壺である。

5　まとめ

（１）遺構について

調査の結果、高瀬遺跡は古墳時代中期中葉から後期にかけての集落遺跡であることが判明した。調査区内で確認できる竪穴住居はその所属時期が6世紀代に下るものが多いが、集落の区画機能をもつと思われるＳＤ１では初期須恵器をはじめとする5世紀代の遺物も出土しており、集落としての成立はこの時期に措くのが妥当であろう。

竪穴住居などの主要遺構群は、木津川と大溝ＳＤ１の間に集中しており、大溝ＳＤ１は集落本体を区画（もしくはどこかで木津川へ屈曲して囲繞）していたことが考えられる。このように考えた場合、高瀬遺跡は、竪穴住居など居住区を人工溝で取り囲んだ遺跡という点で、環濠集落やいわゆる「首長居館」との類似性が注目されるが、所属年代を考えた場合、特に首長居館との対比を考える必要がある。

古墳時代の首長居館は、一般的には首長層の居住・政治空間としての場と建物を溝や柵等の囲繞施設で取り囲んだ空間として認識され、三重県では4世紀のものが津市高茶屋大垣内遺跡[6]で、5世紀後半以降のものが伊賀市楳ヶ森遺跡[7]で確認されている。高瀬遺跡の場合、残念ながら居住域の中心部と目される部分が未調査部のため、「首長居館」に相当するような大型施設、具体的には大型掘立柱建物や大型竪穴住居などの存在は未検出である。このため、遺構のうえからはこれ以上の議論は難しい。

ただ、居住区外側を溝や柵等の区画施設で囲繞する遺構群が、すべからく「首長居館」の概念で括れるかというと問題はさほど単純ではない。例えば、竪穴住居群を溝によって囲繞する静岡県大平遺跡[8]は、いわゆる「首長居館」ないしは「首長居宅」の枠組みで考える意見がある一方[9]、「首長」の枠組みとは考えない有力な意見もある[10]。さらに、坂靖氏は「首長麾下集落」といった作業概念を導入し、地域内をより詳細に把握するための枠組みを提示されている[11]。

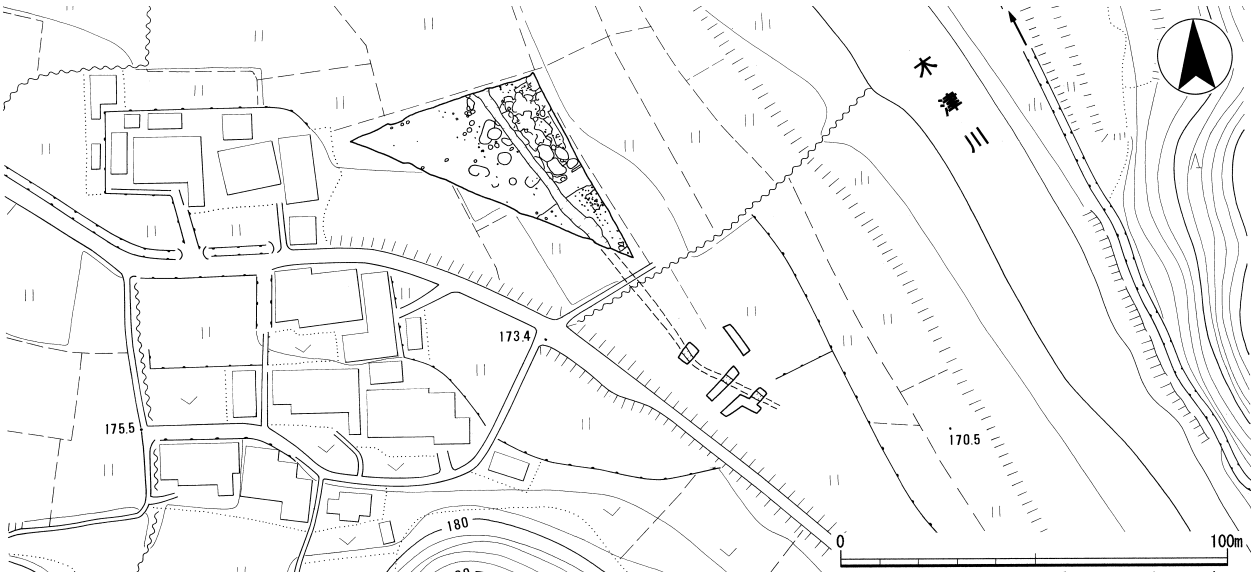
翻って高瀬遺跡をみると、後述のように同地域内には貼石遺構などを伴う城之越遺跡や沢代遺跡、楳ヶ森遺跡[12]などが存在しており、それら遺跡の遺構・出土遺物を高瀬遺跡の内容と比べると、高瀬遺跡の相対的な劣勢は否めない。つまり、古墳時代中期における高瀬遺跡は、地域内の最上位クラスの首長による経営を考えるよりは、それを支える中間層クラスの拠点として考えるとより調和的であろう。

（２）遺物について

高瀬遺跡の出土遺物で注目される遺物について、その論点を箇条書きでまとめておこう。

1　初期須恵器および韓式系土器の存在
2　須恵器模倣土師器の存在
3　土師器高杯・小形丸底壺・杯類の組成上の卓越
4　滑石製及び土製模造品類の存在

このうち２は、須恵器模倣土師器は、把手付椀と小型壺ないしは小型直口壺に胴部穿孔を施した「土師器瑟」に代表される。特に後者は、首長層による祭祀遺跡と目される城之越遺跡の大溝から出土したものとその特徴が酷似することは注目できる。さらに、１及び３の特徴も、城之越遺跡大溝と共通する。つまり、規模や使用者の差はあるとはいえ、高瀬遺跡ＳＤ１出土品は、城之越遺跡を介して高瀬集落で行われた祭祀に関わる遺物群も含まれていることを



第Ⅱ-４図　大溝SD1延長部の試掘坑（１：2,000）

示すものといえよう。４については、城之越遺跡にも全くないわけではないがさほど明瞭ではなく、高瀬遺跡により発現性が認められる。

（３）木津川上流部の古墳時代集落

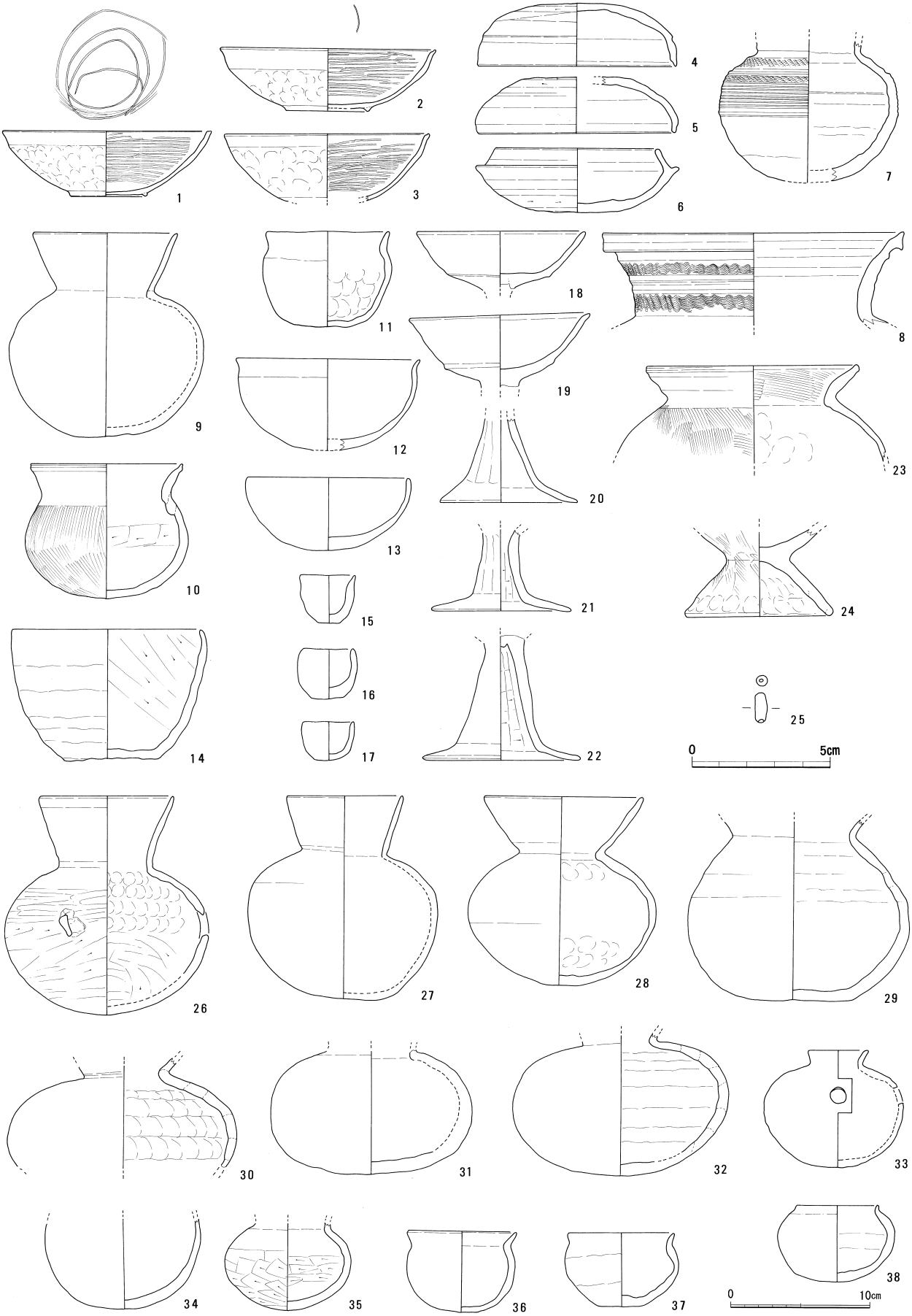
高瀬遺跡の評価は、旧伊賀郡の木津川上流域四小盆地群の遺跡動向から帰納的に判断していく必要がある。この場合、当地の有力遺跡は貼石遺構と井泉、大型掘立柱建物が伴うが、その頂点に位置するのは最も大規模な貼石遺構をもつ城之越遺跡である。木津川上流域の集落群は、多少の盛行時期は違えつつ、この城之越遺跡を頂点とした中間層や一般集落を含んだ集落間階層構成として認識できる。

そして、当地域では高瀬遺跡を含め、多くの遺跡で韓式系土器もしくは初期須恵器の出土がある。しかも、それら最新物品類が特定有力遺跡に偏在するのではなく、一般集落も含めた木津川上流地域として導入されていることに大きな特徴がある。このことは、５世紀代以降に築造を開始する美旗古墳群の造営主体のひとつが当地域にあったことの蓋然性をより高めるし、またその集団の性格を考える上でも留意すべき事象と思われる。ちなみに伊賀最大の前方後円墳、伊賀市御墓山古墳も近傍の喜春遺跡で初期須恵器が出土しており[13]、地域首長による大型古墳造営には当時の最新文物を保持した集団が関与したことを示している。

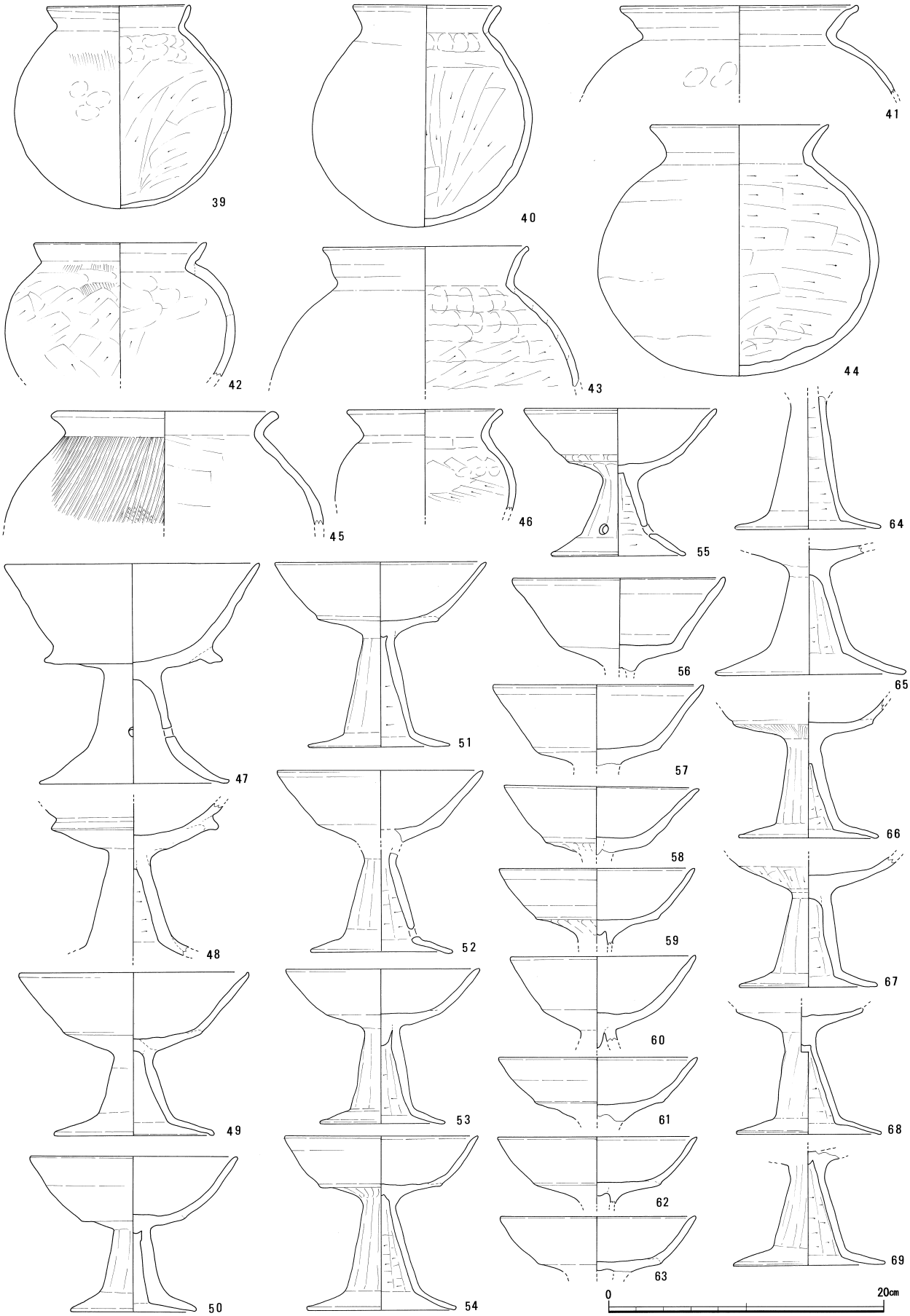
つまり、高瀬遺跡を含む木津川上流小盆地群の各遺跡は、城之越遺跡を頂点とした階層構造を取って集落間で日常諸活動を担うとともに、全体として美旗古墳群造営の有力母体として存在したと思われる。そういう意味では、当地の「一般集落」も、美旗古墳群に葬られた首長層のための諸活動に従事した「首長麾下の集落」[14]として位置づけられる。高瀬遺跡についても、その階層構成に組み込まれた集落のひとつであったものと判断される。　（穂積）

【註】

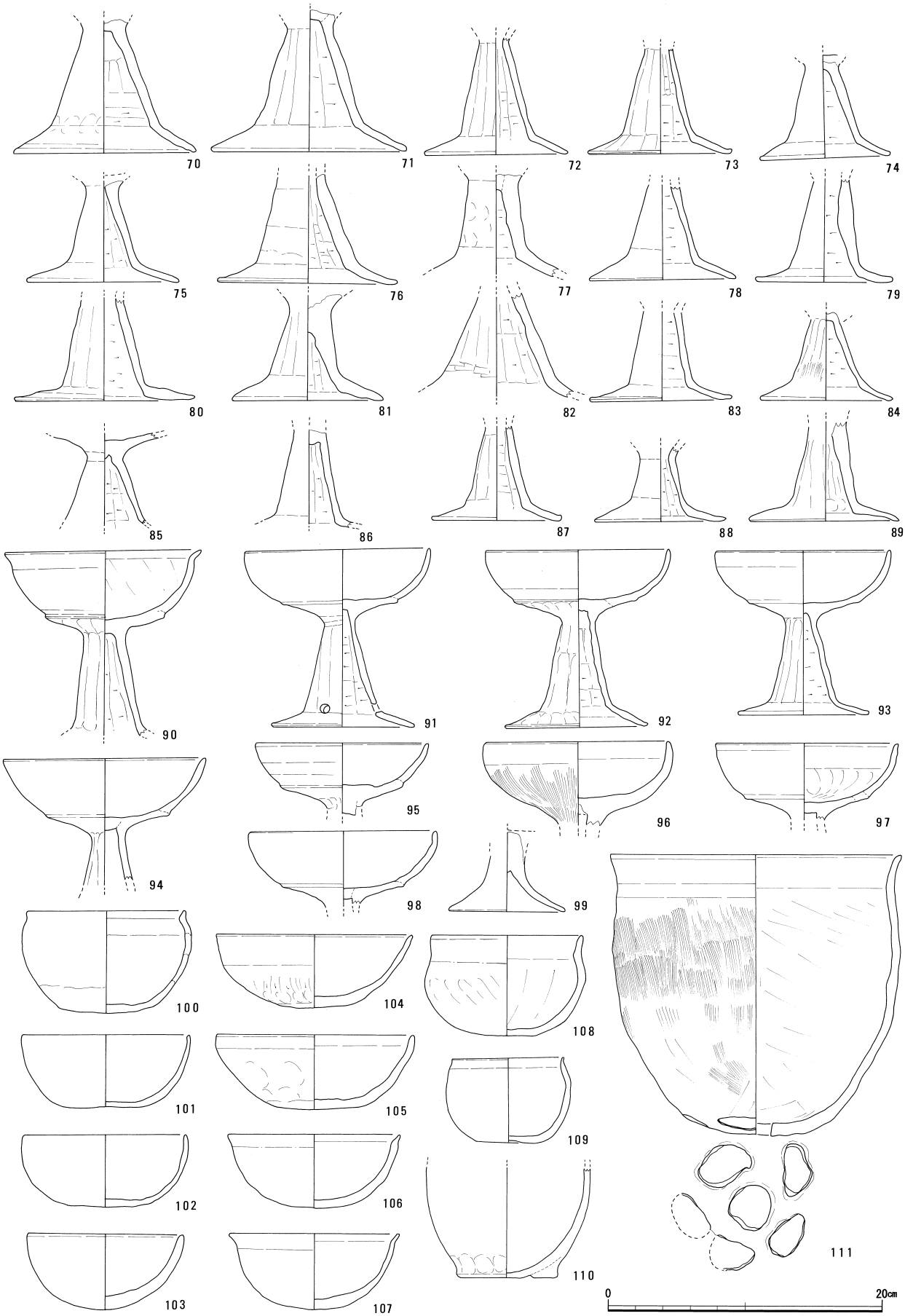
(1) 京都大学文学部博物館『紫金山古墳と石山古墳』1993年
(2) 森浩一・森川桜男ほか「三重県わき塚古墳の調査」（『古代学研究』66　1973年）
(3) 山田猛「王塚古墳」（『昭和53年県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会1979年）
(4) 青山町教育委員会『七ヶ城遺跡・七ヶ城古墳群・楳ヶ森遺跡調査報告書』1995年、伊賀市教育委員会『沢代遺跡発掘調査報告』2006年、三重県埋蔵文化財センター『上野市比土　城之越遺跡』1992年
(5) 穂積裕昌「石山古墳の出現」（『石山古墳』（第24回三重県埋蔵文化財展示図録　三重県埋蔵文化財センター2005年）
(6) 三重県埋蔵文化財センター『高茶屋大垣内遺跡（第3次・4次）発掘調査報告』2000年
(7) 前掲註４当該文献
(8) （財）浜松市文化協会『佐鳴湖西岸遺跡群』Ⅱ　1992年
(9) 橋本博文「古墳時代首長居宅の構造とその性格」（『古代探叢』Ⅱ　1985年）
(10) 都出比呂志「古墳時代豪族の屋敷」（『岩波講座日本通史』第2巻　岩波書店　1993年）
(11) 坂靖「近畿地方の「豪族居館」都市論の前提として」（『古墳時代の豪族居館をめぐる諸問題』1998年）
(12) 前掲註(４)当該文献
(13) 伊賀市『上野市史』2005年
(14) 前掲註(11)



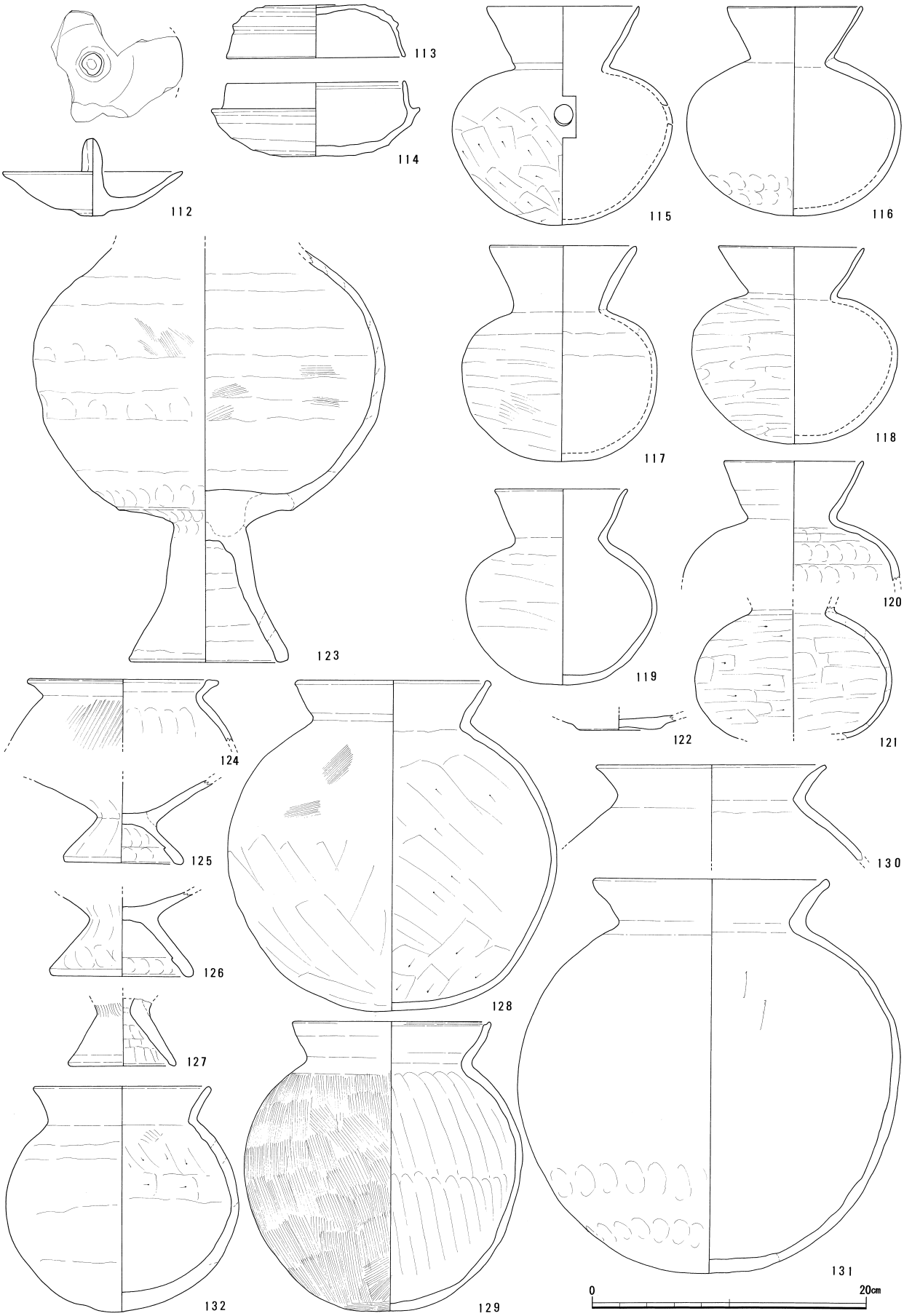
第Ⅱ-５図　高瀬遺跡出土遺物①（25は1：2、それ以外は1：4）SD１Ⅰ層（1～25）・Ⅱ層（その他）



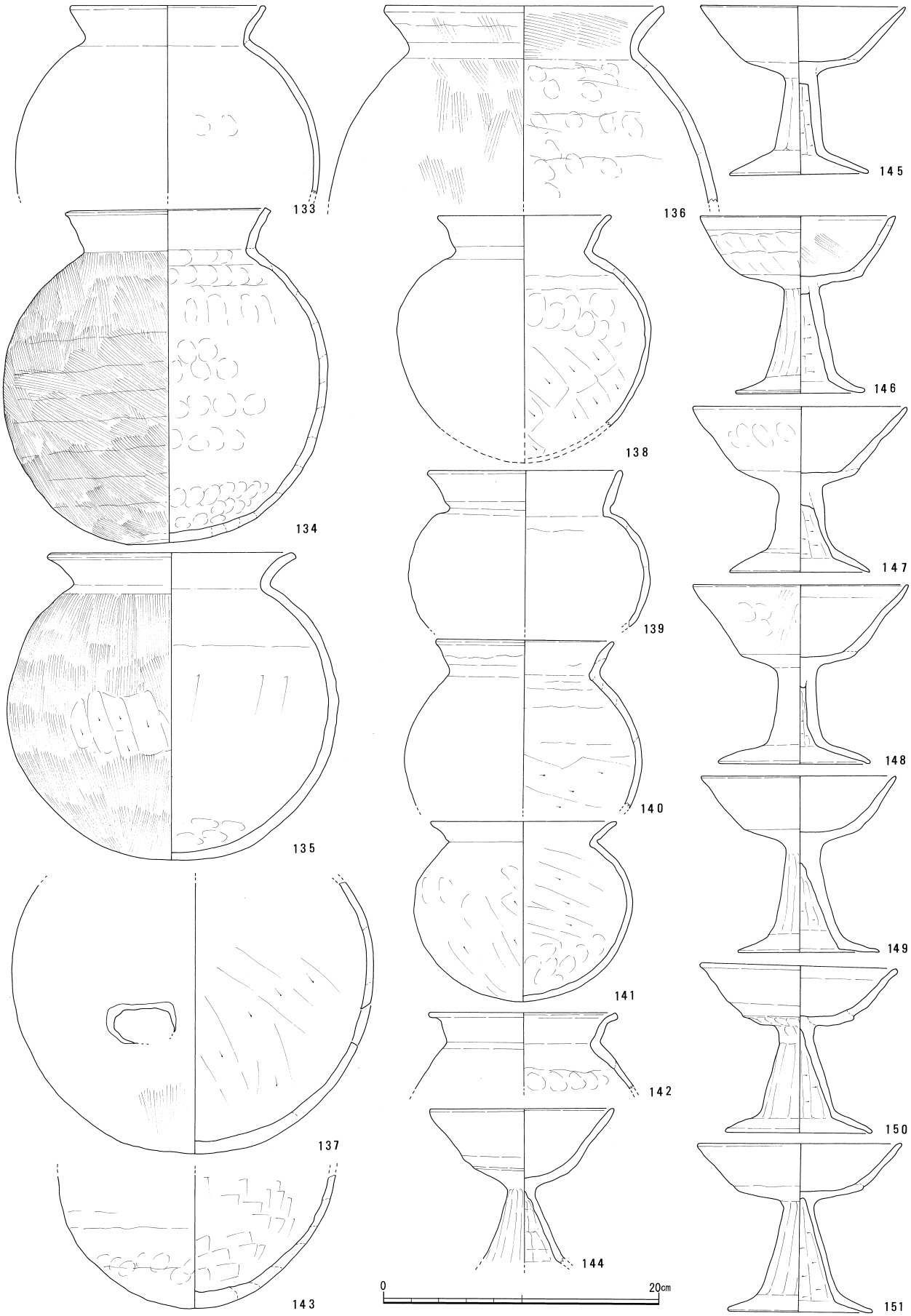
第Ⅱ-6図　高瀬遺跡出土遺物②（1：4）SD 1　Ⅱ層



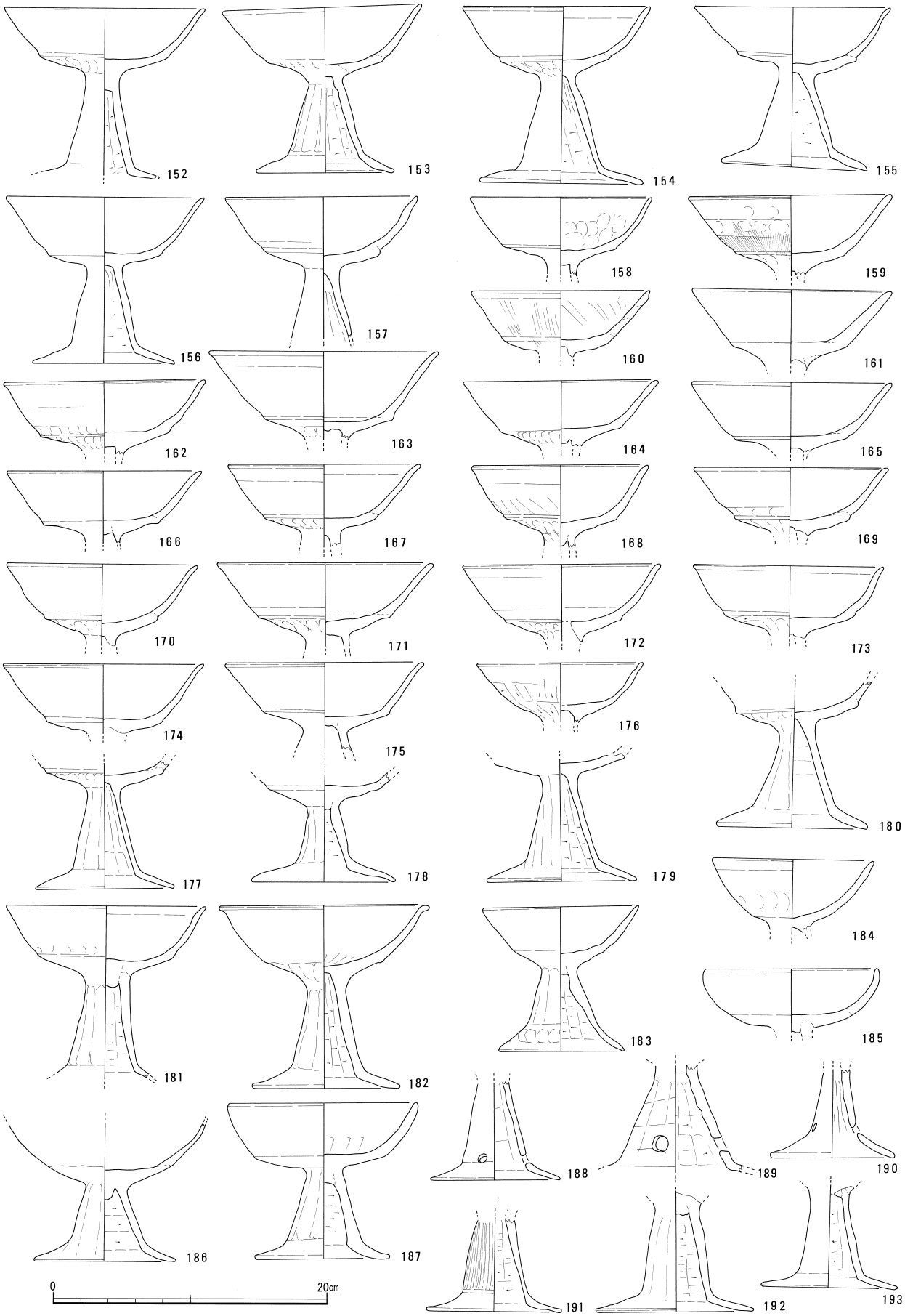
第Ⅱ-7図　高瀬遺跡出土遺物③（1：4）SD 1 Ⅱ層



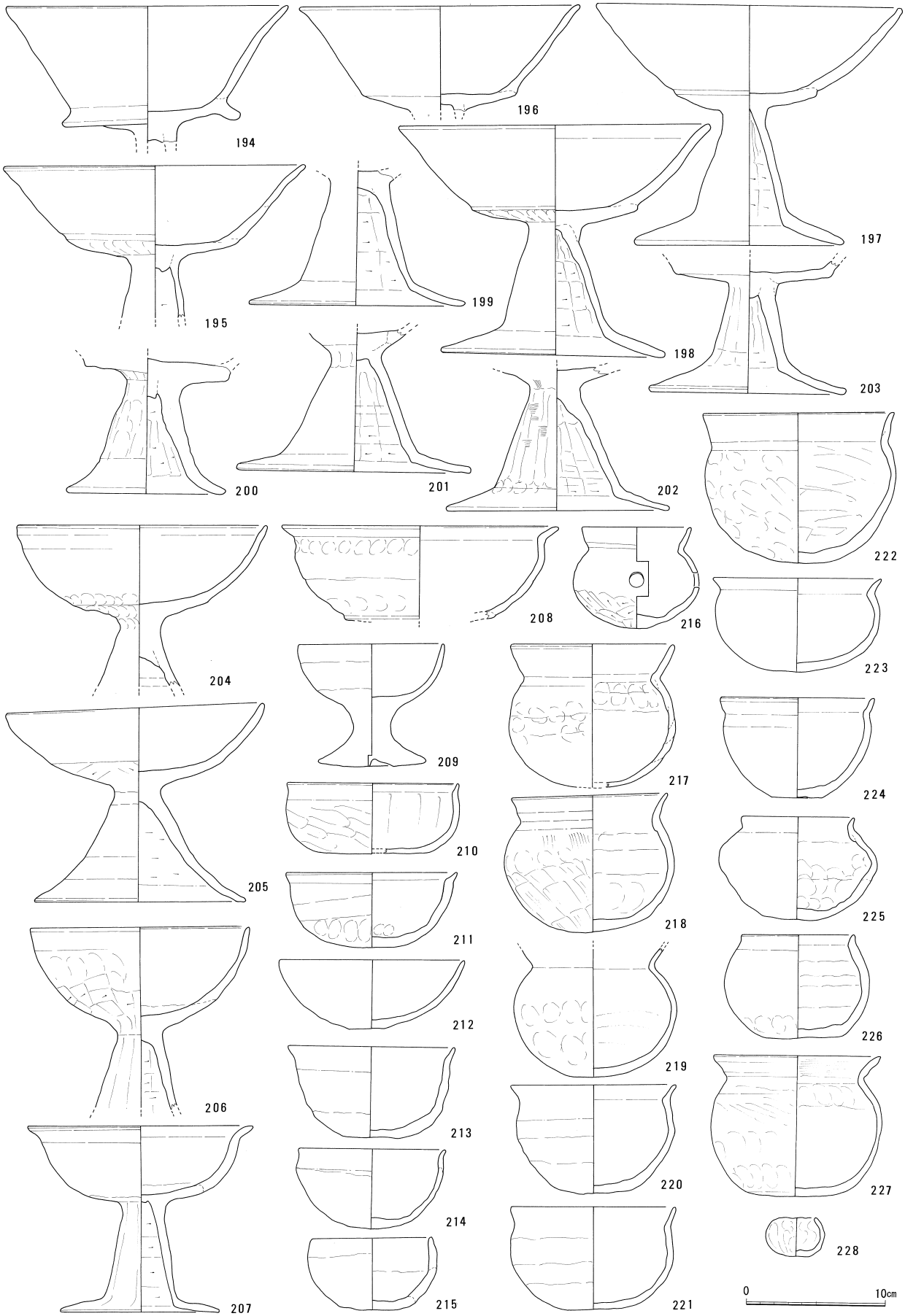
第Ⅱ-８図　高瀬遺跡出土遺物④（1：4）SD１Ⅱ層（112～114）・Ⅲ層（その他）



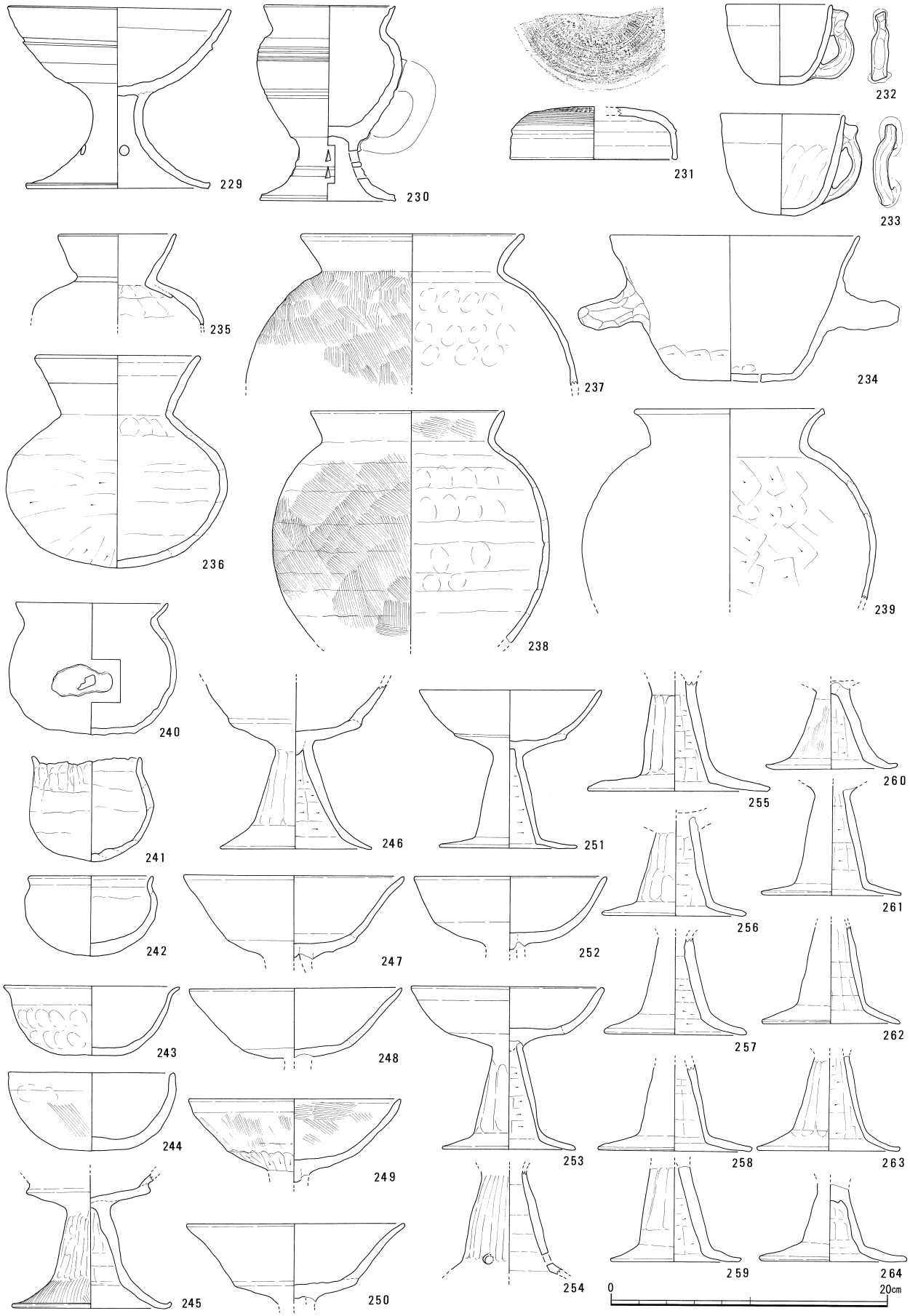
第Ⅱ-9図　高瀬遺跡出土遺物⑤（1：4）　SD１Ⅲ層



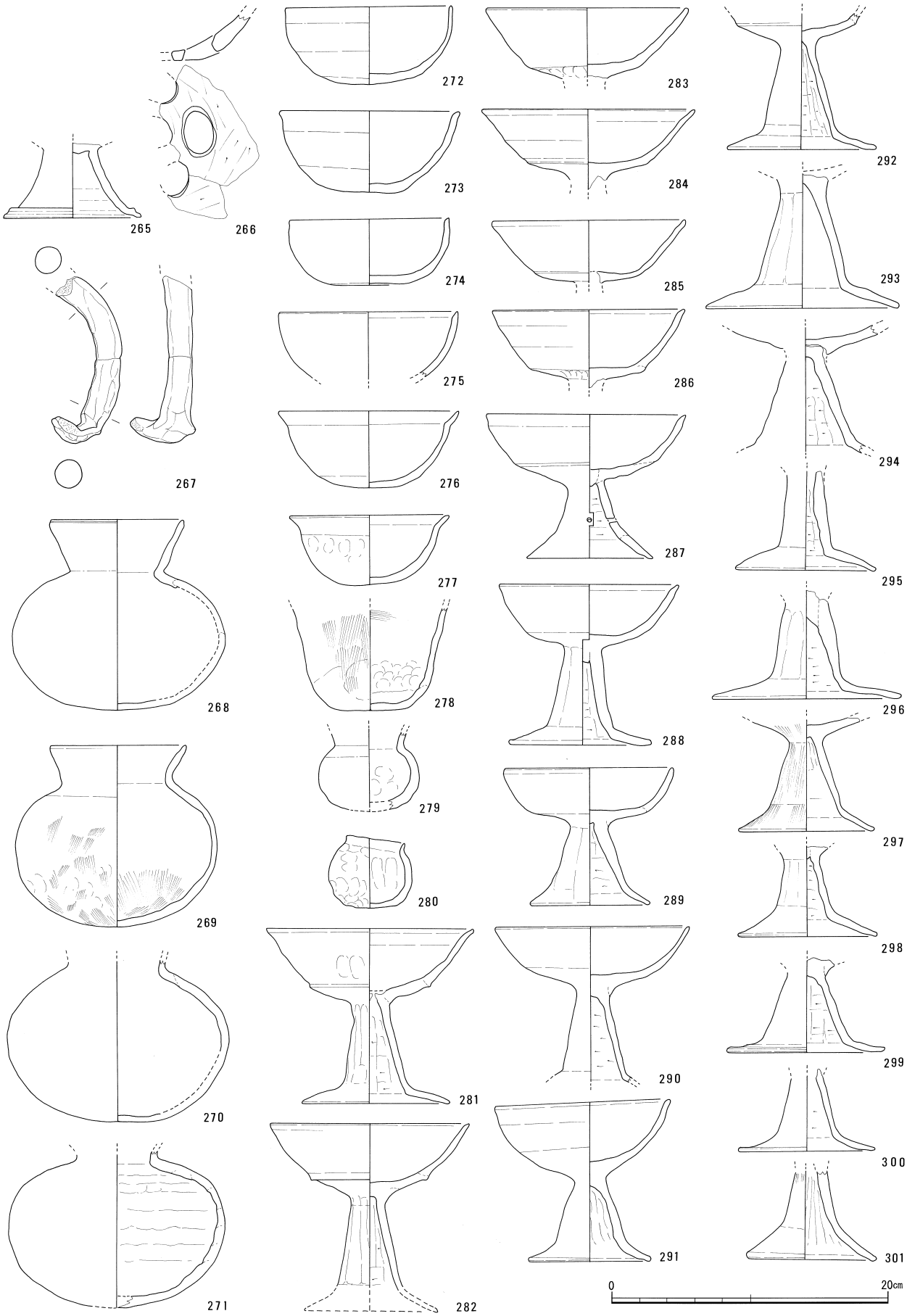
第Ⅱ-10図　高瀬遺跡出土遺物⑥（1：4）　SD 1 Ⅲ層



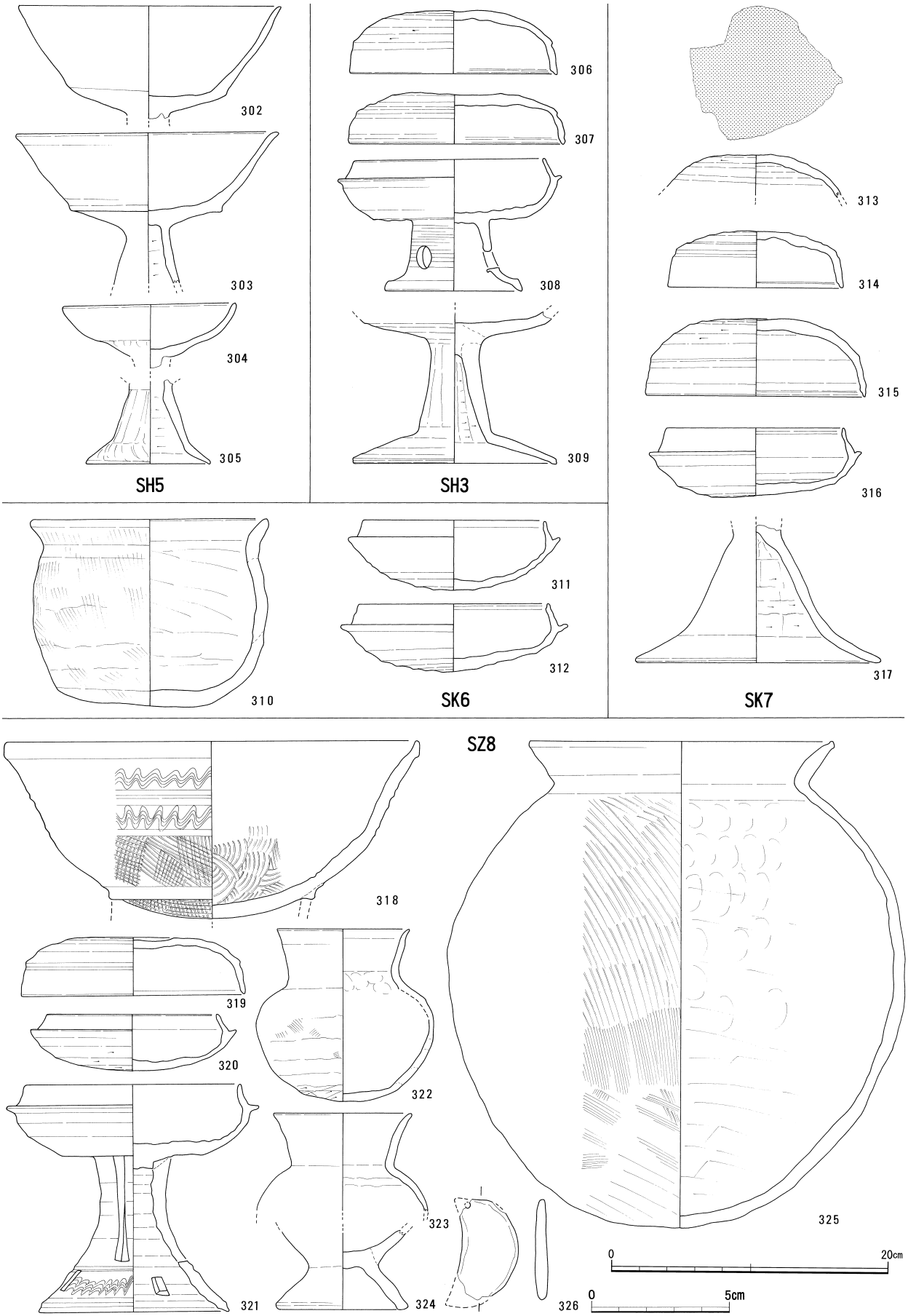
第Ⅱ-11図　高瀬遺跡出土遺物⑦（1：4）SD 1 Ⅲ層



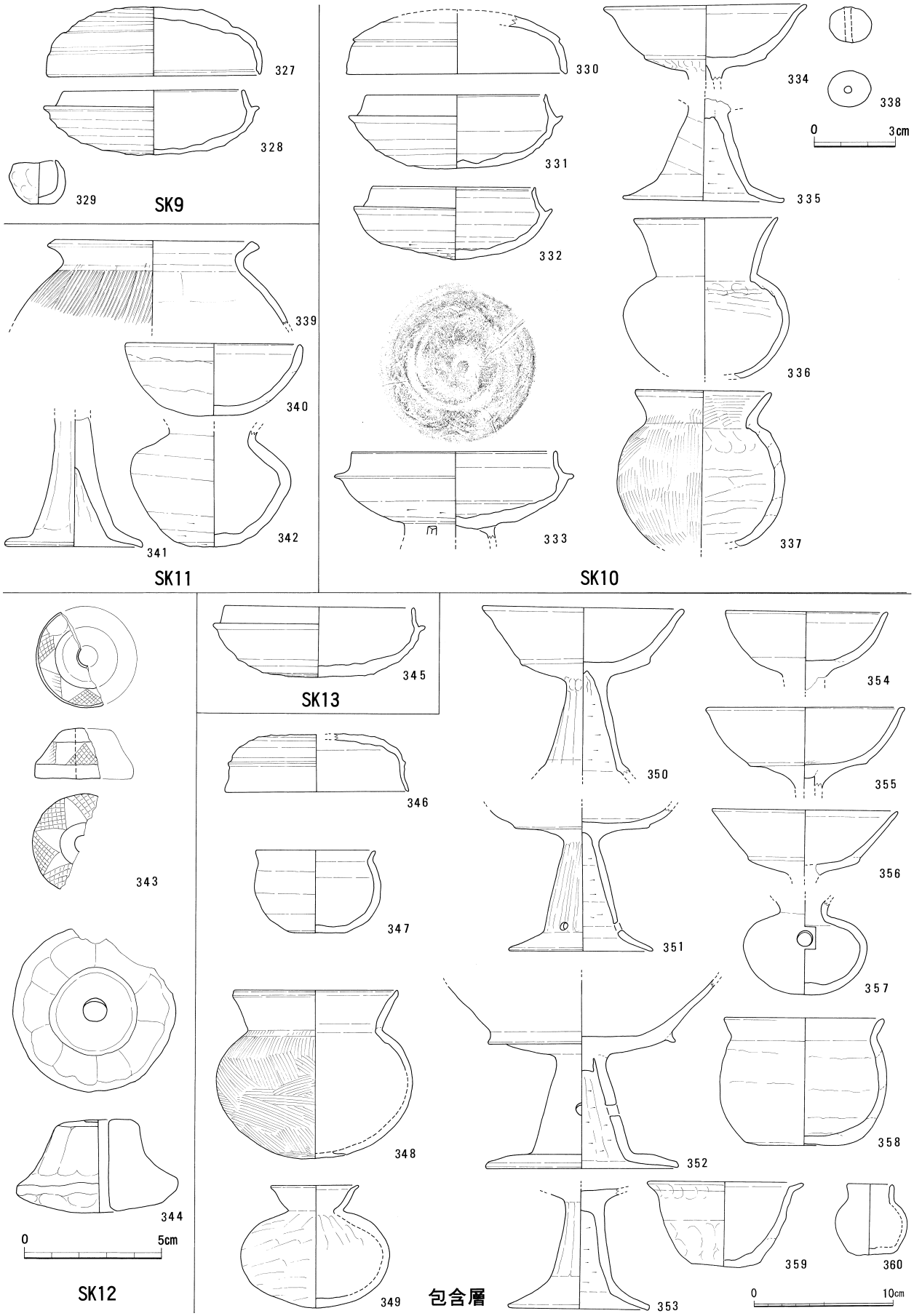
第Ⅱ-12図　高瀬遺跡出土遺物⑧（1：4）SD１Ⅲ層（229～230）：「Ⅲ層下部」（その他）



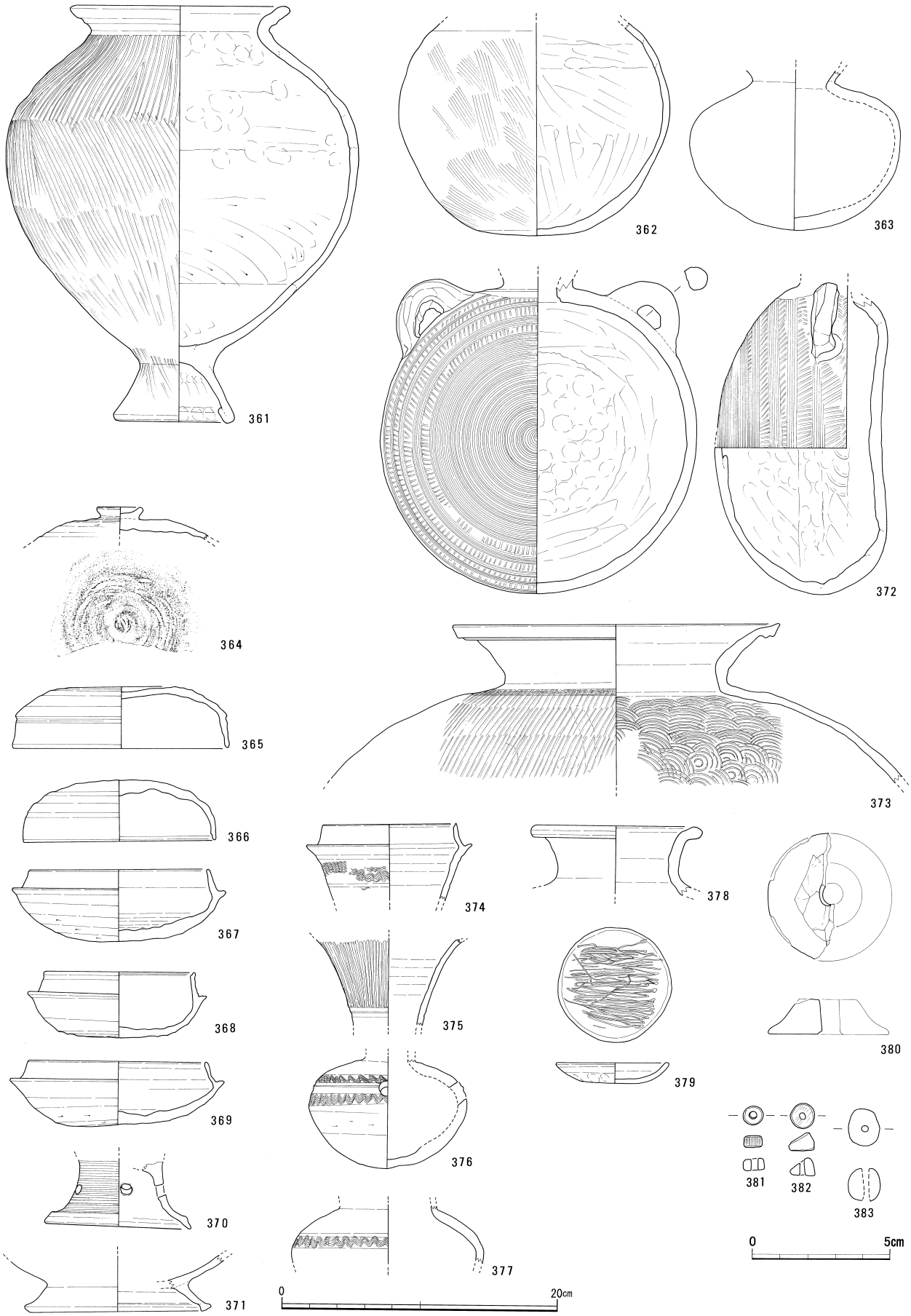
第Ⅱ-13図　高瀬遺跡出土遺物⑨（1：4）SD 1 Ⅲ層不明



第Ⅱ-14図　高瀬遺跡出土遺物⑩（326は１：２、それ以外は１：４）



第Ⅱ-15図　高瀬遺跡出土遺物⑪（344・345は1：2、それ以外は1：4）



第Ⅱ-16図　高瀬遺跡出土遺物⑫（380～383は１：２　それ以外は１：４）

Ⅲ　伊賀市真泥　小上野墓ノ谷古墳・遺跡
平田　小上野西谷遺跡

1　調査の経過

遺跡は、小上野墓ノ谷古墳・遺跡が伊賀市（調査当時は阿山郡大山田村）真泥、小上野西谷遺跡が伊賀市平田字西谷に所在する。

小上野墓ノ谷古墳・遺跡の発掘調査は、昭和60年度農林漁業用揮発油税財源替農道整備事業に伴い、1985年７月15日から開始し、同年８月26日に終了した。最終の調査面積は、600㎡であった。

一方、小上野西谷遺跡は、昭和62年度の同事業に伴い、1987年5月6日から開始し、同年6月26日に終了した。最終の調査面積は、760㎡であった。

遺構図の作成は、いずれの遺跡も１/10及び１/20作図の手描実測を基本としているが、古墳墳丘の測量など１/100作図の平板実測も実施した。

2　位置と環境

山田盆地は、木津川支流の服部川の流域に拓けた山間の小盆地で、伊賀盆地の東南部を占める。

５世紀初頭前後、盆地西部の丘陵上に全長90ｍの前方後円墳、荒木車塚古墳が築造された後、寺垣内・寺音寺・鳴塚と後期に至るまで前方後円墳が単独墳として築造された。その後、盆地の南北丘陵・裾に多数の群集墳が造営され、それぞれ核になるような大型横穴式石室を内包する円墳もしくは方墳を含む。服部川北岸では辻堂古墳、南岸では向山２号墳などが代表である。向山古墳群の近傍は、今回報告する小上野墓谷古墳や前山古墳をはじめ、多くの古墳が数基程度のまとまりで群集墳を形成している。

古代に入ると服部川北岸に山田郡唯一の古代寺院として鳳凰寺廃寺が建立された。中世には、多数の中世城館も築かれるなど、盆地全域で活発な遺跡形成が繰り返された。[1]　（穂積）

3　小上野墓ノ谷古墳・墓ノ谷遺跡

（１）調査区と層序

調査区中央に農道があり、農道より東側をＡ地区、西側をＢ地区として発掘した。Ａ地区には小上野墓ノ谷古墳、Ｂ地区には中世火葬穴群（小上野墓ノ谷遺跡）がある。

基本層序は両地区とも第１層表土（黄茶褐色土）、第２層地山（粘質黄褐色土）で、遺構は表土直下で検出された。

（２）遺構

①Ａ地区の遺構－小上野墓ノ谷古墳－

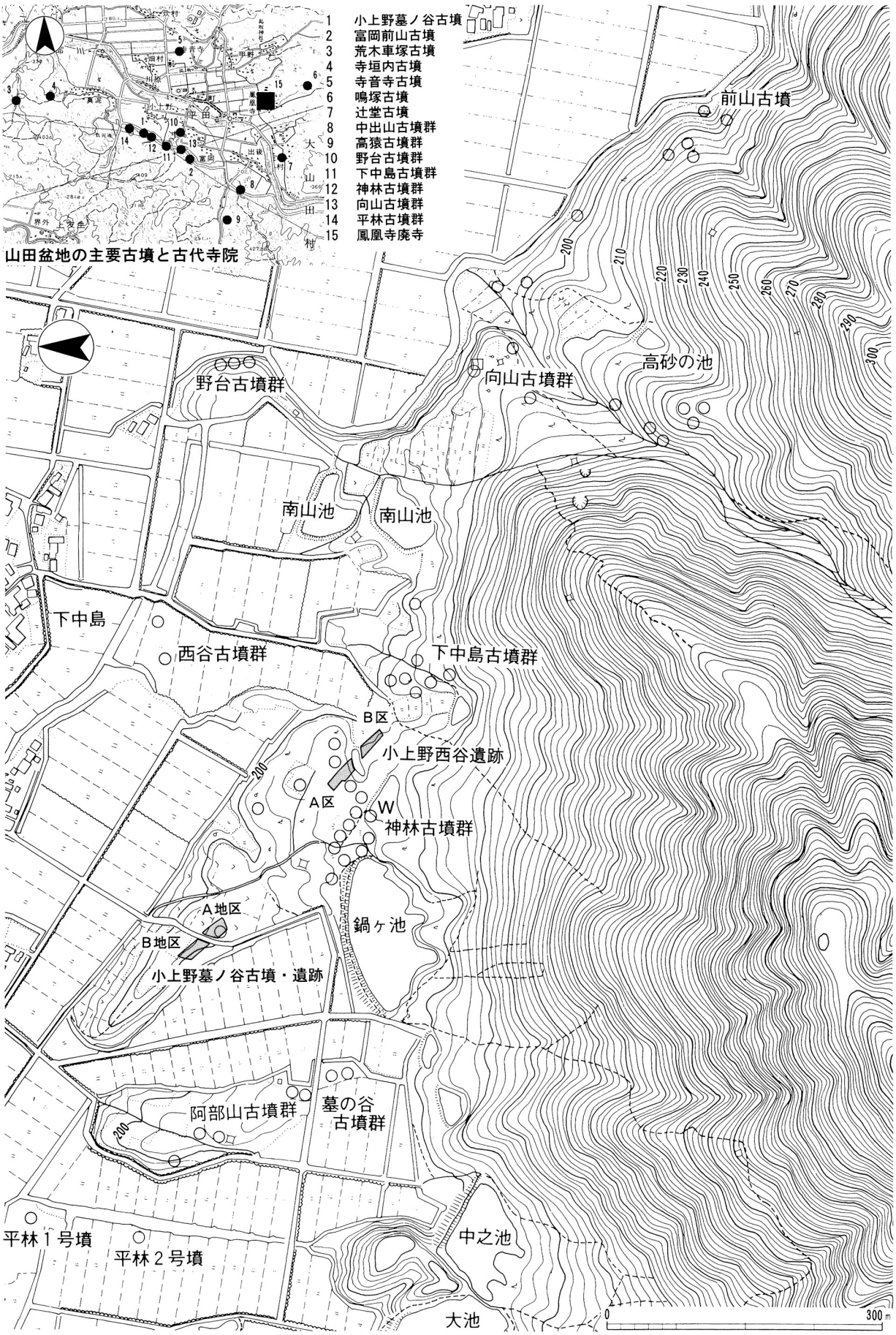
墳形と墳丘　西部は農道のため削平されて欠き、残存する墳丘面も削平されてなだらかな傾斜地となっていた。推定径15ｍの円墳で、残存墳丘部高は約0.9ｍである。なお、盛土は確認されなかった。

周溝　墳丘全域には及んでいない。地山を掘り込み、北部で幅３ｍ、深さ30㎝、南東部で幅4.5ｍ、深さ20㎝程である。周溝埋土は２層に分けられ、上層が粘質茶灰色土、下層が粘質茶褐色土であった。上層から須恵器杯身（47）・杯蓋（48）が、下層から直口壺（49）が出土した。

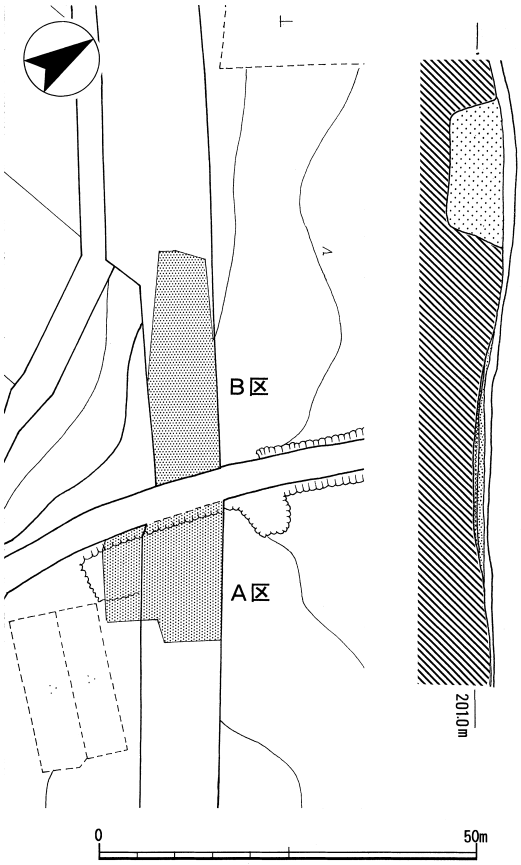
主体部　天井石と奥壁、側壁の上部及び羨道部端を欠くが、主軸をＮ43°Ｅにおき、南西に開口する右片袖の横穴式石室である。石室の規模は奥壁幅1.6ｍ、玄室長5.0ｍ、羨道幅0.9ｍ、羨道の残存長2.0ｍで、玄室は長方形プランを呈し、羨道は左側掘形の検出によりさらに２ｍほど延びると考えられる。石室の構築をみると、奥壁・西側壁とも最下段に比較的大形の石を横位に据え、その上に割石や自然石の小石を裏込めしながら不定形の山石を積み上げている。奥壁部では４～５段残存している。なお、石室構築のための掘形は不整長方形プランを呈し、断面逆台形状に掘られている。

玄室東奥の床面には人頭大の石が0.9ｍほどの間隔を開けて２列に並べられている。棺台かと推定される。また、玄門部付近からは排水溝が設けられている。床面からは、須恵器の杯蓋（２）・杯身（４～６）、台付長頸壺（８）、土師器小形壺（７）、長頸壺（９）、勾玉（25～28）、鉄鏃（17～22）、刀子（23）、馬具（11～16）等が床面より出土した。

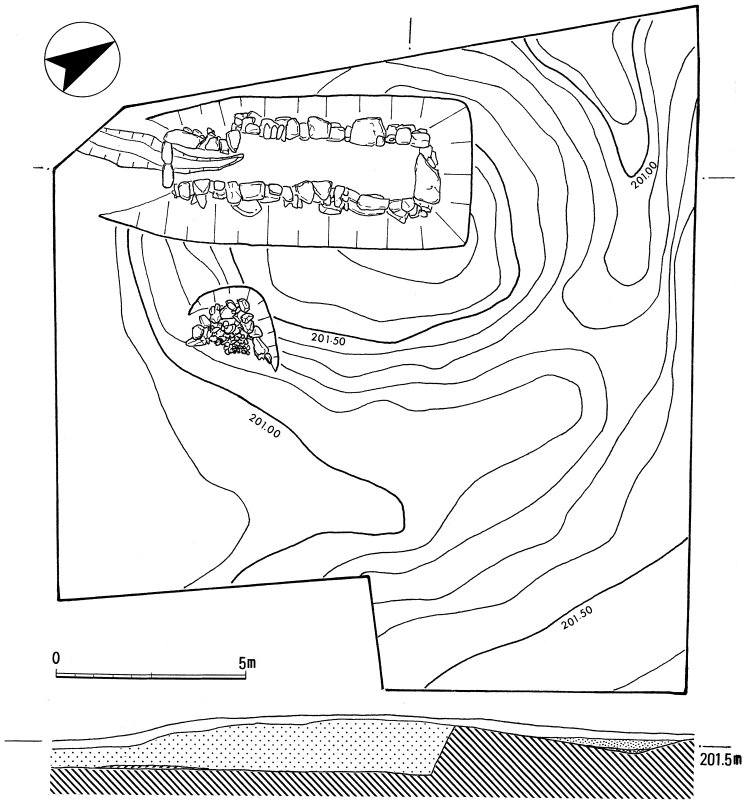
小石室１　墳丘の南斜面で検出された幅1.1ｍ、残存長1.5ｍの小石室である。床面はやや勾配をもつが、拳大から人頭大の扁平な石が敷き詰められ、ほぼ平坦に構築されている。奥壁、側壁には床面の石より大きい山石が用いられ、１～２段残存じてい



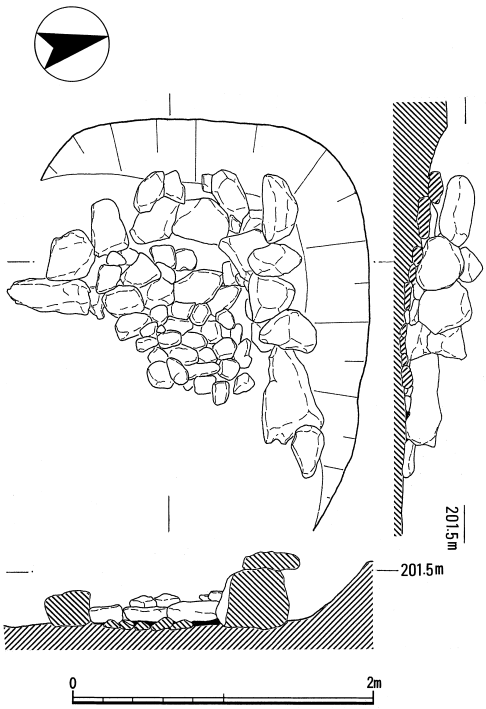
第Ⅲ-1図　小上野墓ノ谷古墳・遺跡、小上野西谷遺跡、富岡前山古墳位置図（左上1：50,000）と地形図（1：6,000）



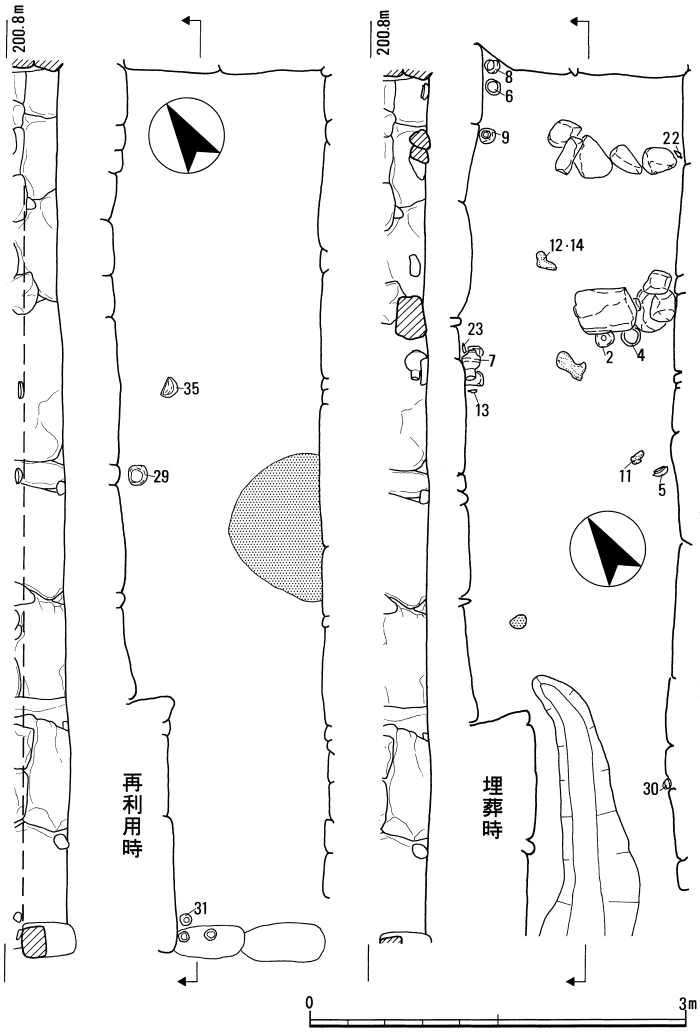
第Ⅲ-２図　小上野墓ノ谷古墳・遺跡
調査区位置図（１：1,000）



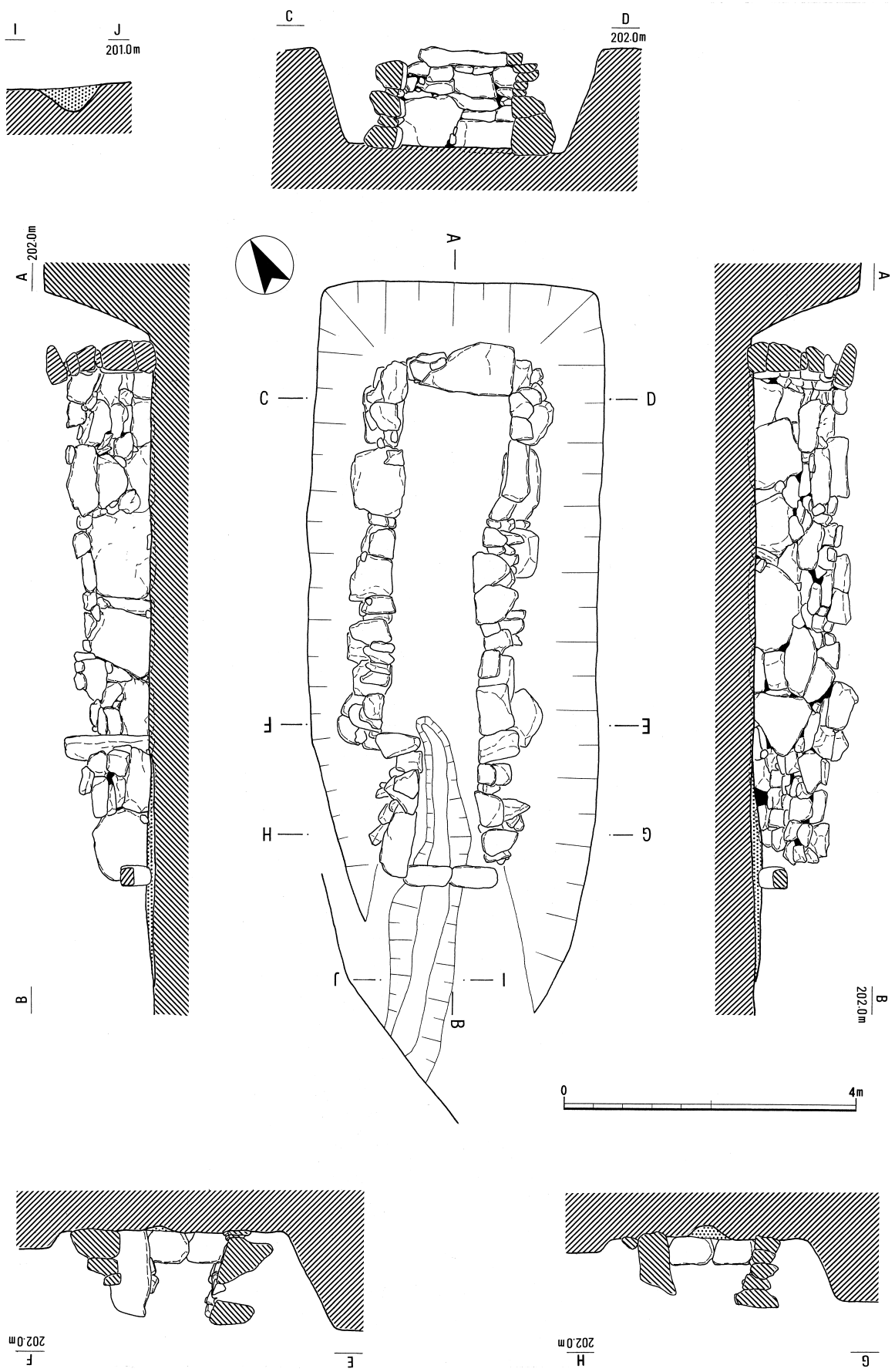
第Ⅲ-３図　小上野墓ノ谷古墳　墳丘測量図（１：200）



第Ⅲ-４図　小石室１（１：50）



第Ⅲ-５図　小上野墓ノ谷古墳 遺物出土状況（１：60）



第Ⅲ-6図　小上野墓ノ谷古墳　石室（1：80）

る。石の壁面には火を受けた痕跡がみられるところがあり、埋土中に少量の炭化物が含まれていた。また、小石室の掘形検出面から瓦器椀（62）が出土しており、小石室の所属時期の一端を示している可能性がある。

石室内上面遺構　古墳の石室床面より50㎝上面において、半径60～70㎝の不定形半円状に広がる人骨砕片混じりの焼土面が検出された。位置は玄室の南東部で、焼土が接する東側壁は赤褐色に焼けていた。また、羨道を閉塞するように設置された２個の石の上面レベルは焼土面とほぼ同じである。このほぼ同一レベル面上からは、須恵器杯身（29）、小皿（30）、土師器杯（35・37）などが出土した。

②Ｂ地区の遺構（小上野墓ノ谷遺跡）

土坑ＳＫ１　長径1.35ｍ×短径0.45ｍの長方形を呈した土坑である。後世の削平のためか検出面からの深さは極めて浅く、６㎝を測るにすぎない。しかし、東側小口部から、土師器甕（63）、杯（64～65）が出土した。

火葬穴ＳＸ１～35　ほとんどが不整形な楕円形態で、多くは長軸方向を斜面の傾斜方向とほぼ平行なＮ40°Ｅ～Ｎ50°Ｅに置く。残存長は長軸約0.6～1.4ｍ、短軸0.4ｍ～0.9ｍで、規模にはばらつきがあるが、長軸1.1ｍ前後、短軸0.7ｍ前後のものが多い。深さは10～20㎝ほどのものが大多数であるが、ＳＸ27・ＳＸ32など大形のものは底が大きく窪み、深さは40㎝ほどに及ぶ。壁面は底まで赤褐色を呈し、火熱を受けて焼けた痕跡がみられ、その厚さは0.5㎝～２㎝ほどである。埋土は粘質灰褐色土で、上層には炭化物が多く混入し、ＳＸ８・15・20・25・27・28・29・35・の８基からは人骨細片が少量検出された。出土遺物は極めて少なく、ＳＸ18・19・27・29から土師器杯・小皿類が計６点出土したのみである。いずれの土器も埋土上層からの出土である。

なお、35基の分布状況は、中央部及び傾斜地の上方にあたる北東部から東部に多く、やや急勾配となる下方の南西部や西部では疎らになっている。(仁保)

（３）　遺物

①Ａ地区出土遺物

横穴式石室出土古墳期遺物（１～28）　土器では須恵器杯蓋（１～３）・杯身（４～６）・脚付長頸壺（７）・土師器小形壺（８）・長頸壺（９）、鉄製品では馬具（11～16）・鉄鏃（17～22）・刀子（23）・不明鉄製品（24）、石製品では勾玉（25～28）がある。

杯身類は、法量が12～13㎝におさまる。７は、肩部が張らず、丸みを帯びている。

馬具は、方形立聞素環鏡板付轡（10）、木芯鉄板張壺鐙（11～12）、鉄地金銅装方形飾金具（13）、責金具（14～15）、鉸具（16）がある。13と14・15は組み合って辻金具を構成する可能性が指摘されている。[(2)] 13は、鋲も金銅装である。

鉄鏃は、いずれも平根鏃で、細根の長頸鏃を含まない。逆刺をもつ腸抉柳葉式のものもあるが（18）、鏃身関部は直角ないし鈍角のものもが主体である。また、茎部でみると、19のみ無茎、他は有茎で、22は棘状関をもつ。その他の鉄製品では、24はヤリガンナと想定したが、やや厚く、馬具に付属する部品かもしれない。

勾玉は瑪瑙製で、大2点（25～26）と小2点（27～28）がある。

横穴式石室出土再利用時遺物（29～42）　大きく奈良時代と中世の2時期の遺物がある。

奈良時代のものには須恵器杯身（29～30）と土師器杯（31～40）がある。このうち須恵器杯身30と、土師器杯37・38（さらに後述の45・46）は焼成の差はあるものの、形態や調整は非常に類似している。

中世のものには、瓦器椀（41～42）がある。

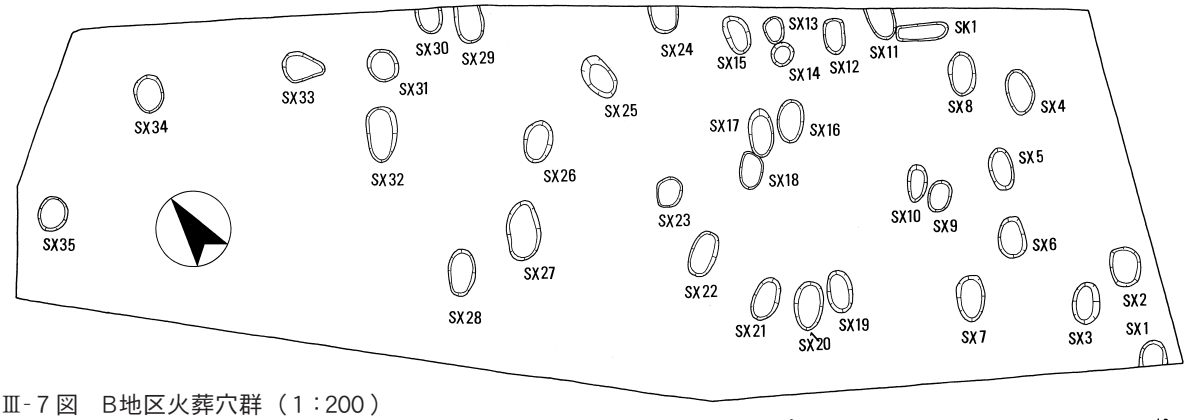
石室入口出土遺物（43～46）　土師器杯である。43～45は、口縁部を中心に煤が付着している。いずれも古代に属し、再利用時の所産であろう。

周溝出土遺物（47～49）　須恵器杯身（47）・杯蓋（48）・直口壺がある。直口壺は、口縁外面、体部下部にタタキ後カキメを施す。

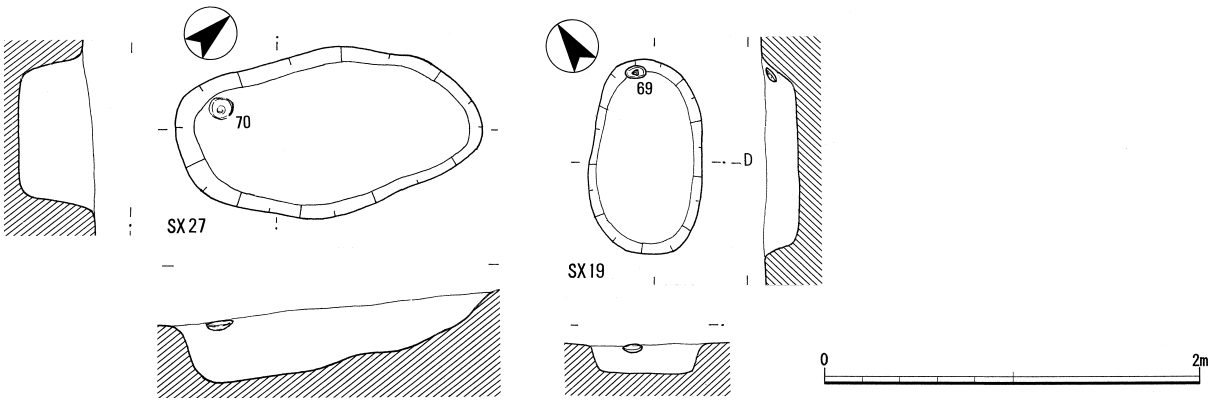
Ａ区表土等出土遺物（51～61）　須恵器大甕（50）・高杯もしくは脚付杯（51）・杯身（52～57）、土師器皿（58～60）・甕（61）がある。いずれも古代に属するものであろう。

②Ｂ地区出土遺物

ＳＫ１出土遺物（63～65）　土師器甕（63）・杯（64～65）がある。いずれも奈良時代に



第Ⅲ-７図　B地区火葬穴群（１：200）

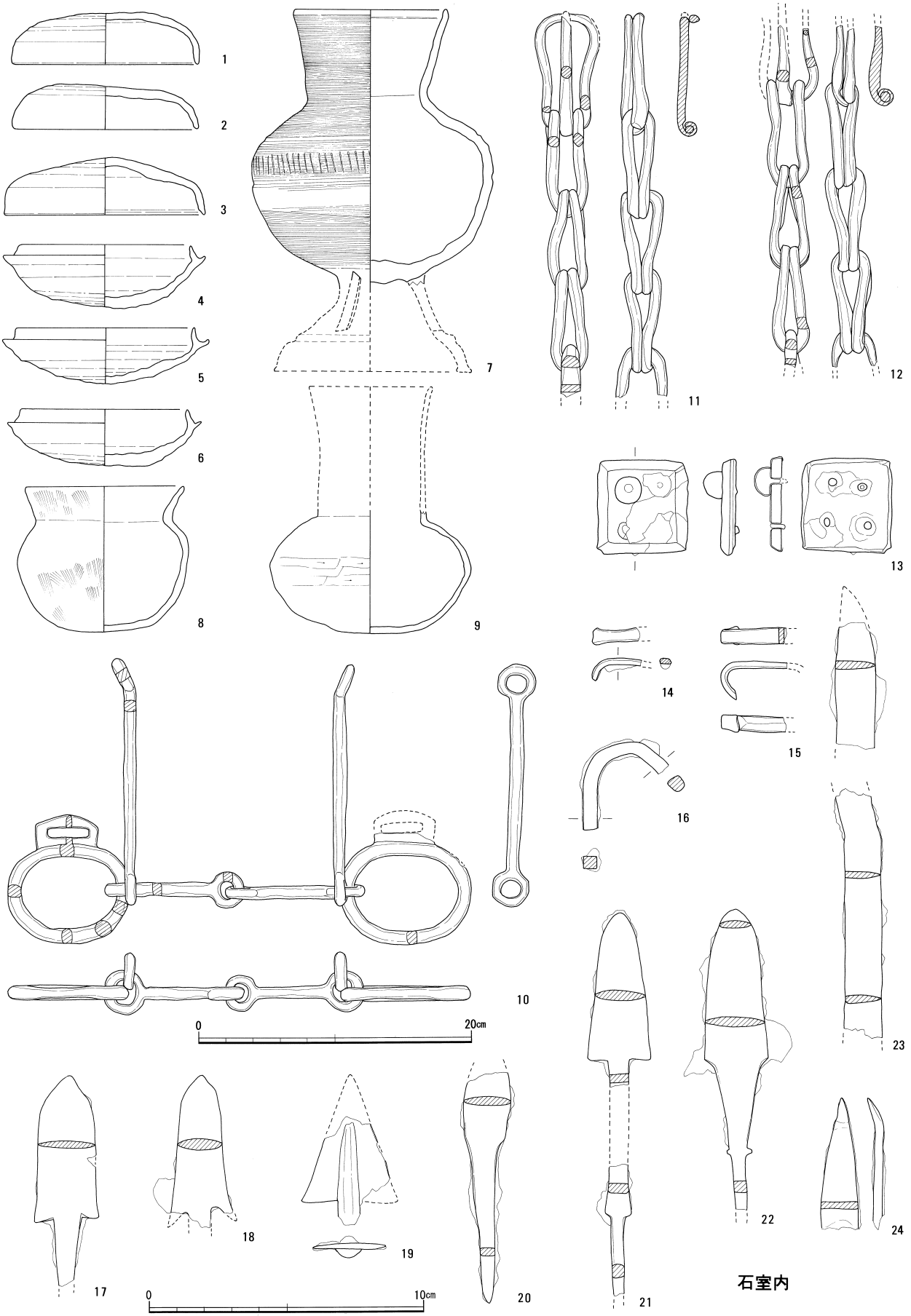


第Ⅲ-８図　SX27、SX19（１：40）

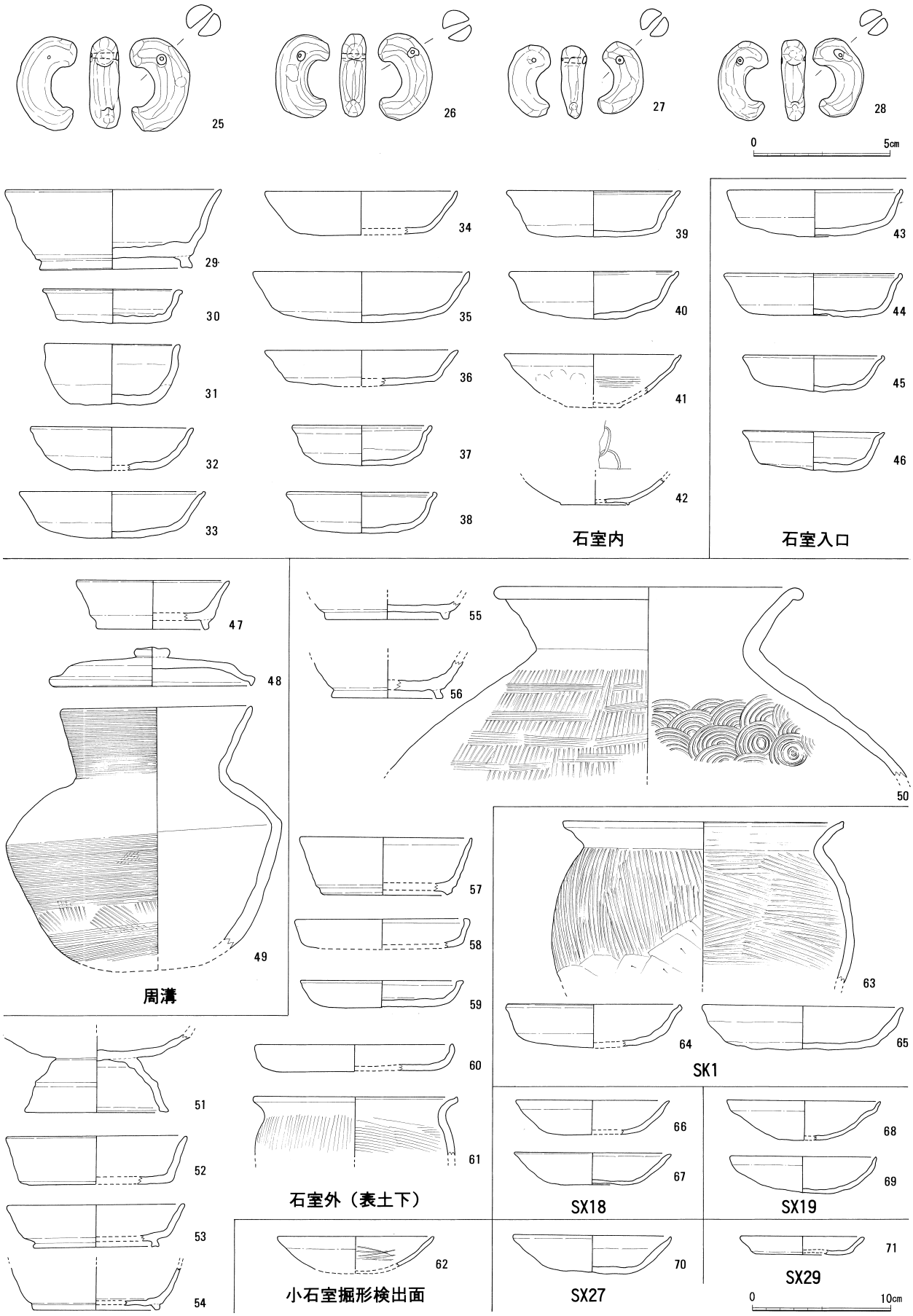
遺構名	方向（長軸方向）	規模（cm）			炭化物の混入度合い	人骨細片出土	出土遺物等
		長軸	短軸	深さ			
SX 1	N46°E	56以上	66	20	多	×	
SX 2	N43°E	104	76	17	多	×	壁面の焼土明瞭
SX 3	N49°E	112	68	25	多	×	
SX 4	N40°E	120	72	21	多	×	
SX 5	N40°E	112	60	22	多	×	壁面の焼土明瞭
SX 6	N45°E	106	70	17	多	×	
SX 7	N41°E	116	70	22	多	×	
SX 8	N44°E	110	70	22	多	○	
SX 9	N58°E	80	50	13	多	×	
SX10	N49°E	92	44	13	並	×	
SX11	N30°E	86以上	70	15	並	×	
SX12	N38°E	90	50	10	並	×	
SX13	N33°E	64	46	4.5	少	×	
SX14	N73°E	58	50	18	多	×	
SX15	N22°E	98	60	14	多	○	
SX16	N44°E	108	64	16	並	×	
SX17	N39°E	124	58	22	多	×	
SX18	N43°E	100	58	17	並	×	土師器皿破片出土

遺構名	方向（長軸方向）	規模（cm）			炭化物の混入度合い	人骨細片出土	出土遺物等
		長軸	短軸	深さ			
SX19	N33°E	122	60	18	並	×	土師器皿完形１点、同破片出土
SX20	N48°E	120	70	39	並	○	
SX21	N66°E	118	64	14	多	×	
SX22	N61°E	118	66	44	並	×	
SX23	N44°E	74	74	11	並	×	
SX24	N41°E	72以上	76	13	多	×	
SX25	N60°E	124	78	18	並	○	
SX26	N56°E	108	68	35	並	×	
SX27	N49°E	140	90	39	多	○	土師器皿完形出土
SX28	N49°E	120	72	25	並	○	
SX29	N40°E	100以上	68	18	並	×	土師器皿破片出土
SX30	N41°E	70以上	72	14	並	×	
SX31	N25°E	90	80	25	並	×	
SX32	N42°E	144	92	41	多	×	
SX33	N45°E	110	84	13	並	×	
SX34	N43°E	100	74	17	並	×	
SX35	N68°E	90	70	18	多	○	

第Ⅲ-１表　小上野墓ノ谷遺跡火葬穴一覧表



第Ⅲ-９図　小上野墓ノ谷古墳出土遺物（13～24は１：２、それ以外は１：４）



第Ⅲ-10図　小上野墓ノ谷古墳・遺跡出土遺物（25～28は１：２、それ以外は１：４）

属する。

ＳＸ18出土遺物（66～67）　土師器皿である。在地系と思われ、概ね14～15世紀頃のものであろうか。

ＳＸ19出土遺物（68～69）　土師器皿である。いずれも口縁部は摘み上げ気味である。

ＳＸ27出土遺物（70）　土師器皿である。平底で、口縁部が外方へ直線的に立ち上がっている。

ＳＸ29出土遺物（71）　土師器皿である。口縁部の立ち上がりは浅い。　（穂積）

（４）　小結

小上野墓ノ谷古墳・遺跡の調査成果は、大きく分けて、①小上野墓ノ谷古墳（古墳後期）、②古墳の再利用（奈良時代及び中世）、③中世火葬穴群（小上野墓ノ谷遺跡）という３つにまとめることができる。以下、順に簡単なまとめと若干の考察をしておこう。

①小上野墓ノ谷古墳

小上野墓ノ谷古墳は、後世の削平によって墳丘は削られ、また古代・中世の再利用で早くも奈良時代には石室は開口していたため、埋葬時の状態をそのまま残しているとはいい難い。しかし、棺台と推定される礫がある程度原位置を残していると考えられることなど意外と床面残存の良い部分もあり、馬具の一部など盗掘を免れた副葬品も確認できた。最初の再利用時である奈良時代の時点で既に埋葬当初の床面は深さ30㎝ほどの土砂で覆われており、このことが後の盗掘の厄から多少の副葬品の残存をもたらしたと推定される。

さて、本墳は、周辺の古墳が群集墳形態を採るのに対し、現状では周囲の古墳と若干距離は離れており、単独墳的状況を呈している。しかし、本墳自体が削平を受け、墳高が１ｍ以下であったことを考えると、本墳周辺にもかつては他の古墳があって、群構成を採っていたものと推定される。本墳より大型の向山２号墳でも少数の古墳による群集墳形態を採っていることは、この推定を支持していよう。

古墳の時期は、石室床面から出土した須恵器類は、概ね高蔵209号窯式[(3)]に併行するものと推定され、７世紀初頭前後の築造と考えられる。

全長15ｍの円墳であること、玄室長５ｍ、幅2ｍの石室規模などは、これまで確認されている周辺の石室と対比しても特に大きくもない平均的な規模で、当地の群集墳における一般的な大きさといえよう。

そのうえで、残された副葬品についてみてみると、いくつかのてんで小上野墓ノ谷古墳としての特徴を捉えることができる。具体的には、

・耳環類の出土がないかわりに大小２セットの瑪瑙製勾玉をもつこと
・轡・鐙・辻金具等の馬具が含まれていること
・鉄鏃組成に細根式が含まれず平根式のみで構成されていること

である。以上の事実は、盗掘による散逸という不確定要素はあるものの、大きな傾向としては指摘できるのではないだろうか。このうち、耳環の有無や鉄鏃形式の特徴は、近傍の前山古墳（本書所収）に比べるとその相違がより明瞭になる。例えば前山古墳では、耳環はあるが勾玉はなく、また鉄鏃は細根系鉄鏃を主体として少量の平根系が混じる後期古墳の鉄鏃組成として一般的なあり方を示していた。それに対して、小上野墓ノ谷古墳のあり方は全く異なっており、同じ小地域内のほぼ同時期（細かくみると前山古墳が若干後出するか）の古墳であっても鉄鏃等の組成に差があったことが明らかとなった。

今後、同時期の周辺の古墳との対比を広く進め、地域内の政治的関係や物品類の流通関係などを把握していく必要性がある。

②古墳再利用

小上野墓ノ谷古墳では、奈良時代以降に石室の再利用が行われ、さらに中世にも再利用されていた。

奈良時代の再利用は、古墳床面より概ね50㎝上面で遺物の出土レベルが揃っており、この面が利用されたとみられる。残された遺物から判断する限り、古墳としての利用はほぼ7世紀初頭までに終息したと考えられ、そこから100年以上の空白期を経てから石室が利用されたことになる。従って、この場合の利用のあり方は「追葬」というよりは「再利用」が適当である。ここから出土した須恵器、土師器は、いずれも杯類の供膳形態のもので占められ、また、火を受けた痕跡もみられることから、石室内で火を燃やし、供献または飲食を行った可能性も考えられ

る。同じレベル面には、人骨細片混じりの焼土面が存在しており、ここで火化を伴う何らかの行為が行われたことを示唆している。なお、出土の土師器杯類は在地系と考えられ[(4)]、現時点では年代観に不明な部分もあり、一部が平安時代にまで下ってくる可能性を否定するものではない。

中世期の再利用は、埋土最上面から瓦器椀が出土したことによる。また、石室内から時期を示す遺物の出土がなかったため確定はできないが、墳丘南側の小石室１の掘形検出面からも瓦器椀が出土しており、小石室１の所属（造営）年代自体もこの時期まで下がってくる可能性も考えられる。小石室の壁面は火化されたところがあり、炭化物も出土していることから、小石室１は古墳の墳丘を利用して中世の火葬施設として利用されたと推定される。

③火葬穴群

小上野墓ノ谷遺跡を特徴づけるもうひとつの遺構が中世火葬穴群である。具体的な特徴は前述の通りであるが、いずれの火葬穴も主軸方向に共通性が見出せること（唯一の土坑であるＳＫ１は火葬穴群と直交主軸）、密集しているにも関わらず基本的に切り合い関係がないことに特徴がある。特に後者の特徴は、129基もの火葬穴群が調査された四日市市菟上遺跡の特徴[(5)]とも一致しており、本来は火葬穴の上部に何らかの顕示施設が存在していた可能性が提起される。また、小上野墓ノ谷古墳における再利用のあり方などをみていると、ここに火葬穴群が設けられた背景として、古墳（塚）の存在が中世の人にも埋葬の場としての存在が意識されていたとみることもできよう。（穂積）

４　小上野西谷遺跡

（１）調査区と層序

東西に長い調査区の間に貯水池があり、この貯水池より西側をＡ区、東側をＢ区として調査された。

基本層序は、Ａ区、Ｂ区ともに1層腐植土（表土）、2層黄褐色土（表土2層）で、部分的に3層茶褐色土もしくは黄茶褐色粘質土が入る部分がある。遺構は、2層もしくは3層の下、地山の暗黄褐色粘質土上面で確認された。表土上面から遺構検出面までの深さは、概ね20㎝～40㎝と非常に浅い。

（２）遺構

①Ａ区の遺構

掘立柱建物３棟、竪穴住居５基、溝２条、土塁状遺構１等が検出された。

竪穴住居ＳＨ１　長径7ｍ×短径6.4ｍ、深さ20㎝で、南側壁際に貯蔵穴が伴い、南東隅から排水溝ＳＤ１が延びる。主柱穴も明瞭で、床面から50㎝以上掘り込まれている。周溝は、2段に掘り込まれている部分があり、壁が立ち上がるための仕様であった可能性がある。

竪穴住居ＳＨ２　土塁状遺構などとの重複のため削平が激しいが、長径5.7ｍ×短径5.6ｍのほぼ正方形プランを呈し、残存の深さは10㎝である。住居中央に炉跡とみられる焼土がある。

竪穴住居ＳＨ３　長径6.6ｍ、短径5.8ｍ、深さ20㎝で、南辺中央に貯蔵穴を伴う。住居中央のやや西寄りに炉跡がある。

竪穴住居ＳＨ４　ＳＨ３と重複する竪穴住居で、住居の南側から東側は欠損する。

竪穴住居ＳＨ５　調査区の南辺に住居北東隅だけが確認されている。残存の深さは10㎝程と浅い。

掘立柱建物ＳＢ１　調査区際に所在するため全体形は不明だが、３間以上×２間以上の側柱建物と思われる。やや柱間が短い傾向にある。

掘立柱建物ＳＢ２　本建物も調査区際のため全体形は不明だが、側柱建物と思われる。南側の妻柱が未検出である。

掘立柱建物ＳＢ３　やや不明瞭な柱穴もあるが、桁行５間×梁行2間の側柱建物である。

溝ＳＤ１　竪穴住居ＳＨ１の排水溝で、幅40㎝、深さ30～50㎝程度としっかりしている。

溝ＳＤ２　調査区東端に存在する幅30㎝、深さ40㎝の南北溝である。

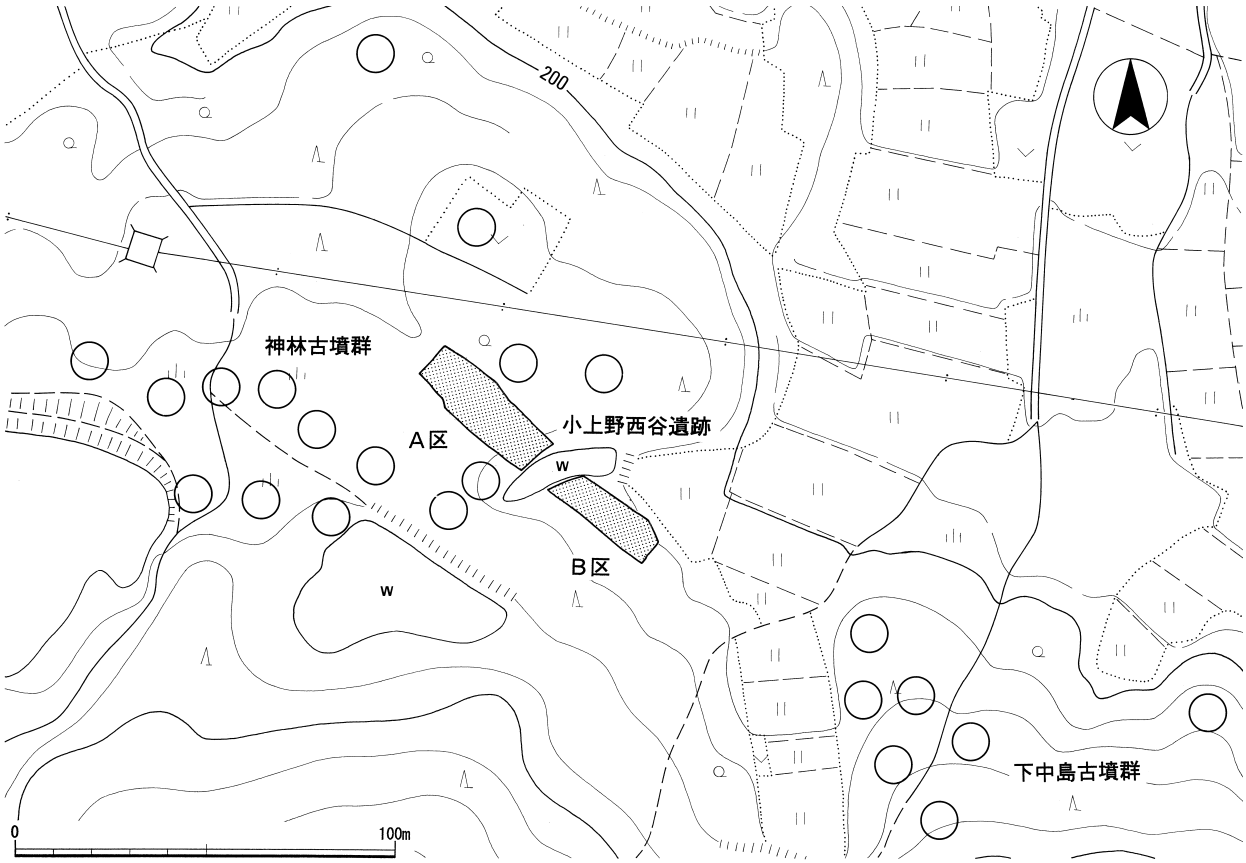
土塁状遺構　調査区を斜めに横切るようにほぼ東西方向で存在する幅3ｍ、残存高40㎝の緩やかな高まりで、南側に深さ80㎝ほどの溝（堀）を伴う。

②Ｂ区の遺構

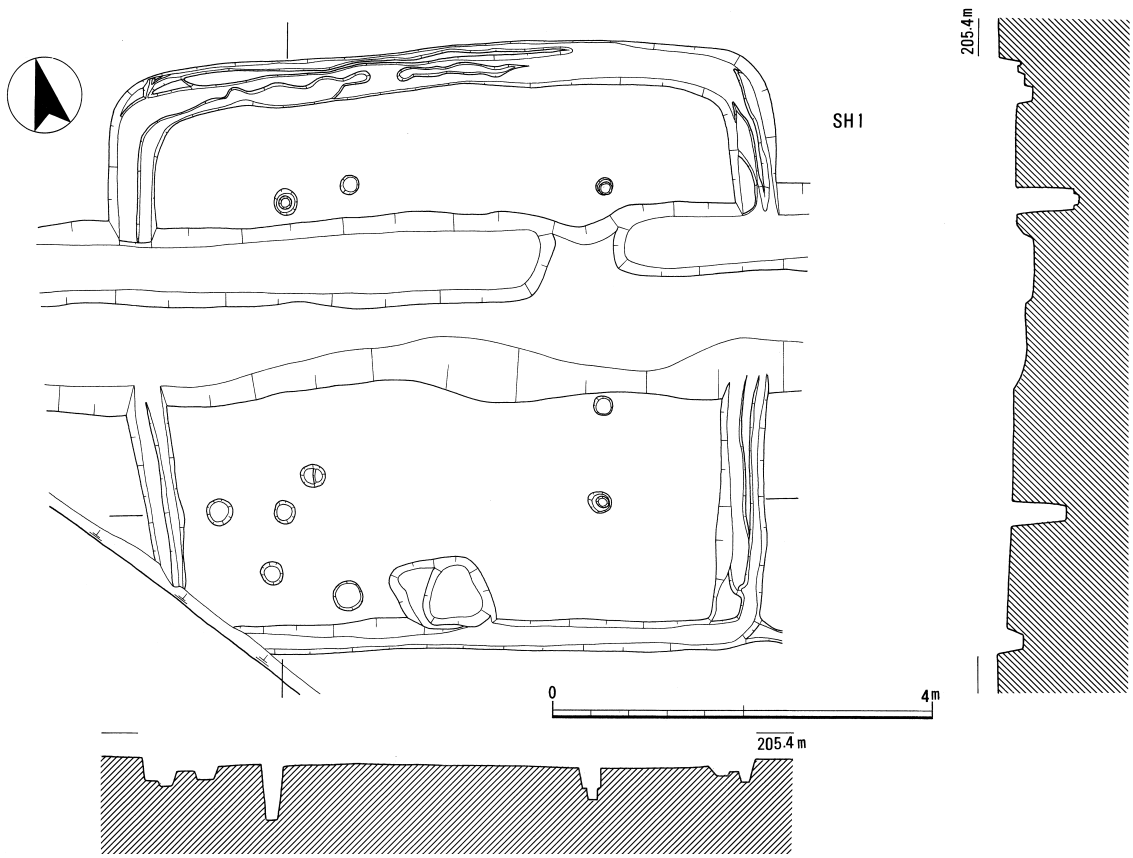
竪穴住居ＳＨ６　長径5.4ｍ×短径4.7ｍ、深さ30㎝で、調査区南壁際中央に貯蔵穴を伴う。

（３）遺物

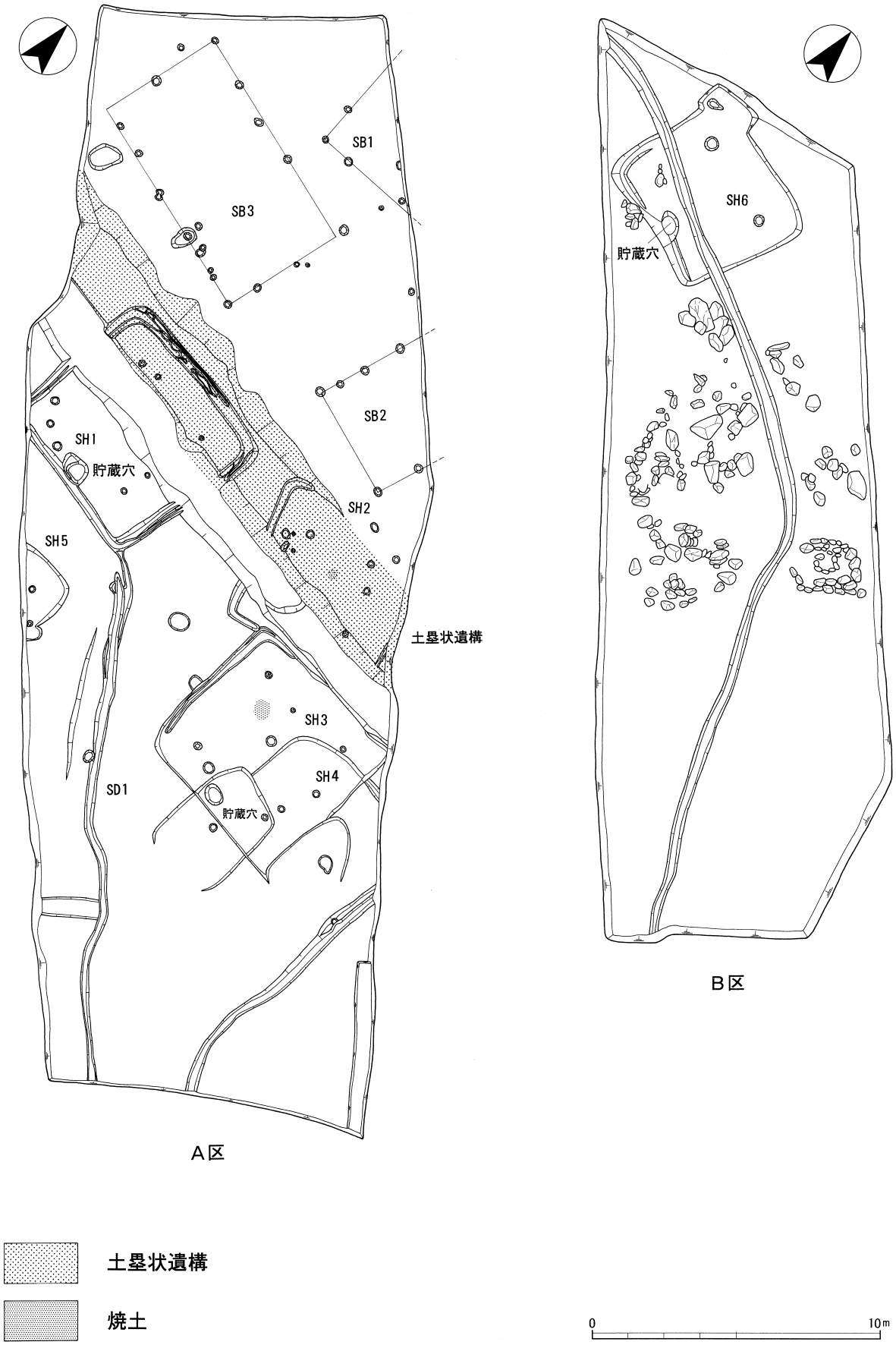
ＳＨ１出土遺物（１～５）　土器には土師器壺



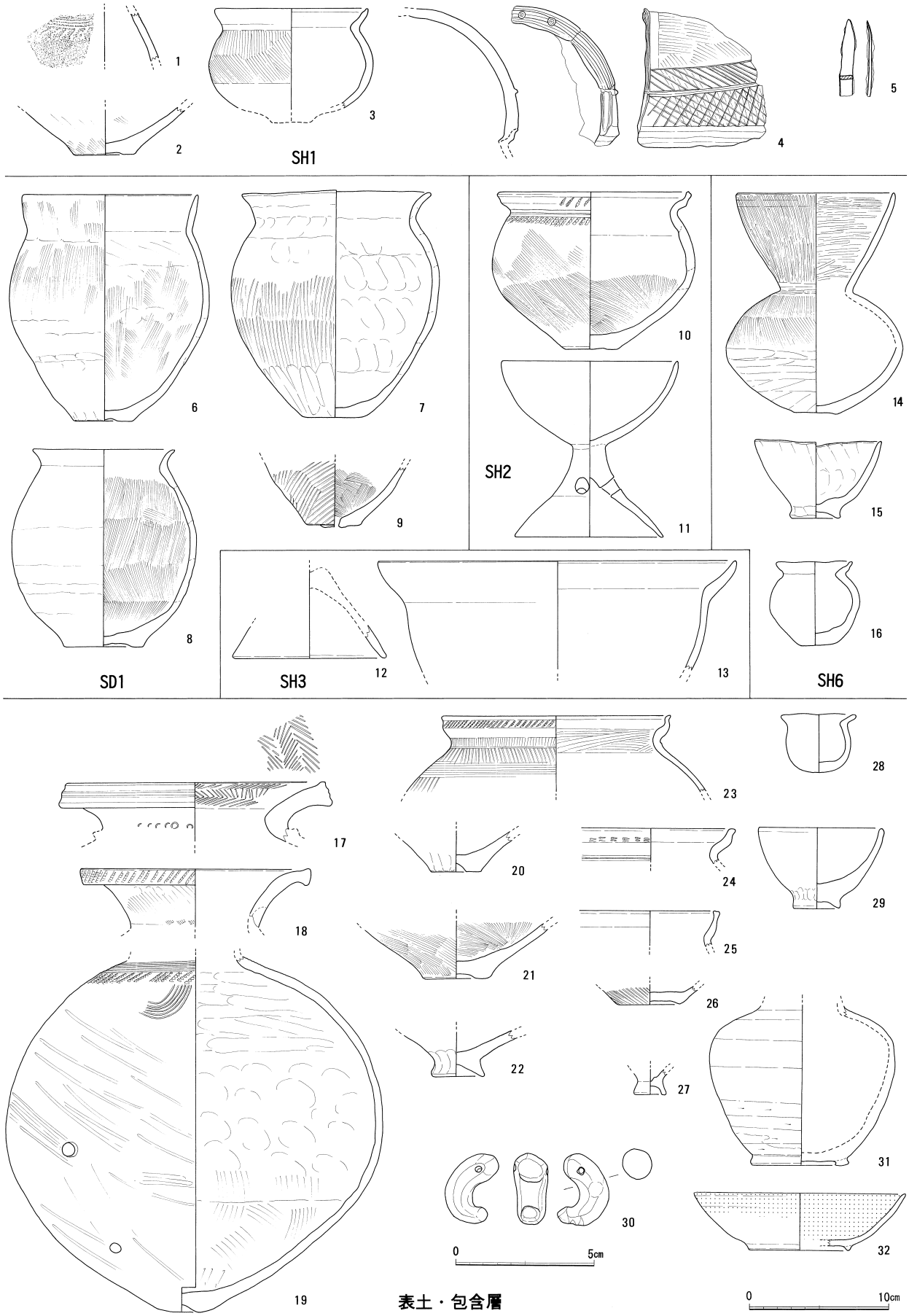
第Ⅲ-11図　小上野西谷遺跡　調査区位置図（1：2,000）



第Ⅲ-12図　SH１（1：80）



第Ⅲ-13図　小上野西谷遺跡　遺構平面図（1：200）



第Ⅲ-14図　小上野西谷遺跡　出土遺物（30は１：２、それ以外は１：４）

（1～2）・鉢（3）・手焙形土器（4）、鉄製品にはヤリガンナ（5）がある。鉢はく字形口縁であるが、全体に内彎気味で端部が内斜しており、受口系ともとれる。手焙形土器は口縁部と覆部の出土で、覆部は斜格子文で加飾されている。

ＳＤ１出土遺物（6～9）　6～8は土師器甕、9は有孔の鉢もしくは甕である。甕はいずれもハケ調整のく字形口縁であるが、9はタタキ成形された土器である。

ＳＨ２出土遺物（10～11）　土師器の受口鉢（10）と高杯（11）がある。高杯は、半球形の椀状杯に短脚化した内彎脚がつく。

ＳＨ３出土遺物（12～13）　土師器高杯脚部（12）と有頸鉢（13）がある。有頸鉢の口縁部は、内彎している。

ＳＨ６出土遺物（14～16）　土師器内彎口縁壺（14）・鉢（15）・小形壺（16）がある。内彎口縁壺は、胴部径が口径よりわずかに大きく、外面をタテミガキしている。

表土・包含層出土遺物（17～32）　土器では、土師器壺（17～22）・甕（23～26）・ミニチュア土器（27～28）・鉢（29）、灰釉陶器長頸壺（31）・黒色土器椀（32）、土製品では土製勾玉（30）がある。

このうち、壺にはパレス壺（17）や広口壺（18～19）があり、19は小さな上底形態で、体下半部がやや尖り気味となる。また、甕ではＳ字甕（23）や受口甕（24）がある。25も屈曲は緩いが、受口系であろう。26は甕の底部で、上底形態を採ることは受口甕と調和的である。ミニチュア土器は、脚付を表現した27と、小壺形態の28がある。

（4）小結

小上野西谷遺跡の調査では、古墳時代初頭の集落が確認され、また幅3mの土塁状遺構（堀状の溝を含めると4.5m）の存在は当地に中世城館が存在した可能性を示している。

古墳時代初頭の集落は、竪穴住居で構成された集落と考えられる。掘立柱建物も存在するが、柱穴からの出土遺物が乏しく、時期を確定するに至っていない。土塁状遺構と堀状の溝を中世城館に伴うものと考えた場合、掘立柱建物はすべてこの土塁の内側に位置しており、平面形や柱穴掘形などからも掘立柱建物はいずれも中世期のものと考えるほうがより調和的である。

古墳期集落を構成する竪穴住居は、土塁状遺構など後世の遺構と重複しているものもあるがいずれも残りが良く、住居の南辺中央に貯蔵穴を伴う。調査範囲が狭いため集落構成や個々の竪穴住居に関して言及できることは少ないが、古墳時代初頭集落の確認は、古墳時代初頭には山田盆地の開発が活発に始まっていたことを如実に示す資料であると評価できよう。

遺物についてみてみると、ヒサゴ壺、パレス壺、広口壺、Ｓ字甕など東海系のものが比較的目立つ。全体量が乏しく、これが当地の一般的なあり方を示すのか、遺跡の個性に帰されるべき問題なのかは今後の資料の充実を待って改めて検討する必要がある。

また、1点のみであるが、ＳＨ１からはヤリガンナが出土しており、住居出土の工具の例として、今後の集落調査に注意を促しておきたい。　（穂積）

【註】

（1）山田盆地の考古学的状況は、下記文献を参照。
大山田村史編纂委員会『大山田村史上巻』（1982年）

（2）山中由紀子「三重・古墳時代の馬文化－続・三重県内出土の古墳時代馬具集成」（『研究紀要』第15－1号 三重県埋蔵文化財センター　2006年）。なお、馬具の記述は同書を参照した。

（3）田辺昭三『須恵器大成』（角川書店　1981年）

（4）竹田憲治氏のご教示。なお、具体的には下記変遷表を参照。倉田直純「第32図　浮田遺跡における中世土師器皿変遷表」（『平成元年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告ー第1分冊－』三重県埋蔵文化財センター　1990年）

（5）三重県埋蔵文化財センター『菟上遺跡発掘調査報告』2005年

Ⅳ　伊賀市富岡　富岡前山古墳

1　調査の経過

富岡前山古墳（旧称　前山１号墳）は、県営揮発油税財源身替農道整備事業（大山田南部二期）に伴い、昭和59年度に試掘調査500m²を実施した結果、古墳の存在が確認され、同年度内に250m²を対象に発掘調査を実施することとなった。掘削前では、天井石と思われる石材が観察でき、東方向に開口する横穴式石室を内部主体に持つ古墳であることが想定された。

調査では、横穴式石室の天井石と思われる巨石が５石ほど確認でき、それは事業地外へと延びていた。調査期間は、昭和59年9月3日～昭和60年1月26日となった。

2　調査の経過

（1）遺　構

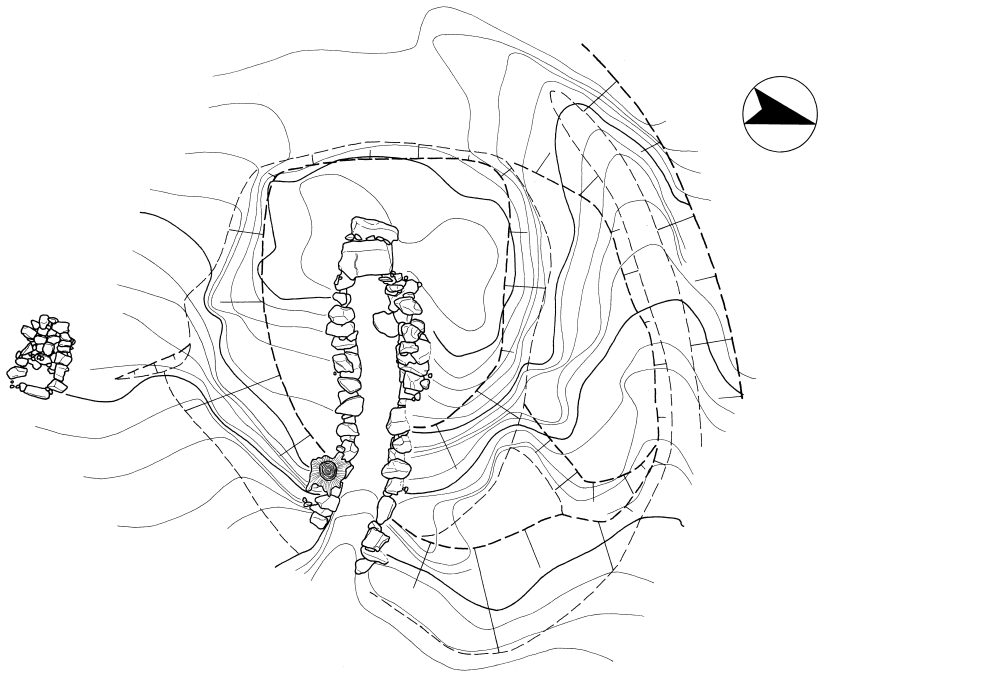
①墳丘（第Ⅳ－１図）

墳丘は、西側を207.6mで取ると、直径20m程の円墳となる。大山田盆地へと舌状に張り出す丘陵先端に立地する。墳丘南部は事業地外へと広がるため、調査は実施していない。墳丘は地山を削り出した後、石室を構築しながら盛土し、墳丘を構築した。土層断面の確認では、版築工法などは確認できなかった。

周溝は調査区内においては、墳丘の西・北部分で確認している。東・南部分については丘陵の落ち込みとなることから、当初から周溝は掘削されなかったのだろう。

②小石室（第Ⅳ－２図）

本来の墳丘を精査していく中で、墳丘南部で検出された。天井部に架ける石材は本来から存在したのかどうかは不明であるが、東側壁がやや崩れた状態であるが、他の３面の側壁残存状態はよい。床面での平面規模1.46×0.8mの長方形を呈する。床面には平石を一辺20～30㎝、厚み10㎝程の平石を北寄り三分の二の範囲に敷く。側壁は最大40×30㎝程の石を積み上げるが、２段積み上げた、床面から約40㎝の部分で側壁４面の目地が揃う。天井石は見られなかった。石室内からは、敷石の施されている部分から須恵器杯蓋（１～２）、須恵器杯身（３）、土師器杯（４）が出土した。



第Ⅳ-１図　富岡前山古墳　墳丘測量図（1：200）

③外部施設（第Ⅳ－３図）

石室羨道部出入り口から墳丘裾に沿って、直径30～40㎝程の礫列を確認した。これは、墳丘北部分については羨道入口から5.0ｍの地点で途切れ、南部分については羨道入口で一旦途切れ、5.0ｍしたところで2.0ｍほどの石の並びが確認できる。これについては外護列石と思われるが、調査の過程で取り上げてしまったのか、若しくは当初から撹乱等により破壊されたのかは確認できない。

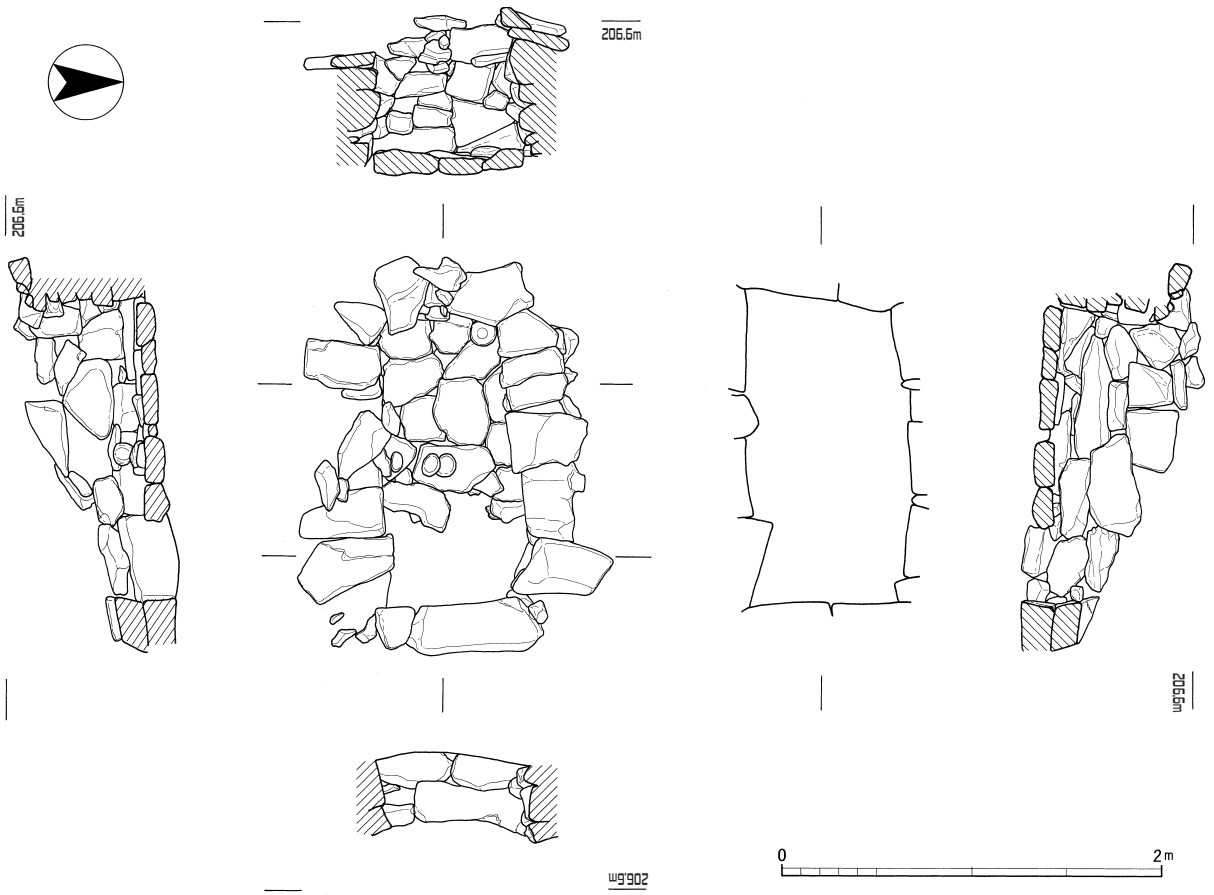
墳丘盛土を下げていく中で、外護列石よりも小振りの礫を検出したため、それを追う形で更に掘り下げていった。すると、墳丘が円形を呈するのに対して、この礫群は方形に積み上げられていた。これは、石の面を外側に向けて積み上げた、もしくはある程度の区画を施した中に石を葺くなど、通常葺石にみられるようなあり方とは異なるものである。この礫群は、墳丘の北・南部辺に見られるが西辺には見られず、東辺は石室入口に当たることから石室羨道石積み両側に若干見られる程度である。またこれらの石列は、墳丘裾のレベルから石室側壁と同レベルの高さまで積み上げており、墳丘頂部にまでは至っていない。

以上のことから、この列石は葺石や外護列石といった墳丘外表に表れるものとは異なり、第一次墳丘と呼ばれる、墳丘構築の途中段階に構築されたものであると考えられる。これらが古墳構築時の補強を目的としたと考えると、古墳の築造された丘陵が東に開けており、西辺は丘陵奥側であるため必要はないが、北・南辺については盛土の崩落防止のための施された構築技術の一端と考えられる。

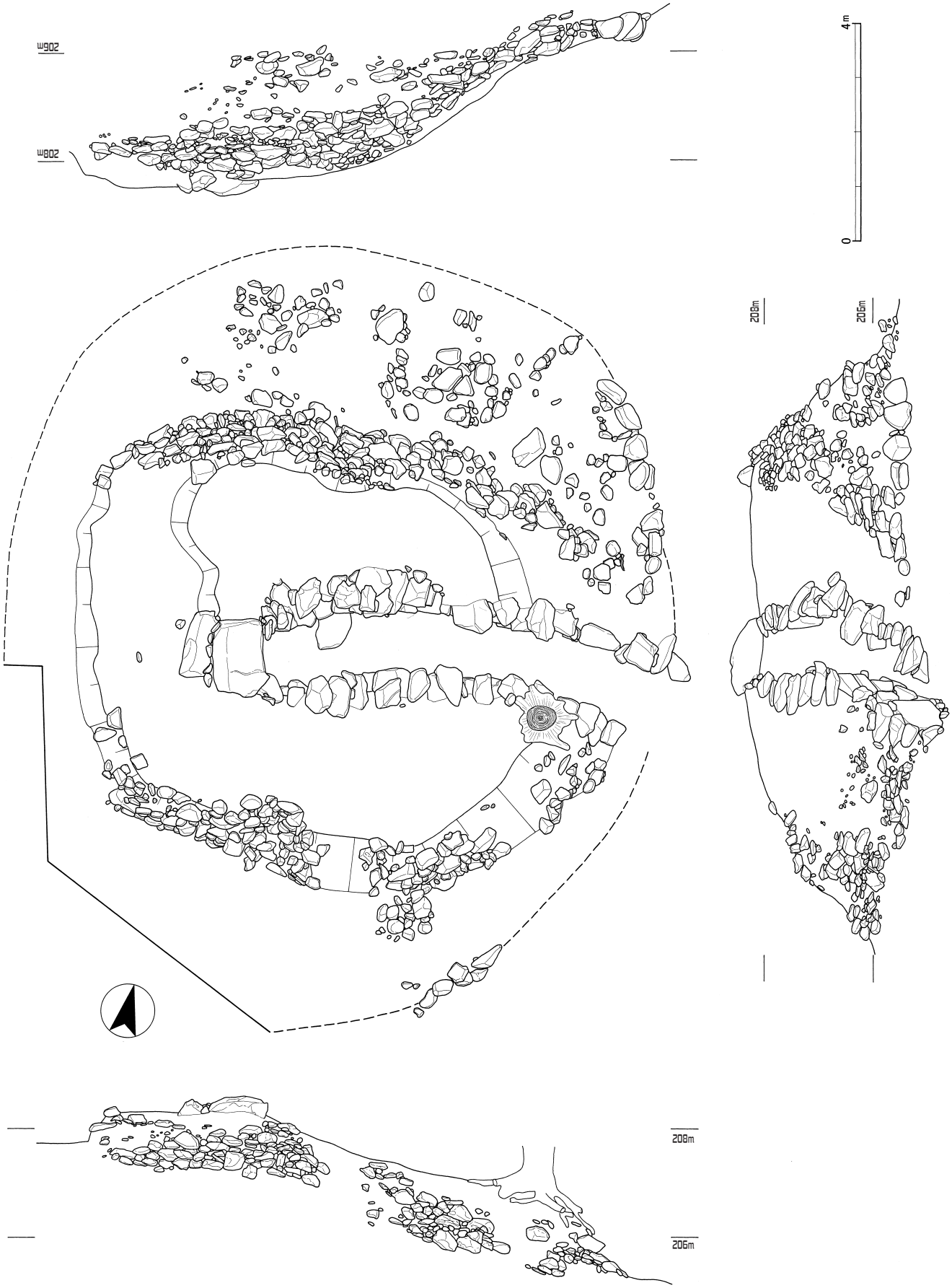
さらに補強の目的が石室にも向けられていたとすれば、石積みは最終的な墳丘形態、つまり第二次墳丘の形状に合わせて円弧を描く必要はなく、石室に沿った方形であるほうが補強には適する。

④天井石・閉塞石

前述したように調査前から天井石が露出し、東方向に開口する横穴式石室墳の可能性が考えられた。墳丘崩落土を掘り下げていく中で、天井石が一部崩落していることが確認され、その隙間から石室内部を覗くことができ、床面から天井までの高さが1.5m



第Ⅳ-２図　小石室（１：40）



第Ⅳ-３図　富岡前山古墳　墳丘実測図（１：100）

第Ⅳ-４図　横穴式石室（１：50）

以上であることがうかがわれた。

天井石は、奥壁から３枚がかかり、４枚目との間に隙間がのぞき、羨道部に2石、羨道部入口に更に南側壁からはずれた状態で2石がかかっている。いずれも、1.5×1.3mほどの大きさである。

羨道部入口に散らばる直径20～40㎝ほどの礫は閉塞石であった可能性がある。玄室と羨道部の境界にはそのような礫が見られないことから、閉塞は羨道部入口で行われたと思われる。調査の段階では、閉塞石は床面に散在している状態であり、盗掘などの際、前庭に出されたものと思われる。

⑤石室構造（第Ⅳ－４図）

玄室　内部主体は、比較的巨石の塊石を用いた横穴式石室で、奥壁から2.4mの地点で右側壁部分に高さ1.1m、幅60㎝の縦位の石材が、側壁から30㎝程張り出しており、これを袖石とみると、右片袖をもつ横穴式石室となり、玄室長約2.4m、幅約1.8mをはかる。袖石の張り出しが弱く、縦位の袖石より上部の石材では、袖が解消されてくることから、明確な右袖形とはいい難い。左側壁にも右袖と対応する位置に縦位の石材を配していることから、玄室と羨道の区別は意識されている。

石室断面形は持ち送りが認められ、特に奥壁側で強い。奥壁は基底部に巨石を２石横位に置き、その上に大きく４段の石材を積み上げて天井石を架ける。側壁は、左側壁についても奥壁基底部と上面がほぼ同レベルになるように基底石を置き、その上に４段の石材を重ね、天井石となる。右側壁についても同様である。奥壁・両側壁とも基底石上面、その上の２段目、３段目と目地を揃えて石を積んでいる。床面には、奥壁から2.0mの範囲に直径20㎝ほどの礫を敷いている。

棺台　左側壁に沿って長さ1m×幅60㎝×高さ30㎝程の石を1.7mの間隔をあけて置いている。奥壁側の棺台石は敷石上にあるが、羨道部側の棺台石は玄室からはみ出しており、玄室と羨道の空間的・機能的な区別は曖昧のようである。

羨道　現況では全長6.3m、幅1.2～1.6mである。奥壁から５m付近から南に湾曲している。また、床面は奥壁から4.2m付近から下がり、羨道入口付近では１石目の下部の高さで1.2mの比高差がある。これは、古墳自体が、丘陵先端に立地し、石室が丘陵先端に向かって開口しているため、地形を利用して石室を構築したためそうならざるを得なかったとも考えられるが、両側壁も５m付近で不自然な「隙間」がみられ、第二次墳丘築成時に羨道の一部が継ぎ足されたか、後世に小規模な地滑り等でズレが生じたことも考えられる。入口には閉塞石と思われる一辺30～50㎝程の礫が散在して見られる。

（２）遺　物

出土遺物は、周溝からの出土、墳丘盛土からの出土、および石室内からの出土が見られた。石室内からは、散在して出土した状況だった。耳環等から複数回の埋葬が行われていたと思われるが、埋葬毎の遺物の把握ができない。土器は、便宜上、棺台周辺の一群、袖部・玄門部周辺の一群、羨道部出土の一群、取り上げ番号のない一群に分類して掲載した。しかし、土器以外の遺物については遺物種類毎に記述していく。

①周溝出土遺物（第Ⅳ－５図５）

周溝からは、土師器甕が出土している。ただし、全体的に摩滅が激しく、おおよそ完形に近い形に復元できるだけの破片があると思われるが、図化できたのは口縁部のみである。

②墳丘盛土出土遺物（第Ⅳ－５図６）

墳丘盛土を検出する作業をしていく中で、図化できなかったが須恵器大甕体部破片が多く見られた。これについては、墳丘での祭祀行為の痕跡である可能性がある。（６）は盛土中から出土した須恵器壺の口縁部と思われる。

③小石室出土遺物（第Ⅳ－５図１～４）

（１・２）の須恵器杯蓋は、頂部はヘラ状工具による切り離し後、（１）はロクロケズリを施すが、２はナデ調整を施す。いずれも内面のその反対に当たる部分は（１）については一方向の仕上げナデ、（２）は円形仕上げナデを施す。（３）はヘラ状工具による切り離し後ナデを施すようであるが、底部は断面形状が平坦であり、外面に板状圧痕が明瞭に確認できる。（４）の土師器鉢は粘土紐積上げ痕が明瞭に確認できる。底部を円形に粘土を板状に成形し、体部下半3分の1から幅1.5㎝の粘土紐を時計回りに積み上げている。接合部分にはユビオサエが残る。

端部はヨコナデを施す。

④横穴式石室出土遺物

a 土器類（第Ⅳ－６・７図）

前述のように、土器については調査時の取り上げ番号を重視し、それに沿ってレイアウトした。しかし、取り上げ時の第1埋葬部、第2埋葬部といった認識が整理作業により適切でないと思われたため、とりあえず以下のように石室内を区分けし、記述していく。よって、取り上げ番号のないものについては出土位置不明のものとして取り扱う。

ｉ）棺台周辺（７～23）

石室軸に沿って置かれた棺台の周辺にあるものをさす。

須恵器杯蓋（７～10）は頂部外面をヘラ状工具により切り離し後、（７・10）についてはロクロケズリを若干施すが、（８・９）と同様、頂部についてはナデ･オサエ調整によりを整えることを試行している。しかし、いずれも調整は不完全である。いずれも、口縁端部は器壁を薄くまとめる。（８）の口縁端部は一部欠損しているが、これは焼成の際、杯身と合わせて窯詰し、焼成後釉着したものをはがす際欠損したものと思われる。（９）は頂部外面に別個体の破片が釉着しており、焼成時の重ね焼き痕と思われる。

須恵器杯身（11～17）についても杯蓋と同様、底部外面をヘラ状工具により切り離し後、ナデもしくは板ナデを施す。しかし、(12) については一部、(15) は底部のヘラ切り部分全体にロクロケズリを施している。しかし、この一群ではナデ調整を施すのが一般的であるといえる。(15･17) は焼成不良である。

須恵器椀（18）は基本的には蓋杯類と同様のつくりで、底部をヘラ状工具により切り離した後、ロクロケズリを施す。底部外面には板状の圧痕が残る。この個体についても焼成不良である。脚付杯（19）は杯蓋に脚部がついたような形状である。これについても焼成不良である。脚端部は、一部が上方に歪んでいるが、これは窯詰時に本体が傾き、脚部が歪んだままの状態のまま焼成されたためであると考えられる。

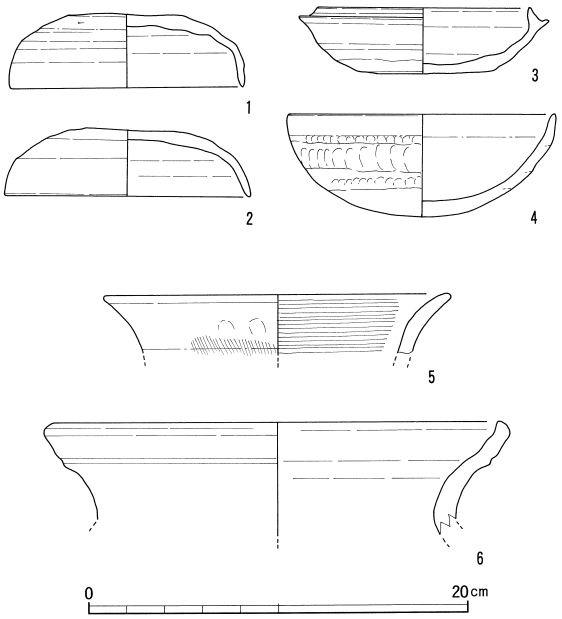
須恵器無蓋高杯（20）は硬質な焼きである。杯部下半から脚部上段までカキメを施している。三方に長方形透かしが２段開くが、上段の透かしは１ヶ所が一部貫通しているが、他の２ヶ所は貫通していない。

須恵器平瓶（21）の体部は頂部を円形粘土で塞ぎ、中央をずらして孔を開け、別に作った口頸部を貼り合わせる通有の作りのものである。体部上半にはカキメを施す。ボタン状の円形粘土を口頸部を挟んで両側に貼り付ける。

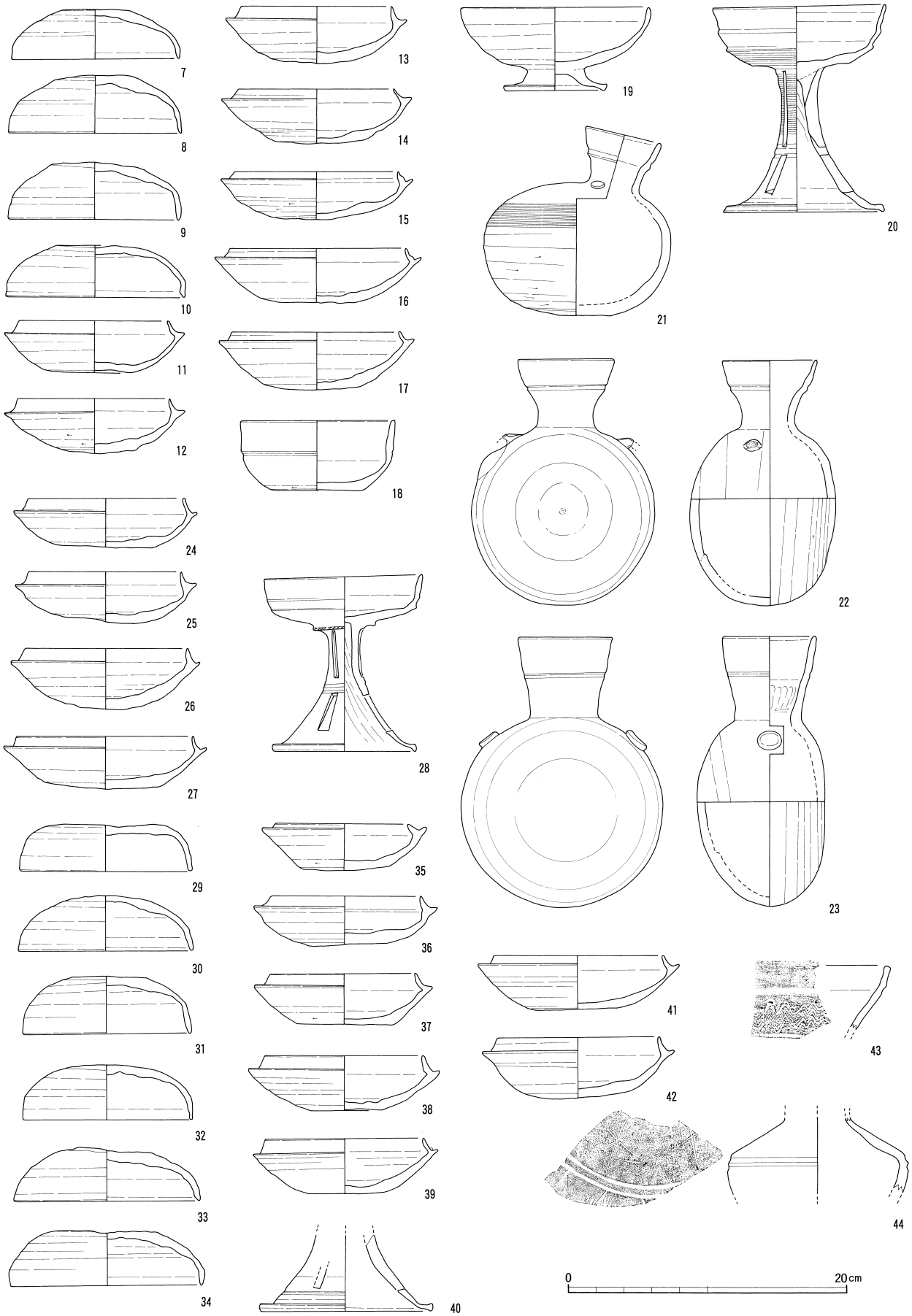
須恵器提瓶（22～23）は平瓶と同様、体部の頂部を円形粘土で塞ぐ。側面に孔を開け、別作りの口頸部をつける。(22) については、側面形が比較的円形に近い形状を呈し、突起状の耳が両側に付く。口頸部はハの字状に開きながら上方に立ち上がり、端部は丸く収める。それに対し、(23) は側面形が扁平であり、耳はボタン状の円形粘土を両側につける。口頸部についても直立気味に上方に立ち上がり端部を丸く収める。口頸部に施される沈線も (22) に比べて浅い。焼成不良の個体である。提瓶については形態的特徴から時期差があるものと思われる。

ⅱ）袖部・玄門部周辺（24～28）

須恵器杯身（24～27）はいずれもヘラ状工具により切り離し後ナデ調整を施すもので、ただし (25・26) については若干ロクロケズリを施している。口縁端部は薄く比較的鋭利につくるという点が



第Ⅳ-５図　富岡前山古墳　出土遺物①（1：4）



第Ⅳ-６図　富岡前山古墳　出土遺物②（１：４）

特徴的である。(25) については底部外面にヘラ記号状の浅い刻みが見られる。(24・26・27) は焼成不良である。無蓋高杯 (28) は硬質な焼きである。杯部と脚部の境にある突帯にヘラ状工具により刻み目を施している。脚部には、長方形二段三方透かしをあけるが、上段の透かしについてはいずれも貫通していない。

ⅲ）石室内出土（29～42）

取り上げ番号については付与されていないが、(29・31・32･36･40) は調査当初「第１埋葬部」と認識された範囲から出土し、(30・33～35・37～39) は「第2埋葬部」とされた範囲から出土している。(41・42) については「石室床面」とされる部分から出土しているが、どこをさすのかは不明である。

須恵器杯蓋 (29～34) はヘラ状工具により切り離し後ナデ調整を施すが、(30・34) については若干ロクロケズリを施すが切り離し部はほとんど整えることに失敗しているというのが特徴である。杯身 (35～39) は杯蓋と同様のつくりであるが、(35・37) は底部が平坦になり、底部から受部に向かって直線的に立ち上がる形状を呈する。(37) については底部に板状圧痕が見られる。高杯脚部 (40) はおそらく長脚になり、長方形二段三方透かしが空くものと思われる。透かしは一部貫通していない部分がある。

須恵器杯身 (41・42) は石室床面とされる部分から出土した。石室内出土の他の杯身と同様の作りである。

ⅳ）石室埋土中出土（43・44）

石室に堆積した土を掘削した中で出土したものである。(43) は甕もしくは脚付壺の口縁部 (無蓋高杯) と思われる。７条の波状文を施している。外面全体に自然釉がかかる。(44) は須恵器長頸壺の体部片と思われる。肩部にヘラ記号状の刻みが見られる。

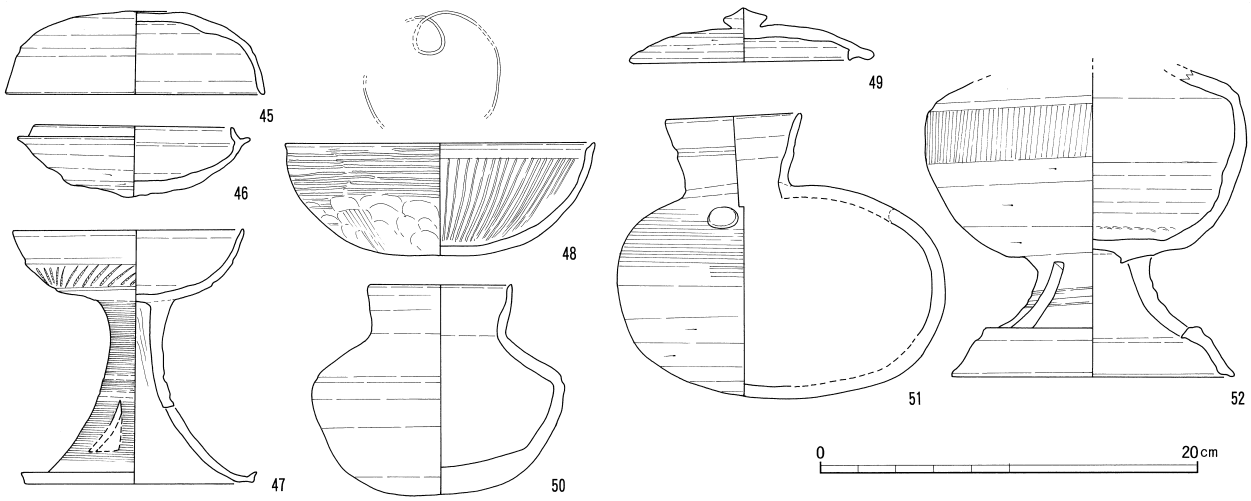
ⅴ）羨道部（45～52）

大まかに分けて２時期に分かれるようである。石室内出土の土器と大して変わりのない時期の土器群 (45～47) と比較的新しい、都城編年の飛鳥Ⅱの土器群 (48～52) である。

須恵器杯蓋 (45) は頂部外面をヘラ状工具により切り離し、ナデを施す点等は石室内の杯蓋と同様の作りである。口縁端部は一部欠損しているが、これは焼成の際、杯身と重ね合わせて窯詰し、焼成後杯身と釉着したのを引き剥がしたためによる欠損と思われる。これにより、焼成時に杯身杯蓋をセットで重ねて窯詰したことが伺われる。

須恵器杯身 (46) は底部外面をヘラ状工具により切り離した際、粘土がひどく乱れたためロクロケズリを施して調整しているが、中央部分が未調整で残存する。

須恵器高杯 (47) は全体的に歪みがあり、丁寧な調整が施されていないような印象を受ける。鉢部外面には凸帯間に櫛描文を施し、脚部には全体にカキメを施す。三角形透かしを三方に開ける。胎土は砂粒が多く含まれ、焼成による器表面の荒れが著しい。



第Ⅳ-７図　富岡前山古墳　出土遺物③（1：4）

（48）は土師器の所謂杯Ｃである。胎土は精緻である。外面上半部は横方向のミガキを、下半はユビオサエが顕著であるが、一部縦方向のミガキが確認できる。体部内面には縦方向のミガキを施し、見込みには螺旋状暗文を施す。底部外面には黒斑がある。

須恵器杯蓋（49）は内面にかえりをもつ杯蓋である。宝珠つまみを持つ。外面は全体的に自然釉が見られる。

須恵器坩（50）は底部が厚く、体部中央やや上寄りに最大径があり、そこに１条の沈線を施す。頸部は上方やや開き気味に立ち上がり、端部でやや内側に丸く収める。底部内面は焼き膨れが著しく、亀裂が生じている。

平瓶（51）の体部は頂部を円形粘土で塞ぎ、中央をずらして孔を開け、別に作った口頸部を貼り合わせる通有の作りのものである。体部上半部にカキメを施し、ボタン状の円形粘土を口頸部の両側に挟んで貼り付ける。

須恵器脚付長頸壺（52）は、口頸部が欠損している。体部は浅く幅広い沈線の下に縦方向のカキメを施し、文様帯としている。脚部に長方形透かしを三方にあける。（山中）

ｂ 装飾品類（第Ⅳ－８図53～106）

耳環（53～58）は３対６個体出土した。

（53）と（54）は対であったと思われ、中実で銅芯金薄板貼である。[1] 肉眼観察では（53）には中間層がみられないが、（54）には表層とは異なるにぶい金色～銀錆色を見せる箇所があり、中間層として銀地もしくは金を含む合金の下地があった可能性がある。（53）の表層には約16％の銀を含む金が使用されている。（54）の表層では金を含有しない銀が検出されるほか、微量のヒ素がみられるが水銀が伴わないため、土壌に起因するものかメッキによるものかの断定はできない。側面には芯材の銅の錆化により表層の銀薄板に亀裂が入り、緑青が表出する箇所があるが、表層の金は金属光沢を保っている。接面における表層金薄板の始末は、（53）では接面全面を覆うだけの表層金薄板を側面から延長し、端部を絞り込んで処理している。一方、（54）では接面に見える中間層に側面から延長してきた表層金薄板を接面まで被せ、たたみ込んで仕上げている。

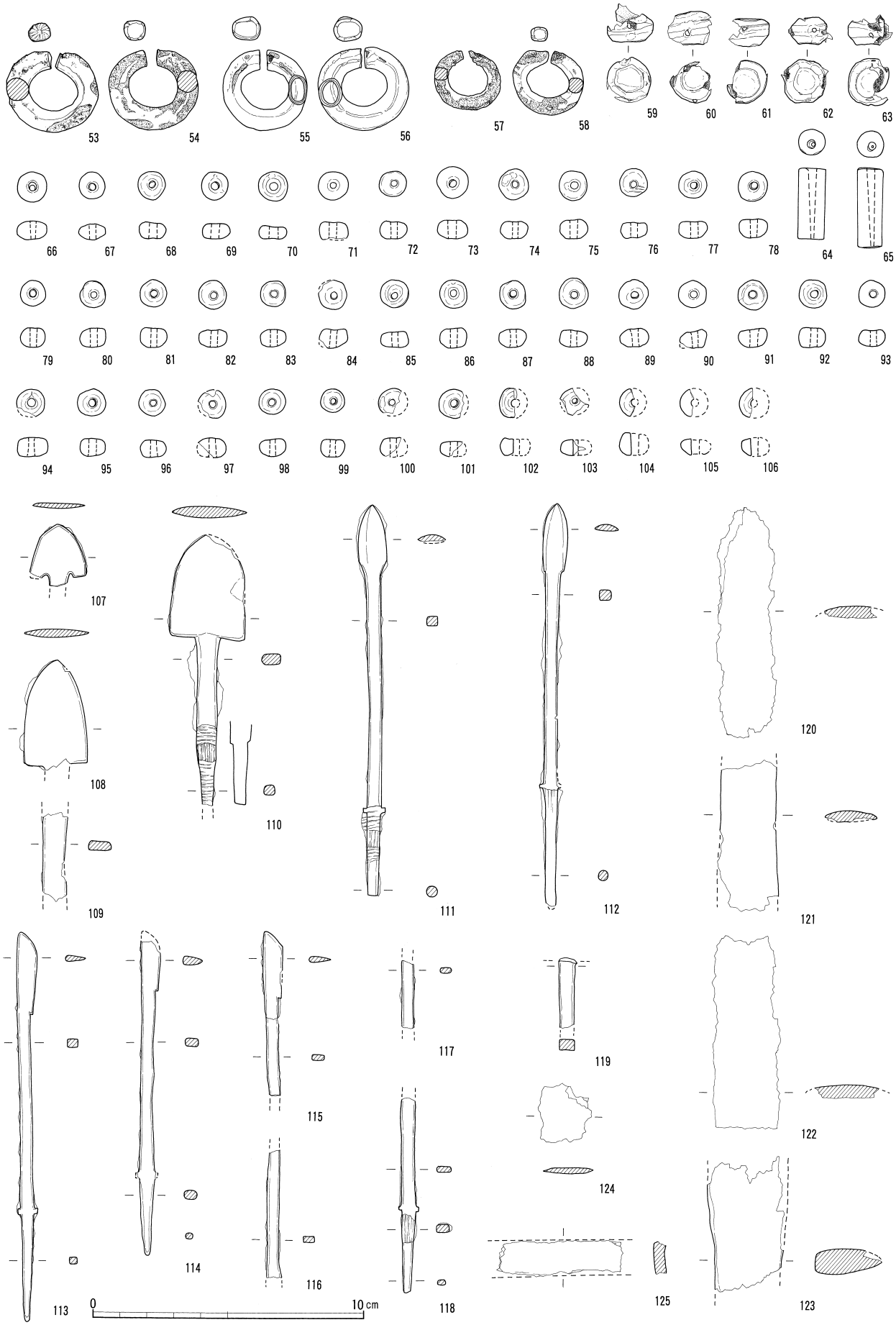
（55）と（56）で１対の耳環で、中空銅芯金薄板貼である。側面には亀裂が入り、緑青が表出する箇所もあるが、金薄板の金属光沢が良好に残存する。表層は、（55）では約25％の銀を含む金が、また（56）では他の不純物要素を含まない金が用いられる。側面における表層材の始末は、芯材の銅・下地の銀薄板も接面を蓋し、これに表層の金薄板をわずかに被せ、たたみ込んで仕上げる。

（57）と（58）は、法量的には対と考えられる個体であるが、（58）は中実で銅芯金薄板貼のやや細身の耳環であるのに対して、（57）は、重量が（58）の1/2以下であり、中空耳環である可能性のある、銅芯金薄板貼仕上げの個体である。表層には（58）では金に対し約50％の銀を含んだ合金を、また（57）ではほぼ同量の金・銀を含む合金を用いている。接面における表層材の始末は表層の剥離が著しく、（57）では観察できないが、（58）では表層の延長を接面へわずかに被せ、たたみ込んで仕上げる。

空玉（59～63）は空平玉である。丸玉を孔軸に対して直交方向に押し潰して腹を平らにしている。銀地鍍金製で（62）を除いて内面に鍍金装が残るが、いずれも一部を欠損している。椀形の型押しした半身空玉を、孔の開く平坦面中央で接合している。空玉の接合方法[2]は、銀鑞・水銀・鍛接の方法が確認されているが、遺存状況の悪い当資料ではいずれによる接合か確認できなかった。刺し通しの孔は２孔であり、外面から内部へ向けて銀の地板が押し込まれる様子が観察できるが、（62）の１孔のみは内部から外面へむけて地板がめくれているため、反対側の孔から対面まで刺し通して穿孔したものと考えられる。

管玉（64・65）は碧玉製である。２点とも濃緑色で、側面・孔面ともに丁寧に研磨されている。穿孔は一方向からの穿孔である。簡易計測による比重は2.78～2.79gであった。

土製練玉（66～106）は41個体ある。いずれも黒褐色で、形状は臼状に仕上げるものが多いが、数点は側面と孔面との角をわずかに研磨しただけの個体も認められる。欠損する個体もあるが、県内出土の他の例と比べてみると、約5.0㎜前後とやや小粒で、外面を丁寧にミガキで仕上げてある。（大川）

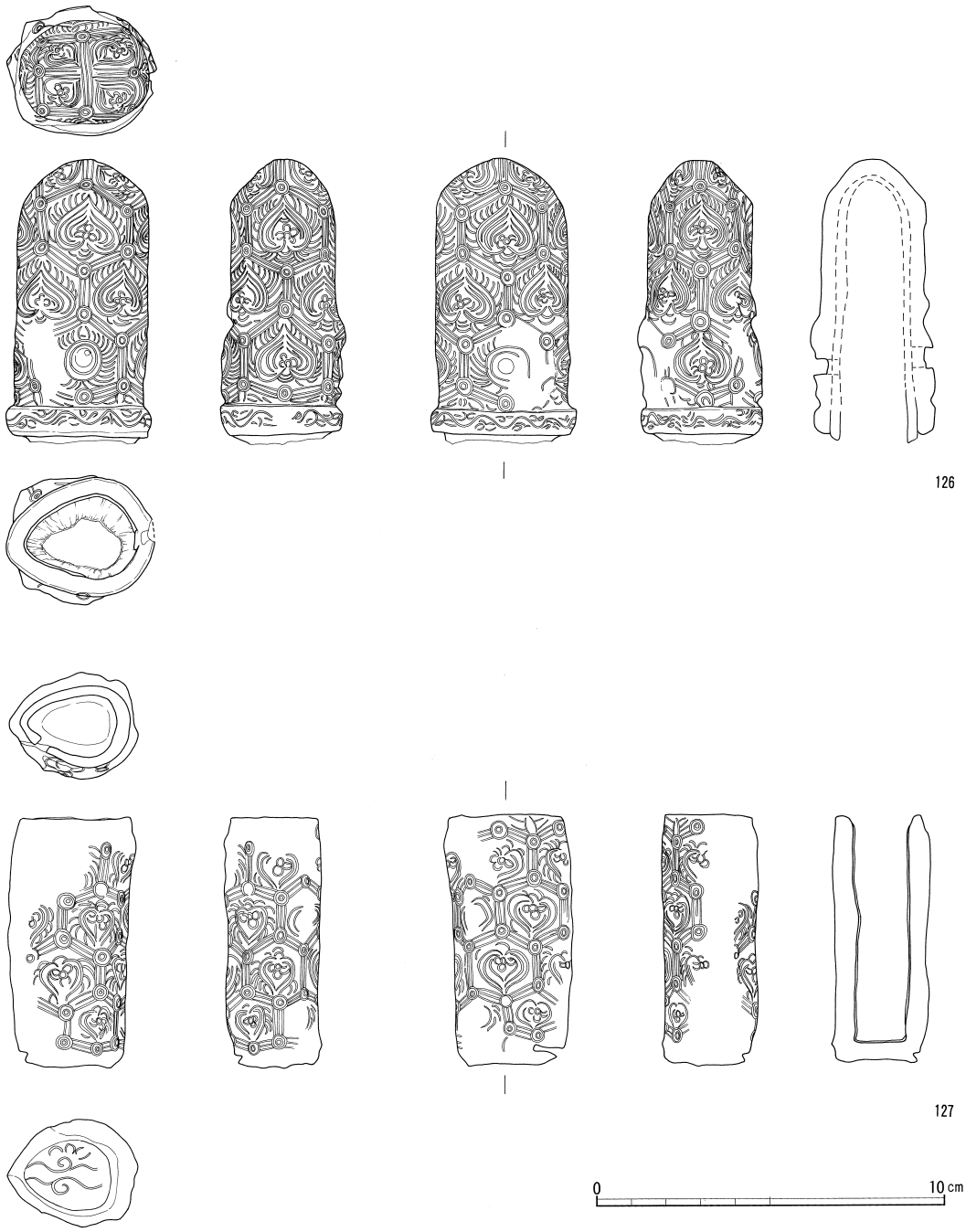


第Ⅳ-８図　富岡前山古墳　出土遺物④（66～106は１：１，他は１：２）

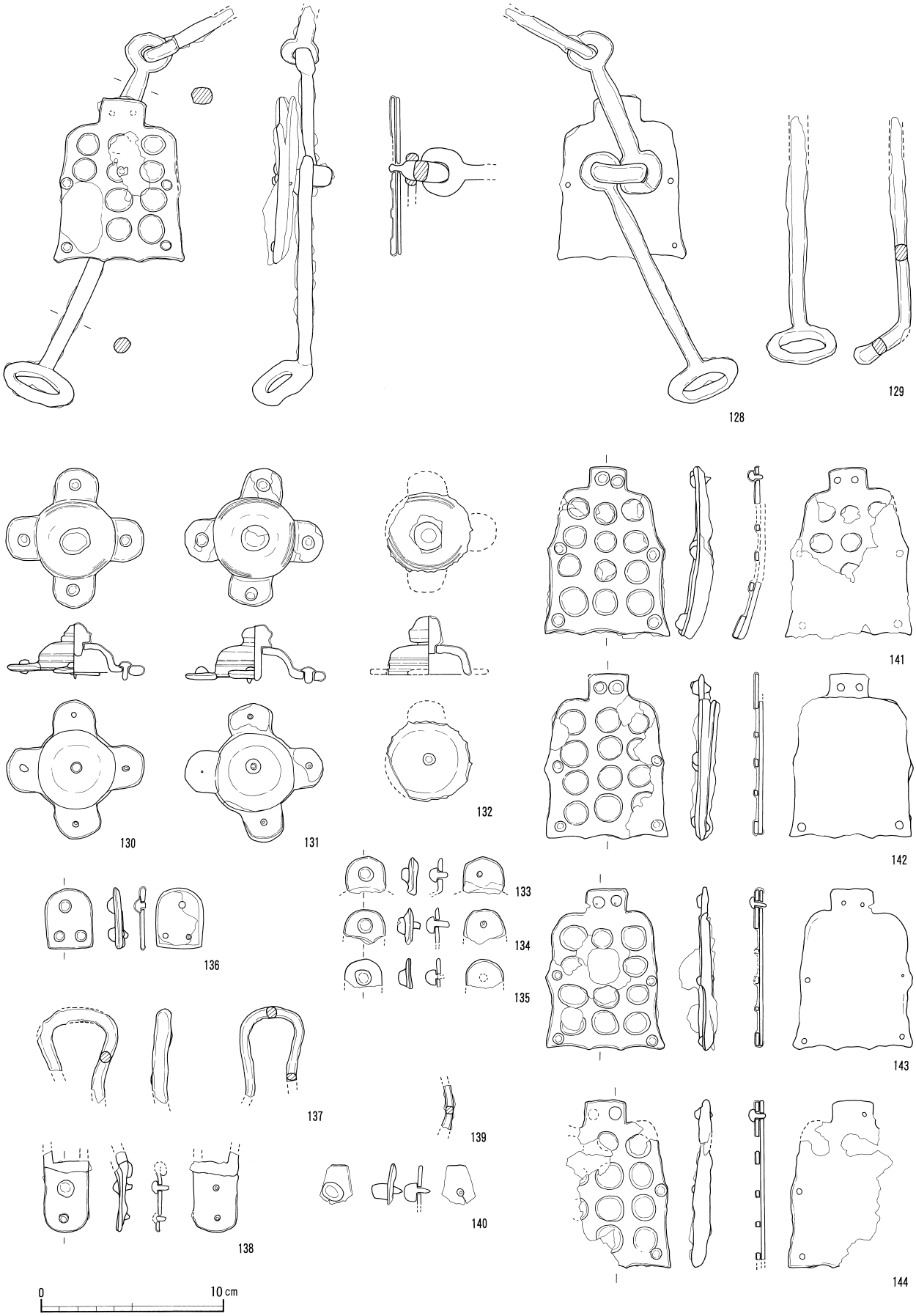
c 武器類（第Ⅳ－８・９図107～127）

武器類には、鉄鏃・鉄刀・刀装具類がみられた。

鉄鏃（107～119）　広根式鉄鏃（107～110）、細根式（111～119）がある。（109）は、幅から広根式鉄鏃の頸部と思われる。（110）では柄部の木質が良好に残存しており、横方向に樹皮を巻き、その上から木質の柄を取り付けている。（111）は柳葉式の鉄鏃である。茎部には樹皮巻の上に柄の木質が良好に残存する。（111～114、118）のいずれもそうであるが、関部が棘状を呈する。（113～115）は片刃式鉄鏃である。いずれも柄の木質が良好に残存している。上部の樹皮巻は残存しない。（111・112）の刃部は断面が半円形を呈し、図に表している面には縦方向に稜線が見られる。（116・117）は鉄鏃頸部と思われる。（119）も鉄鏃の可能性がある。（111～119）はいずれも頸部は断面隅丸長方形、茎部は（111・112）が円形、（113・114・118）は長方形を呈する。



第Ⅳ-９図　富岡前山古墳　出土遺物⑤（1：2）



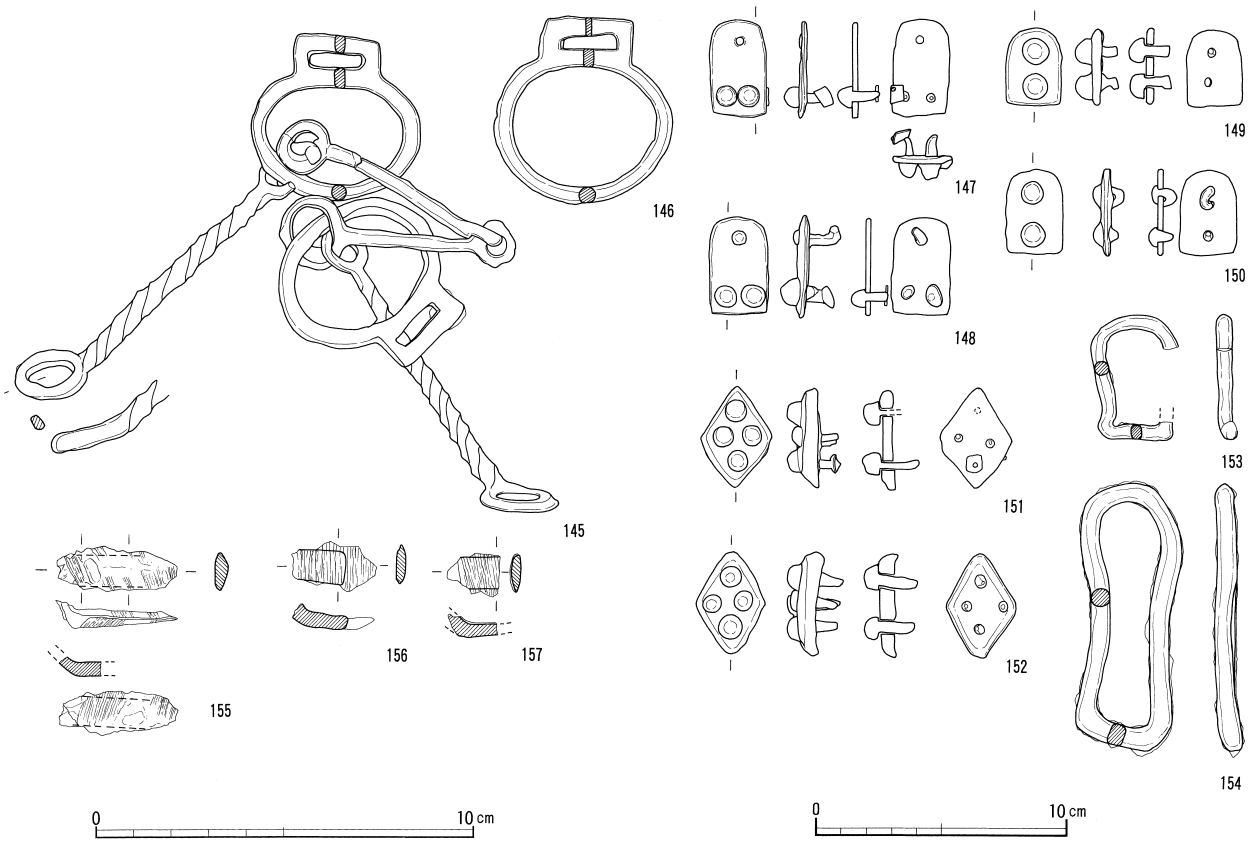
第Ⅳ-10図　富岡前山古墳　出土遺物⑥（1：3）

鉄刀類（124～127）のうち、（120～122）は棟、刃部、片側面が欠損している。残存しているのは片側面のみであるが、断面で見るとやや弧を描く。（120～122）は同一個体と思われるが、接合しない。しかし、割れの状況から面は図の面が合っていると思われる。

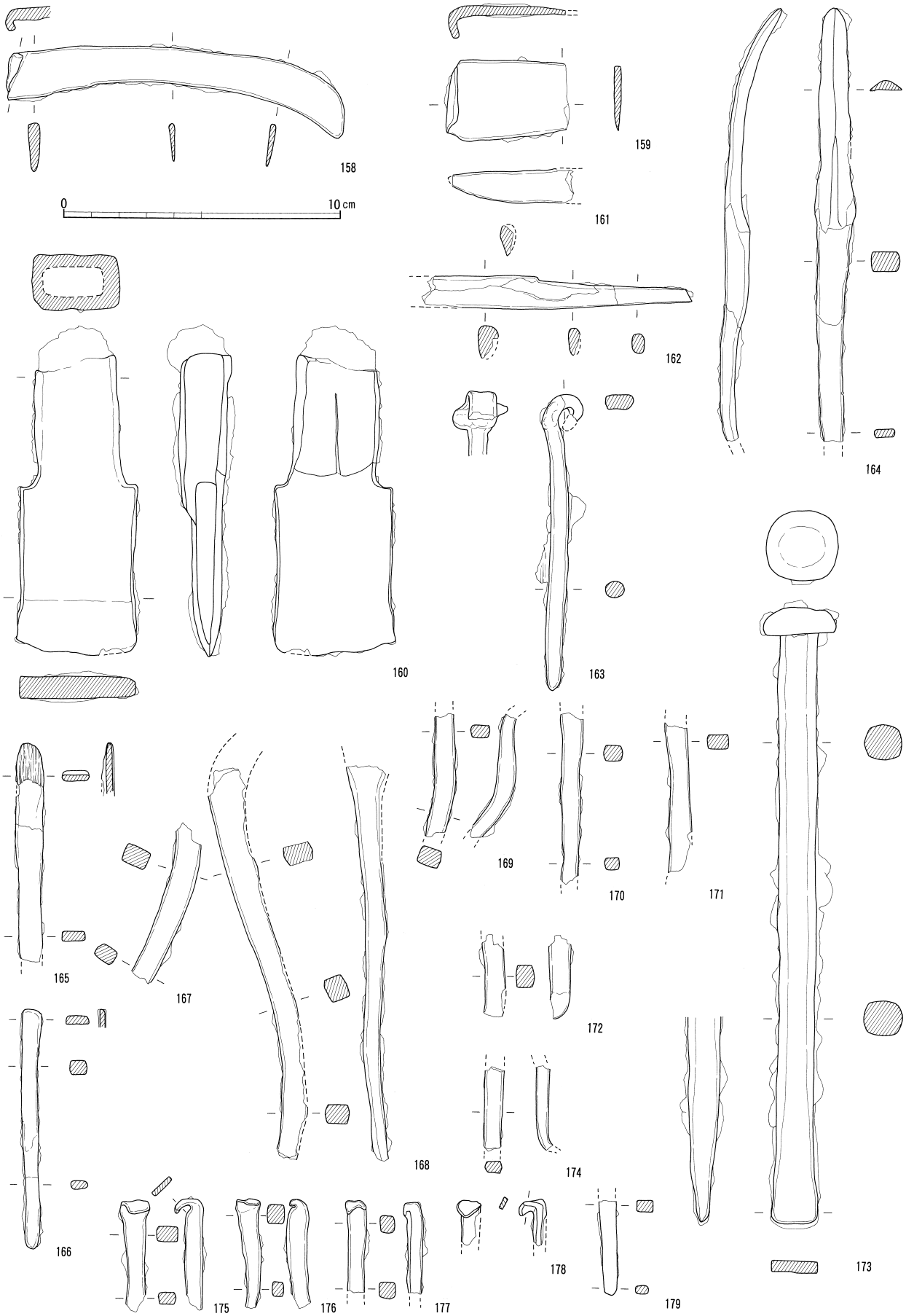
刀幅は最大部で2.0㎝以上、刀長は23.0㎝以上である。（123）は刃部が若干欠損するが刀片である。全体にひびが激しい。（120～122）と同一個体であるかどうかは判断できない。棟部幅は0.5㎝、刃幅2.7㎝以上である。（124）は残存している部分がないが、恐らく鉄刀片であろう。125は両端が欠損しているが、小刀の破片の可能性がある。

（126・127）は円頭大刀の柄頭と鞘尻金具である。追葬と思われる棺台間から出土したが、鞘尻部が奥に、それから約1.2m離れて柄頭部が羨道部側で検出された。（126）の柄頭はわずかに錆膨れのため象嵌が確認できない部分があるが、ほぼ全面に銀象嵌が残存する。側面全体を亀甲繋鳳凰文で埋め、頂部は同様の亀甲文で方形に区画し、その内部にやや簡略化した鳳凰文を表現する。柄頭縁部は丸く面を持った突帯を設け、その表面には波状文に木葉文を組み合わせた象嵌を施している。懸通し孔の部分は亀甲文内に二重円文、その周りに鳳凰文にあるような旋毛状文を配している。柄頭内部には柄部の木質が全体に残り、その木質方向は図の縦方向である。柄頭の形状は、小口部から見ると図の右側、刀の棟側が膨らむ形状を呈するが、横断面形状も図の右側がややふくらむ。

（127）の鞘尻は、柄頭に比べ残存状況が悪く、全体的に象嵌が白色化して脆くなっており、三分の一は確認できない。柄頭と同様に亀甲繋鳳凰文を側面全体に施している。第Ⅳ－９図では装着方向に配置しているため、鳳凰文は天地逆となっている。差込部端部は柄頭のように凸帯を設けるような事はなく、側面からまっすぐのび端部を収める。小口面と側面との境は明確に分かれ、小口面には残存状況が悪いが２本の平行する唐草文を中央に配し、その両側に木葉文を象嵌で表現する。鞘尻内部には有機質状のものが残存するが、木質であるかどうかははっ



第Ⅳ-11図　富岡前山古墳　出土遺物⑦（155～157は１：２、他は１：３）



第Ⅳ-12図　富岡前山古墳　出土遺物⑧（1：2）

きりしない。

d 馬具類（第Ⅳ―10・11図128～157）

馬具は、轡が２セットあるため、撹乱を受けているが出土状況からおおよそ棺台棺に１セット、袖部に１セットに分けられると思われる。

袖部のセットは、円形文鐘形鏡板付轡のセットである。轡と杏葉は同意匠であり、立聞部を共造りにした鐘形の鉄地板に同輪郭で12ヶ所の円形文を透かしした文様板を重ね、上から金銅板を重ねて金銅被せ鋲で周囲４ヶ所を留める。中ほどの鋲で留めた部分は鋲留のためなのか文様板と地版はやや棘状に張り出す。立聞は２鋲で吊皮に固定する。轡鏡板は中央付近の円形文部に裏側から突起を持った円環を留め、その円環に鏡板の裏側で銜金具と引手金具を繋ぐ銜は欠損しているが２連以上である。引手金具の引手壺は共造り屈曲式である。（129）は（128）の引手金具と思われる。（130～135）は半球形辻金具である。裾付近に２条の稜線を巡らせたやや高い半球部の頂部に宝珠金具を取り付け、爪形脚が４ヶ所取り付く。宝珠金具は中央付近に１条稜線を巡らせる。半球部と脚部を鍛接し、一体で金銅板を被せ、同じく金銅被鋲と金銅被宝珠金具を差し込む。脚部の裏側には帯革と思われる皮革状有機質が残存する。（133～135）は脚部のみであるが、半球部のみの（132）とは接合しないことから、辻金具は少なくとも４個体副葬された可能性がある。（131）の脚はややX字状に配される。（136）は鉄地金銅張留金具である。鉄地金銅被鋲で３ヶ所固定しており、裏側には皮革と思われる有機質が残存する。地版に被せた金銅板は裏側に2㎜程折り曲げている。

棺台付近から出土したものは、方形立聞素環鏡板付轡（145）である。素環部には幅広の方形立聞がつく。引手は捩り引手であり、引手壺は屈曲する。銜は二条銜である。この引手と銜の連結方法は左右で異なる。図示したものの向かって左側は素環部に引手環を通し、その引手環に銜を連結する。しかし右側は、銜先環を素環部に連結し、その銜先環に引手環を連結する。向かって右側の銜先環は、素環部に連結するためか、左側のそれに比して径が大きい。通常、素環鏡板付轡についてその連結方法に着目すると、素環部に銜と引手を別々に連結するもの、もしくは素環部に銜を連結し、その銜先輪に引手を連結するものの２つに分かれる。前者は、素環部が引手の動きを銜に伝える遊環の役目も果たすが、素環部は本来面繋に固定されるものであるから引手の動きは銜には伝わりにくく、馬を制御するという役割には不足である。おそらく、素環部は通有の板状鏡板に比して面繋との固定についてはかなりの可動性を持たせていたのではないだろうか。後者は、素環部は轡を面繋に固定する、板状鏡板と同様の役割のみ担い、また引手の動きが直接銜に伝わる。

本例の連結方法は、右側は先述した後者の連結方法を取る。それに対して左側は、騎乗者の意思を伝える引手が素環部に固定されてしまい、引手を動かすと素環部も銜とともに動いてしまう、引手の動きが銜に伝わりにくい。見てきたように、左右の連結方法が異なることから、この轡の銜・引手部は左右どちらかを後から造り替えている可能性が高いと言える。

e 農工具類（第Ⅳ－12図158～173）

主に工具類が充実している。曲刃鎌（158）は刃部が痩せており、柄の取付部に近い部分の残りがよいことから、ここに柄が取り付いていたと思われる。したがって、柄は刃に対して鈍角に取り付けられていたことが予想される。（159）は刃先が欠損しているが直刃鎌の可能性がある。これについても刃部の痩せが著しく、柄に近い部分の鉄本体の残存状況はよい。鉄斧（160）の柄部は折り返す形状のものである。折り返し部分は錆が著しく、詳細ははっきりしない。柄の木質が多く残存しているものと思われる。刃部は柄部に接する部分から刃先まで長方形を呈し、刃先から3.6cmのところで稜があり、刃先に向かって鋭利に尖る。（161・162）は刀子であるが、同一個体であるかどうかはっきりしない。やや鈍角になる片関を呈する。（163）は鑷子になると思われる。折り曲げ部の先端が欠損している他はほぼ完存しているといえる。（164）はヤリガンナである。柄部にあたるところは皮革状の有機質が残存している。（165・166）は鑿状工具と思われる。（165）は先端が尖り気味の円形を呈し、（166）は比較的扁平な円形である。細部の細工をするものであろうか。（165）の先端には木質が付着していることから、鞘

に入っていた可能性がある。（166）は完存する。（167～172）は鉄鋏である。（167・168）は連結部から持ち手の方向の部分である。（169～172）はいずれも連結部から持ち手の部分であると思われる。（173）は鑿である。

ｆ 棺具類（第Ⅳ―13図174～179）

いずれも鉄釘である。釘頭は一方向に、かしめ留めるものである。（179）は先端部の破片である。いずれも木質痕跡については明瞭でない。　（山中）

3　小結

（1）石室平面形態について

前章から明確に判断できなかった石室形態であるが、奥壁から2.4mの右側壁にある立石が石室構築当初の状態を保ったものであるとしたら、これは玄室長2.4m×幅1.8mの右片袖式横穴式石室といえる。羨道部は6.2mにも及び、玄室に比して長い羨道を持つ石室であるといえる。平面形態の把握が埋葬位置を復元するに当たってかなり重要になるので、ここで再度検討する。

まず問題としては玄室と羨道部の境についてである。これは、右側壁部の立石の評価の如何に関わる。この立石は、ここから奥壁側の側壁と比べてみると、側壁１石目ということで他の石とも高さを揃えている。この立石を境に右側壁の石は１段若しくは２段で奥壁の１石目と高さを揃えている。逆に言えば、奥壁は１段目を１石で揃えることを意識し、羨道はただ高さを揃えることを考えているのみであるといえる。相対する左側壁はどうかといえば、一ヶ所２石で１段目の高さを揃えているが、右側壁の立石とちょうど向かい合う部分までは１石で１段目を構成するよう積まれている。この立石が境になることから、ここまでが玄室といった意図で構築されたものと考えられる。

（2）埋葬位置の復元

埋葬は、出土遺物にある耳環が３セット出土していることから、３回の埋葬が行なわれた可能性がある。しかし埋葬状態は、追葬や撹乱のため遺物からは復元できないため、石室内のその他の要素から検討してみる。まず、玄室奥壁寄り床面に見られる敷石の存在である。この敷石は、奥壁から1.9mの範囲に敷かれ、玄室内で収まる。初葬はこの敷石部分で行われているだろう。では、左側壁に沿って置かれた棺台はなんであろうか。この石は、奥壁側は前述の敷石上に置かれているが、もう一方は羨道部にかかって置かれている。棺台の間隔から少なくとも長さ2.5mの棺が置かれたのであろう。出土位置は不明であるが棺材である鉄釘が出土しており、少なくとも鉄釘を使用した木棺が同古墳では使用されていたと言える。

出土遺物である耳環を見てみると、出土状態はセット状態に関係なくばらばらに散在して出土した。遺物報告部分でも述べたが、３セットないしは４セットの耳環が副葬された可能性がある。このことから、追葬が２回以上行われていたと考えると、奥壁の敷石部分、棺台部分の他に少なくとももう１ヶ所の埋葬箇所を想定すると、棺台と閉塞石の間の空間が考えられる。

（3）銀象嵌円頭大刀

富岡前山古墳出土の銀象嵌大刀の象嵌については、保存処理前に確認し作成したスケッチに基づいていくつかの検討が既に加えられている。[(3)] 保存処理前では象嵌は鞘尻部の部分的にしか観察できなかったが保存処理後、柄頭部の方が全体に象嵌が良好に残存していることが分かった。柄頭部と鞘尻部の象嵌の意匠は同じであることから、先行研究に補足するような形で若干の検討を加えてみたい。

前山古墳の銀象嵌は、前述したように亀甲繋鳳凰文である。[(4)] 二重円の環文を支点として三本の平行直線文で取り囲む六角形の亀甲文の中に単独の鳳凰を配する。鳳凰の頭部は、３つの円文を配し嘴表現が取り付く。この３つの円文は鳳凰の目と頭部の羽（トサカ）が簡略化されたものである。円文と嘴の表現が書き分けられていることから、まだ鳳凰として認識して描かれていると言える。嘴の向きは右向きが大半であるが左向きの鳳凰もあり、その配置には規則性はない。翼部は、上方に広げた両翼が結合し、逆ハート形状の表現となっている。胴部と脚部は、逆ハート形翼の表現の下に配された二条ないしは三条の円弧がそれに当たる可能性がある。これは、柄頭頂部の鳳凰文において、空間の余地がないため旋毛状文が省略されているのに、その円弧の表現は省略されていないことから、鳳凰に関係するものと

判断したことからである。また、鳳凰文と亀甲文の間の空間は、左右対称の旋毛状文で埋める。

刀身と柄頭を固定する懸通し孔部分は、その孔を中央に収めるように亀甲文を配置する。その懸通し孔を囲むように二重の環文を配し、その周りを左右対称の旋毛状文で埋める。これについては両面共通である。

柄頭頂部を見ると、同じく二重環文と三本の平行直線文でほぼ四角形に区画し、その中に鳳凰文を配する。ただ、空間が狭く、他の部分に見られるような旋毛状文はない。

差込口の部分、柄頭縁部は突帯状になり、そこに一条の波状文とその空間を埋めるように木の葉状文（C字状文ではない）を配する。

鞘尻部についても表面を覆う象嵌の文様は同じである。ただ、頂部については、側面と明確に面を隔し、側面の亀甲繋文も側面で完結し柄頭部のように頂部と一体とはならない。頂部は残存状況が悪いが二条の唐草文を中心に置き、その外側の空間に柄頭縁部にあるような木の葉状文を配する。

本例の象嵌技法については渡辺氏の論考[(5)]に詳しいことから、そこから製作技法の特徴を列挙する。本例は鉄地にタガネで溝を打ち込み、銀線を嵌入する糸象嵌法である。

また、走査型電子顕微鏡による詳細な観察により、柄頭部の一部では象嵌銀線の繋目が確認できる。その継ぎ目は、繋ぐ双方の銀線の端部を薄くして繋いでいる。また、鳳凰の顔の部分については、中央の円文（目）の溝を掘り込み、銀線を嵌入、それからトサカ部の溝を掘り込み、銀線を嵌入している。このことは、細かい部分についても全体のバランスを確認しつつ、全工程を完結させながら次の箇所へと進んでいることを表している。

次に、象嵌の文様について他例との比較検討を若干加える。

亀甲文は内面に花文を配する亀甲繋花文と、鳳凰文を配する亀甲繋鳳凰文の二種類に分類される。亀甲文の形状は、古相のものは一重の環文に二本の平行直線文を配するが、これが二重の環文に三本の平行直線文へと変わる。

富岡前山古墳例の形状について橋本博文氏は、氏による第三段階に置いている。それは、鳳凰文頭部が奈良県天理市星塚古墳出土（氏による第一段階）の対向双鳳式の鳳凰の頭部と類似するが、埼玉県本庄市秋山古墳群出土例・群馬県邑楽郡板倉町筑波山古墳出土例のように、両翼の表現が逆ハート形に結合することからである。橋本氏の編年によると、第三段階は鳳凰の両翼が結合し逆ハート形を呈するようになり、亀甲繋文と鳳凰文との間には旋毛状文が左右対称的に表現される。旋毛状文の出現がこの段階の特徴であるとされる。また、刀身と柄頭を固定する懸通し孔部分は、その孔を中央に収めるように亀甲文を配置するが、これは橋本氏の第二段階から現れる要素である。

ただ、橋本氏は富岡前山古墳例を第三段階でも後半部分、筑波山古墳出土例と同じぐらいの位置に置いている。しかし筑波山古墳例では、羽と鳳凰の頭部との間の空間を旋毛状文で埋めているが、富岡前山古墳例では、秋山古墳群例や第二段階に置かれている愛知県蒲郡市大森一号墳例と同様、両翼輪郭線にあわせて３～４条の線文を入れる。このことから、富岡前山古墳例は第三段階でも前の方、秋山古墳群例と近似する時期に位置づけられるのではないか。[(6)]

橋本氏は円頭大刀の編年の中で、前山古墳例の位置する第三段階は６世紀末頃としている。前山古墳の大刀は、棺台に伴うような出土状況を示すことから追葬時の副葬品と思われるが、同じく追葬時のものと思われる鐘形馬具については若干時期の遡る時期、６世紀第４四半期のやや古い時期のものと思われる。

円頭大刀を保有する古墳については、本例と同じ６世紀後半代には特に関東地方の小規模円墳が多いことが指摘されている。[(7)] 本例についても直径20ｍ程の円墳であり、大きく齟齬はない。

馬具や装飾付大刀を所有する、遠江・駿河地域の古墳についてその階層性を検討した大谷宏治氏は、少なくとも装飾付大刀のみあるいは馬具のみを所有する古墳が優位に立つのではなく、馬具と装飾付大刀の両方を所有することが優位に立つ大前提であることを指摘している。[(8)] 伊勢・伊賀地域での検討は行っていないため何ともいえないが、富岡前山古墳の立地する同一丘陵には、向山古墳群、下中島古墳群、

神林古墳群など、直径20m弱の円墳（一部方墳）が群集する。発掘調査等により副葬品の詳細が知れるものは少ないが、馬具を保有する古墳は下中島２号墳と小上野墓谷古墳があるが、金銅製馬具フルセットを保有する富岡前山古墳とは差異がある。装飾付大刀の出土は富岡前山古墳のみである。大谷氏の遠江・駿河地域での検討結果を援用するならば、富岡前山古墳は装飾付大刀と金銅製馬具を保有することから、他の古墳に対し優位に立つということが言える。（山中）

（４）山田盆地内での位置づけ

富岡前山古墳が所在する山田盆地は、四周を山地・丘陵に囲まれ、柘植川に合流する服部川が中央に貫流する小盆地で、旧国郡制では山田郡として一郡に独立している。古墳時代後期には盆地周辺の山麓部を中心に横穴式石室を埋葬施設とする多数の古墳が築造された地域である。

盆地で初現の横穴式石室墳は全長37mの前方後円墳の鳴塚古墳で、ＴＫ１０型式に遡る須恵器が伴う。前期以来の首長墳の流れを汲む古墳だが、石室規模は全長９m、玄室長4.4m程度で、同地で展開する群集墳の横穴式石室の規模と変わらない。

この石室は右片袖となり、羨道部の天井石が入口に向かって階段状に高くなる特徴は、近江湖東地域と共通するが、名張市の琴平山古墳の後円部石室や同市春日宮山古墳第２主体などでも認められる。琴平山古墳が６世紀初頭にまで遡ることから、あるいはこのような特色は、伊賀南西部を経由して近江に伝達したことも考えられる。

後期後葉以降、盆地内の横穴式石室は、野台３号墳、下中島２号墳、辻堂古墳など、両袖式のものも現れるが、向山２号墳、横枕２号墳、陣原16号墳、平林２号墳など、片袖式のものが多く、いずれも20m以下の円又は方墳であり、石室全長が９～10m程度、玄室長が５m前後という規模のものがスタンダードである。

しかし、富岡前山古墳の場合、右片袖式で石室の全長は8.6mだが、玄室長が2.4mと寸詰まりな感が強く、しかも袖幅が小さいために、玄門近くの羨道幅が広くみえ、玄室と羨道の境が不明瞭である。事実、棺台石の位置からみても、羨道部にまで当初から埋葬を想定していたかのようであり、玄室と羨道の区別が視覚的にも観念的にも混沌としており、無袖式の石室に近く、盆地内でもかなり異質である。

盆地内の同時期の横穴式石室墳の中では、石室の構造は稚拙ともとれるが、副葬品は優位性を示すなど、際立った個性をもつ。古墳や石室の規模からすると、盆地内では突出した地位にはないものの、大和をはじめとする他地域と積極的な関与をもち、その活躍が認められた人物が被葬者像として浮かぶ。

（竹内）

【註】

（１）渡辺智恵美「耳環小考 - 製作技法、材質からみた分類 - 」（『創立三十周年記念誌』元興寺文化財研究所 1997年）

（２）比佐陽一郎ほか「古墳時代の錫・鉛製耳環について - 福岡平野出土の資料を中心として - 」（『第25回文化財修保存復学会大会要旨集』2003年）、村上隆「古代日本の金」（『遺物の保存と調査』独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所　沢田正昭　2003年）

（３）西山要一「古墳時代の象嵌－刀装具について－」（『考古学雑誌』第72巻第1号　日本考古學會　1995年）、西山要一「二　日本古墳時代の象嵌大刀」（『共同研究日韓古代象嵌遺物の基礎的研究－日韓文化交流の源点をさぐる－』1997年）、瀧瀬芳之・野中仁「埼玉県内出土象嵌遺物の研究－埼玉県の象嵌装太刀－」（『研究紀要　第12号』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1995）、橋本博文「亀甲繋鳳凰文象嵌大刀再考」（『翔古論聚－久保哲三先生追悼論文集』久保哲三先生追悼論文集刊行会1993）

（４）本例の文様形態については、西山要一氏は、「亀甲繋花文」（西山1995文献）もしくは「亀甲繋心葉文」（西山1997文献）として「亀甲繋鳳凰文」とは別に設定しているが、橋本氏の「（中央部の心葉文が）鳳凰の両翼が結合した形態」であるという指摘が妥当であると考え、本稿でも「亀甲繋鳳凰文」と称する。

（５）渡辺智恵美「電子顕微鏡による古墳時代の象嵌の観察」（『元興寺文化財研究　＝(財)元興寺文化財研究所通信』27＝』(財)元興寺文化財研究所　1987年）

（６）秋山古墳群例と本例との前後関係について西山氏は、鳳凰の頭部の表現が本例には見られるのに対し秋山古墳群例では確認できないことから、本例→秋山古墳群例という流れを指摘している。筆者は秋山古墳群例を実見していないため判断できず、両氏の見解を列挙するに留める。

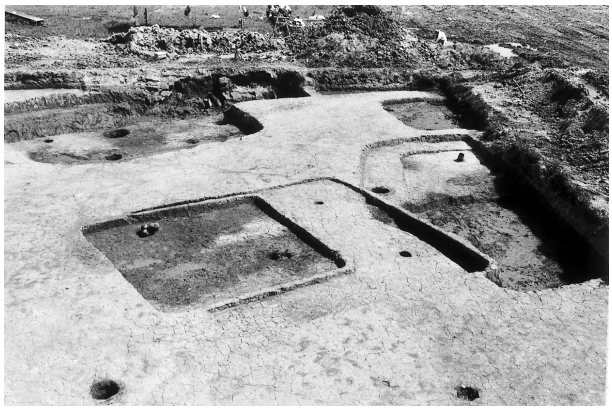
（７）橋本1993文献参照

（８）大谷宏治「遠江・駿河における古墳時代後期の階層構造」（『研究紀要』７　静岡県埋蔵文化財調査研究所 2000年）

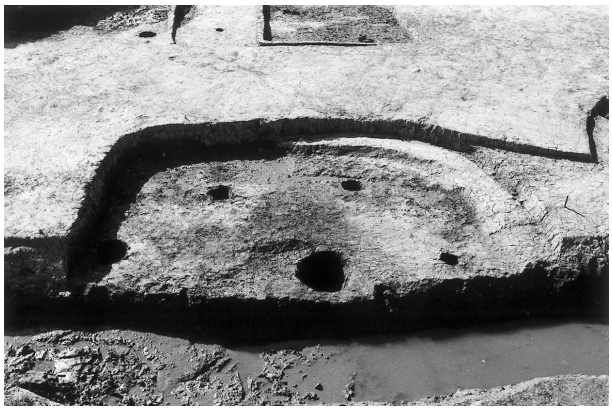
北中溝遺跡　遠景（南から）

北中溝遺跡　全景（南東から）

北中溝遺跡　調査区近景（南から）



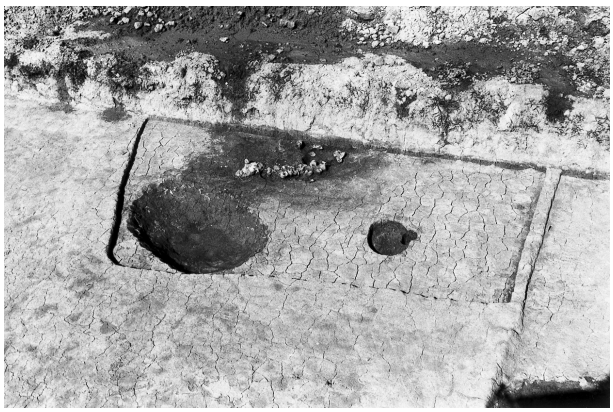
調査区南西部（北から）



SH2（南東から）

SH9（西から）

SH2・4（北から）



SK3（西から）

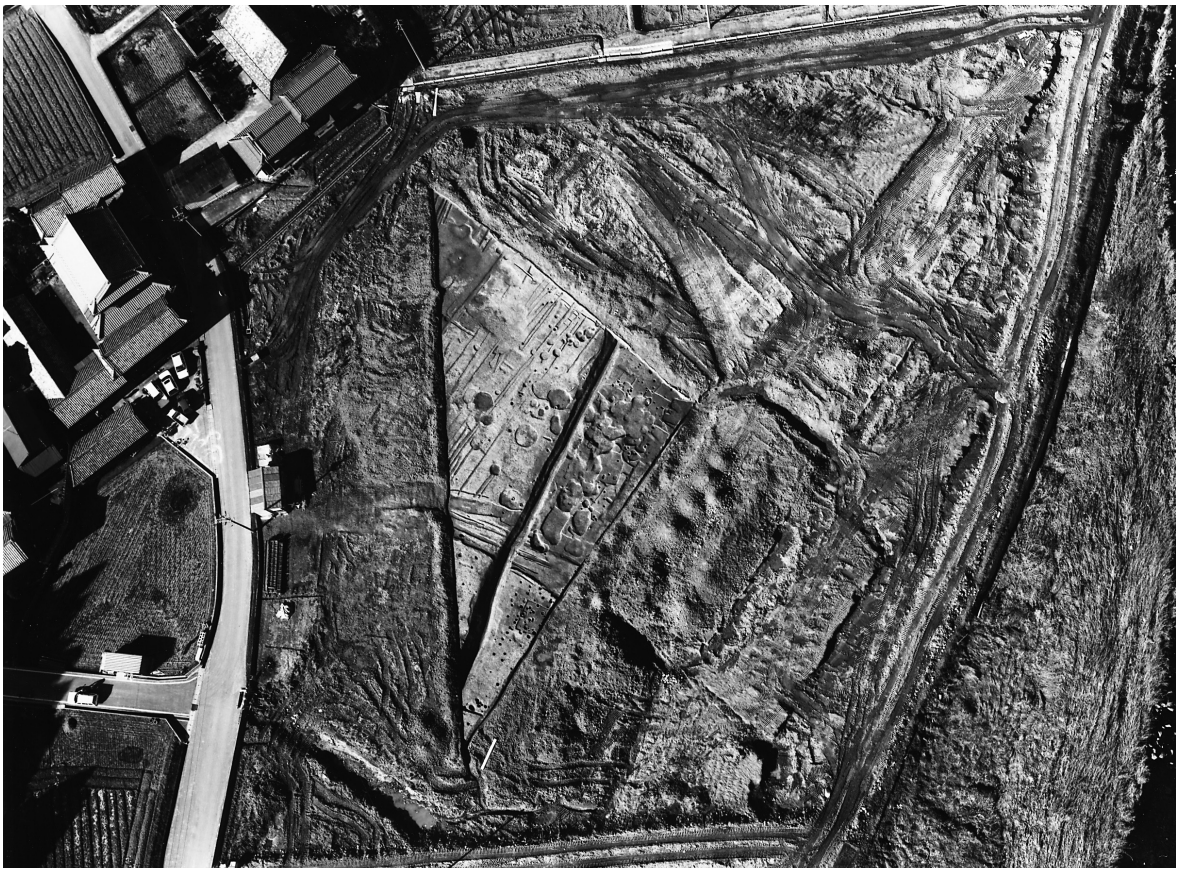
SH5内小土坑出土状況（北から）

SD1（南西から）

高瀬遺跡　遠景（南東から、比土小盆地と美旗古墳群を望む）

高瀬遺跡　遠景（北西から、左の山塊が竜王山、左奥が阿保小盆地）

高瀬遺跡　近景（北西から）



調査区全景（上空から）

小上野墓ノ谷古墳全景（南東から）

中世火葬穴群全景（東から）

小上野西谷遺跡Ａ区　全景（南東から）

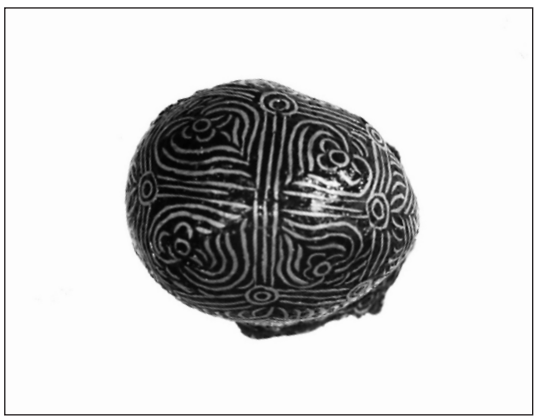
小上野西谷遺跡Ｂ区　全景（南東から）

富岡前山古墳全景（上から）

富岡前山古墳全景（東から）

円頭大刀把頭（右）・鞘尻（左）象嵌（側面）

円頭大刀把頭象嵌（側面）



円頭大刀把頭象嵌（頂部）

報　告　書　抄　録

ふりがな	いがのこうこしりょう１
書　　名	伊賀の考古資料１
副　書　名	
巻　　次	
シリーズ名	研究紀要
シリーズ番号	１６－３
編著者名	穂積裕昌、仁保晋作、山中由紀子、大川　操、竹内英昭
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所　在　地	〒515－0325　三重県多気郡明和町竹川503番地　　TEL.0596-52-1732
発行年月日	2007年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	東経	北緯	調査期間	調査面積	調査原因
きたなかみぞ 北中溝遺跡	いがしえんとくいん 伊賀市円徳院	216	d	136° 48′43″	34°48′ 43″	198705～ 198706	800㎡	昭和62年度県営圃場整備事業
たかせ 高瀬遺跡	いがしひど 伊賀市比土		a1137	136° 9′24″	36°40′ 3″	19871105～ 19880114	1500㎡	
こうえのはかのたに 小上野墓ノ谷古墳・小上野墓ノ谷遺跡	いがしみどろ 伊賀市真泥		e	136° 12′4″	34°45′ 43″	19850715～ 19850826	600㎡	昭和59･60・62年度農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業
こうえのにしたに 小上野西谷遺跡	いがしひらた 伊賀市平田		e	136° 12′4″	34°45′ 36″	19870506～ 19870626	760㎡	
とみおかまえやま 富岡前山古墳	いがしとみおか 伊賀市富岡		e8028	136° 12′42″	34°45′ 23″	19840903～ 19850126	250㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北中溝遺跡	集落跡	古墳前期	竪穴住居、溝	土師器	
高瀬遺跡	集落跡	古墳中～後期	竪穴住居、掘立柱建物、大溝	土師器・須恵器	
小上野墓ノ谷古墳・遺跡	古墳	古墳・中世	横穴式石室、小石室	馬具、武具、工具、玉類、土師器、須恵器、瓦器	
	中世墓	中世	火葬穴、土坑	土師器	
小上野西谷遺跡	集落跡	古墳前期	竪穴住居、溝	土師器	
富岡前山古墳	古墳	古墳	横穴式石室、小石室	銀象嵌円頭大刀、金銅装馬具、武器、農工具、玉類、土師器、須恵器	

要　約

北中溝遺跡＝古墳時代前期の集落。
高瀬遺跡＝古墳時代中期から後期の集落。初期須恵器も出土。
小上野墓ノ谷古墳＝６世紀末頃の横穴式石室。古代及び中世に石室を再利用。
小上野墓ノ谷遺跡＝中世の火葬穴を35基確認。
小上野西谷遺跡＝古墳時代前期の集落。
富岡前山古墳＝墳丘に列石をめぐらす6世紀末頃の横穴式石室墳。亀甲文の銀象嵌をもつ円頭大刀や馬具などの豊富な鉄製品を副葬していた。

伊賀の考古資料1

研究紀要第 16 － 3号

2007（平成19）年３月

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター

印　　刷　株式会社　アイブレーン